

中国の外交戦略

遠交近攻

〔日中国交回復30周年〕

中国の外交戦略「遠交近攻」策の目次

「まえがき」	1	「定一尊」(テイイチン)	36
「外交の変遷」	4	「文化大革命」の10年	41
「中国の伝統的外交戦略」	5	「批林批孔」(ヒンピョウ)	43
「遠交近攻」策(エンコウキンコウ)	5	「周恩来の死」と	
「合従連衡」(ガツショウレンコウ)	8	「天安門事件」	44
「混水摸魚」(コンスイモギョ)	10	「朱徳」(シュトク)	44
「偷梁換柱」(トリョウカンチュウ)	12	「鄧小平」(トウショウヘイ)	45
「反間の計」(ハンカンノケイ)	13	「江沢民」(コウタクミン)	49
「走为上」(ソウイジョウ)	15	「日中関係の現在」	52
「秩序なき20世紀前半の 中国大陸」	17	「日中国交正常化30年」	54
「孫文」(ソンブン)	19	「靖国神社問題」	56
「清朝末期の内訌外患」(ナイコウガイカン)	21	靖国神社の実態の無知	56
「難局に登場した蒋介石」(ショウカイセキ)	23	筈に対する日中の相違	57
西安事件(セイアンシケン)	25	成事は説かず(セイジツカズ)	58
剿共戦争(ソウキョウセンソウ)	26	右顧左眄(ウコザン)	60
国共合作(コウキョウカサツ)	28	靖国とは	62
八路軍(ハチロクジン)	28	国の弥栄(イサカ)を祈る	63
日中戦争開始	29	天皇の靖国神社	
「内戦勃発」(ナイセンボツパツ)	33	御親拝を冀う(コイネガ)	64
「中華人民共和国の成立」	35	「教科書問題」	65
「20世紀後半の 中華人民共和国」	36	中国歴史教科書の中の日本	66
「毛沢東」(モウタクトリ)	36	各国の義務教育の特色	67
		中国	67
		中国の学校教育の現状と 歴史教育	70
		「南京大虐殺事件問題」	72
		「ODA」(政府開発援助)	77
		「瀋陽日本総領事館事件」(シンヨウ)	79
		「あとがき」	86



“「椿」は中国では長寿・長命を祝う花(牡丹)”

『まえがき』

「小壮幾時ぞ、老いを如何せん」という言葉は、漢の武帝（後漢）が述べた辞で、人間は若くて元気のよい時は短く、すぐに老衰の時が来るという意味である。そういう私も傘寿を既に超えて病の上に病が重なり、「日西山に薄る」、即ち身の衰えを強く感じ、氣息奄々として余光（残光）に照らされている状態である。

特に大正生まれの我々は彼の悲惨な戦争に遭遇し、挙句の果ては我国開國以来の痛ましい敗戦を身を以て体験した。そして焦土と化した灰燼の祖国日本を苦心惨憺して復興させ、世界に類を見ない経済再建を成し遂げたのも我々年代が主体であり、誇りに思っている。

今ここに改めて失われた時を振り返り、自らの心の旅路を省みると、「人生は朝露の如し」で、日が出ると忽ち消えてしまう朝露のように儚いものであった、と感じている。ビルマ戦線で左頸動脈部に受けた重傷の疵痕さえも消え失せてしまった。六〇数年という歳月の経過は「邯鄲の夢」「胡蝶の夢」「人生は幻化に似たり」と言った夢物語のようである。

この世に生を受けて以来、人生航路の中で最も強烈な印象として心に遺るものは、支那大陸の（支那は地名）数々の思い出である。それも今となっては「懐かしさ」ばかりで、彼国の人々に対して「憎らしさ」などは微塵もない。個々の彼らは私にはほのぼのとした余情（心に残って消えない情緒）を与えている。

最初に大陸に足跡を印したのは昭和13年(1938)の暮れであった。酷寒零下30度以下という満洲(曠野)の大氷原を走る馬の吐く息は白く、鼻先に氷柱をぶら下げて走る光景は「出る息は入る息を待たず」という諺の通りであった。それは人の生と死は一瞬にして分かれるということで、血腥い古戦場は人命の儚くて当てにならないことを教えていた。

昭和15年秋、大陸を流れる大黃河流域の戦場に駒を進め、約3年間、幽明界（現世と冥土）を彷徨う修羅場の敵弾下に身を曝し、戦いながらも天の命を拾って万死に一生を得た。しかし多くの犠牲者を出したことは誠に申し訳なく慚愧に堪えない次第である。

「黄梁一炊の夢」（人の一生のうちで素晴らしい時期は短い）と感じた大陸は又、人生の無常を常に感じさせてくれた。その一方、規模の雄大さは「吾れ我れを喪う」というようなスケール

が大きく、自分の存在までも忘れさすほどの大地でもあり、中華思想の片鱗を知ったのであった。

黄河流域は中国文明発祥の地で古代中国の「殷」(紀元11世紀)の地でもあった。そのような諸々が原因となって私にも歴史的な遺産への親しみが自然に発生し、戦時中から私は中国の古代史にも少々ながら興味を抱き始めていた。特に前宋(990-1279)の都であった「開封」(当時は河南省都)に駐留したときには、軍務の余暇を利用して開封歴史博物館に興味津々として精励格勤して訪れたことが、懐かしく想い出される。

時は流れて1945年に終戦となり、1949年に中国の内戦が終結し、中華人民共和国が誕生した。しかし1972年の日中共同声明で外面的には国交が回復したものの、紆余曲折を経て実際に日中平和友好条約が締結されたのは1978年10月であった。

平和条約が締結されたと言うものの一般日本国民の自由な渡航は許されず、申請してから長い期間の厳重な審査を経て初めて入国が許可されたのであった。

入国審査に漸く合格した私は長期間の空白を埋め戻そうと、締結2年後の昭和55年(1980)に雲南・広西省へ、昭和56年(1981)に河南省全域へと、毎年、慰霊巡礼を兼ねて訪中し、以来18回にもわたり中国全土を隈無く踏破して見聞をひろめ、日中平和の旗の下に時代の変遷を観察してきた積もりである。

その当時の中国人の生活程度は戦争当時と少しも変わらず、我国の大正時代の生活程度で極貧状態であった。しかし対日の態度は極めて友好的で、日本に憧れる心情は非常に高く、老若男女を問わず、「一衣帯水」とか「中日友好」、「唇齒輔車」(くちびると歯のように密接な利害関係のあること)の文字を紙に書いて出迎え、歓迎一色の微笑ましい情景を呈していた。

一方、中国首脳は雲上の人であった。中国の歴代王朝は革命の王朝で、天子は泰山(山東省)に登って「封禅」という儀式を行って天に善政を誓った。しかし共産党政権の国家首席等は封禅の儀式は実施しなかったが、彼らには「大人」の風格が備わっていた。

日本の田中角栄総理と毛沢東国家首席との間で日中国交が回復された時、田中総理は戦争中は大変ご迷惑を掛けましたと謝罪したところ、否、中国共産党は日本の御陰で政権が獲得できたのだと言われたと伝えられている。それほど毛沢東は「大人」(大物、風格者)であったのである。

中国共産党との内戦に破れた国民党の蒋介石総統は、終戦当時、「怨みに報ゆるに徳を以てす」
(老子)と述べ、敗れた日本軍を優遇したことは有名である。やはり最高責任者は徳の備わった
大人物であり、「世は情」(人がこの世を生き抜くためには、何といっても思いやりがなくでは
ならない)だと範を示した。中国戦線にあった敗者日本軍将兵の命の大恩人である。

一方の内戦に勝利した毛沢東を始め、続く鄧小平の最高実力者たちは、苦戦に苦勞を重ねて中
華人民共和国を建設した。しかし私が中国戦線に参加する以前に彼らは、蒋介石軍の剿共作戰
(共産軍の掃討作戰)に敗れ、3年間近くにわたる苦惱の「長征」(実質的には総退却)を経験
し、なお日本軍との戦争に引き続いて4年間の内戦を身を以て体験している。苦闘の連続から解
放され彼らこそ、平和を請い願う心情は誰よりも強烈だったと推察している。

中華人民共和国が建国されてから星移って、「年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず」
の詩の通り、最高権力者の総書記は第三代目の「江沢民」氏に交替した。しかし彼は「長征」を
始め日本軍との戦闘や終戦後の内戦の経験は全くなく、温室育ちと言っても過言ではない。先輩
達の尽力と日本を始めとする世界各国の支援に依り中国の経済は安定成長した。それを彼は自分
の力で発展したと勘違いしており、彼の言動は酷すぎて目に余るものがある。特に目の上の瘤と
思う「日本叩き」が始まり、次第に中華思想と独裁国家の馬脚を露わして化けの皮が剥がれた。

今日の中国の社会主義市場経済の発展を、経済に素人の私の目から眺めても、社会主義の原則
と根本的に矛盾していると思っている。社会主義市場経済をスローガンに掲げているのに拘らず、
刻一刻と共産主義思想が崩壊して中共の権力の弱体化が進行しているのではないだろうか。その
上に国民の間に自由思想が蔓延し一種の危機感を感じていると洞察している。

これらの共産主義の衰退を隠匿するため、国民の眼を国外に指向させなければならず、その外
交戦略として採用されたのが『遠交近攻』策であった。この戦略こそが中国の戦国時代からの伝
統的な外交政策である。遠い国と親しくして近くの国を攻める攻撃目標が日本に指向されたので
ある。江沢民が総書記に就任以来、日本に対し「靖国神社問題」「歴史問題」「教科書問題」
「東京裁判問題」「南京大虐殺事件問題」「ODA問題」「領土問題」「瀋陽総領事館問題」等
際限がないほど我国を指弾してきた。そこで忿懣やる方ない気持ちで鬱憤を晴らして見たい。

『外交の変遷』

現在一般的に用いられている「外交」とは、国際関係を交渉によって処理することである。つまり外交とは、交渉という点に重点があり、戦争とか、宣伝とか、経済手段などと共に、国家が対外目的を達成するために行使する手段の一つである。しかし外交はしばしば外交政策の意味で使用され、そのように理解されているようだ。

我々が学んできた長い世界の歴史を眺めてみると、先ず第一に「宮廷外交時代」が思い出される。この当時の外交政策の目的は、国王の版図の拡大であり財源の増大であって帝国主義が跋扈した時代であった。しかし第一次世界大戦後は新しい外交の時代が開幕した。その原因は一般世界の国民の国際問題への関心が増大したからであり、職業外交官や軍人のみに任せてはおけないという風潮が生まれたからであろう。

そこで公開外交ということで具体化されたのが「会議外交」であった。これは多数国間外交としての特徴があった。その会議外交の典型的なものとして「国際連盟」に於ける外交があった。我が国の松岡洋右外相の日独伊三国同盟締結や国際連盟脱退などは記憶に新しく有名である。第二次世界大戦後の国際連合を眺めてみると、外交問題は増加するばかりで国際相互依存度が高まった証拠であった。それは「経済外交」「文化外交」から「砲艦外交」など、外交問題は複雑多岐におよび、兵器体系（核兵器）の革命的变化は「革命外交」の様相を帯びてきている。

政策遂行手段として軍事力を欠いた戦後の日本の外交は、主として経済外交の性格をもち、戦前の軍事力にたよる外交とは明らかな異なっている。

一国の外交政策のあり方は、国内政治情勢とも関連する。国内政治が不安定であつたり、国民の政治権力への不満が強かったりすると、政府は国民の目を国外に転化させるために、対外的な強硬政策あるいは冒険政策に訴えることが起きる。これは最近の中華人民共和国の外交政策に、その例を見ることができると私は思っている。

その他、外交政策の要因として、その国のもつ地政学的条件や歴史的経験といったものもあげることができる。更に外交政策の形成には政治の最高指導者の価値観、判断力といった資質等が関係し、国家は個人と同様に独自の個性を持っていると言えるだろう。

『中国の伝統的外交戦略』

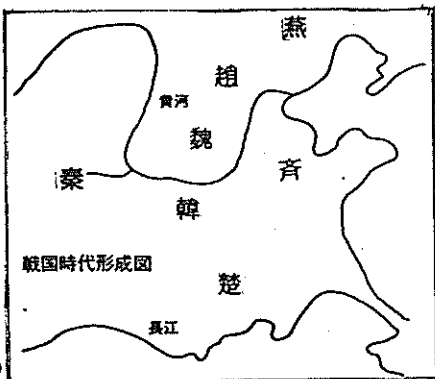
「遠交近攻」策 (遠く交わり近く攻む)

孫子の兵法は、戦わずして敵を屈伏させることを最善としている。「戦わずして勝つ」ことは武力で勝つのではなく、策略で勝つということである。「力」でなく「頭」を使うことで、中国は古来からこの戦い方を心がけ、それについて膨大な知識や技術を貯えてきた。これは戦争の策略としてだけでなく、「内政外交」のすべてを含んだ人生を生きていく処世の知恵であった。

「戦わずして勝つ」にはどうすれば良いか。それには二つの方法が考えられる。①は外交交渉によって相手の意図を封じ込める。②は謀略によって相手の力を削いで内部崩壊に導くことである。その謀略の一つが「遠交近攻」策である。中国の現在の情勢は前記した通り、政治権力への不満が強まって国内政治が不安定化している。そこで小さな島国だが経済的に発達した羨ましい国で、距離的に最も近い先進国「日本」を攻撃目標に選ぶのは当然な外交戦略であると言える。

「遠交近攻」策は中国戦国時代の歴史を繙けば明瞭だ。これは「戦国策」の「秦・下・昭襄王」「史記」の「范雎・蔡澤列伝」に出ている文章で、「秦」の外交戦略の国是、ついに天下を統一した指導原理の役割を果たしたのであった。(下図は中国の戦国時代の七大強国の関係図)

秦の始皇帝が対立する他の六ヶ国を次々に滅ぼして天下を統一したときの遠交近攻策は、始皇帝から三代前の昭王の時代に話はさかのぼる。当時、秦は近くの韓、魏の両国をとび越して、遠方の齊を攻撃しようとしていた。それを知って、范雎という人物が「遠交近攻」策を進言した。



彼は次のように言って昭王を説得した。「かつての齊の国にこのような例がありました。湣王の時代、南方の楚に攻めこみ、さんざん楚軍を撃ち破って千里四方もの領土を拡張したことがありますが、結局、手に入れた領土をすべて手放してしまっただ。なぜだろうか。遠方の楚を攻撃している間に、隣国である韓、魏両国は戦力を充実させ、足もとを掬われたからです。諺に「賊に武器を貸す」とあるのは、このことでないでしょうか。

このことから理解できるように、逆に遠国と結んで近隣を攻めることこそ、最上の策と言える。
一寸の土地を得ればその一寸が、一尺の土地を得ればその一尺が、王の領土となるのです。これ

を捨てて遠方の齊を攻めようとするのは、見当違いも甚だしいと言わざるをえません』

やがて秦は范雎のこの進言を国是として東方経路に乗り出し、始皇帝の時代、まず韓を滅ぼし、
次いで趙を、さらに魏、楚、燕と、近い国から次々に併合し、最後に齊を滅ぼして天下の統一を
成し遂げたのである。（前頁の戦国時代の関係図を参照）

『遠交近攻が外交戦略に採用された例』

ベトナム戦争当時、ベトナムはソ連（当時）と手を結び、物心両面にわたってソ連の援助を受
けた。その狙いはインドシナの制圧と、中国の重圧に対抗するためである。ソ連にしても、遠く
のベトナムを支援することは、国境を接する中国に対して有力な牽制になるからであった。

一方の中国もさるもの、ベトナムに重圧を加えるため、さらに南方のカンボジアを支援し、さ
らにソ連を牽制するためには、あえてアメリカへの接近も辞さないものであった。

また、カストロのキューバにしても、アメリカの重圧に対抗するため、ソ連と手を結んでいる。
ソ連もまたアメリカに対抗するため、キューバに対する支援を惜しまないものである。

しかし外交戦略には「遠交近攻」の逆もある。近隣諸国と手を結んで、より遠方の強国と対抗
する策である。だか、国境を接する国というのは、長い歴史的な因縁が絡んでいて、お互いに対
抗意識が強く、概して仲の悪いことが多い。そこに「遠交近攻」策が現在でも有効性が失われて
いない理由があるようだ。これは外交・軍事両面併用の策だと言える。

『中国の対日「遠交近攻」策』 『君子の交わりができるか』

平成四年十月、天皇が歴史上初めて訪中した。天皇の「政治利用」に私も懸念した一人であっ
た。しかし国交樹立二十年の節目の天皇訪中は、日本国民の間では「象徴」であり、諸外国では
国家元首と見做されている関係から、友好親善に寄与すればと成功を願っていた。

天皇訪中時の「お言葉」に関して日本国内でさまざまな評価があった。中国当局はこれで国民
に対する説得のきっかけを得て、対日外交担当者が内部談話で、「過去の歴史問題に関し、今後
日本側が進んで議論を起こさなければ、我々は外交上それに触れることを控える」と話した。

中国の最高実力者の弁を代行する対日外交担当者の言は「中華思想」そのもので、日本を含めた周辺諸国を東夷・西戎・南蛮・北狄などと蔑称する発言と同様であった。「目は毫毛を見るも睫を見ず」即ち、他人の過ちは小さなことでも気が付くが、自分のことになると分からない、と言う傲慢さが見え見えであった。

平成十年（1998）十一月、来日した江沢民中国国家首席は、我が日本国民に何とも言えない不快感を残して帰国していったことを、気骨ある日本人は骨の髄に刻んで生涯忘れられない。

既に日本は数え切れないほど、半世紀以上も前の戦争に対し謝罪を繰り返してきたが、今回もまた江沢民は日中共同宣言に盛り込むように強硬に要求した。しかし日本の小渕首相は口頭での謝罪だけに留め、「一寸の虫にも五分の魂」があると文言化を拒絶した。天晴れであった。

しかし江沢民は宮中での晩餐会の答辞の中で、「過去の日本の侵略」を持ち出して述べた。この執拗さに政治家だけでなく一般国民も辟易し、不快感を抱いたのは当然であった。

更に江沢民は宮中晩餐会の出席に際し国際慣例を無視し、こともあろうに「中国革命の人民服」（平服）を着用し、敢えて天皇・皇后を前にして、これらの諸問題に触れたのであった。こうした彼の無礼極まる態度が日本国民の対中感情を大きく損なったと言わなければならない。

1997年10月、江沢民が訪米した際に、「第二次世界大戦時に於ける米中の同盟関係」をさらに強調していた。このことは、アジアに於ける米中が戦略的なパートナーとして主導権を握り、日本の影響力を出来るだけ抑え込もうとする意図が透けて見えていた。

上記した江沢民の宮中晩餐会に於ける言語道断な振る舞いや、訪米の時に述べた米中接近策は正に「遠交近攻」策の現実的なもので、日中友好親善の精神は微塵もない。

江沢民は常に「歴史認識が大事だ」と日本に強く要求している。それは中国国内向けの発言だ。彼らの常套手段は「文攻武嚇」（先ず紙や言葉で日本は軍国主義の復活だ、中国敵視だと脅かし、次は時々ミサイルなどを発射すること）と、「遠交近攻」であることを忘れてはならない。

中国の指導者諸君に申し上げたい。あの犬猿の仲だったフランスとドイツ両国は、現在は同盟関係にあるではないか。普仏戦争から第一次、第二次世界大戦を戦った怨念関係をさりと解消し、仏のドゴールと独のアデナウアーの両巨頭は新しい関係を結んだではないか、と。

「合従連衡」 (古代中国戦国時代の外交戦略の一つ) (5 頁地図参照)

「合従」とは「縦」(従)に連合することであり、「連衡」とは「横」に連合することである。
 転じて、その時々^{テン}の利害に応じて、同盟あるいは団結したり、離れたりする政策のことである。

これは(「史記」^{シキ} 蘇秦伝、張儀伝)にある有名な辞で、我々年代の者は旧制中学生時代の漢文で習ったもので、「遠交近攻」策と共に忘れられない辞である。子孫のために概要を記す。

蘇秦と張儀は中国戦国時代中葉(紀元前四世紀後半)の人物で、中国全土を三寸の舌と、二本の足でかきまわした策士であった。三寸の舌とは桁外れの「能弁」、二本の足とは歩き回った国が、当時の戦国時代の七大国(燕・齊・趙・韓・魏・楚・秦)にわたったことを意味している。

蘇秦は周の王や秦の国を訪ねて自分の意見を述べたが受け入れられず、趙の国でも無駄足であった。そこで最北端の燕の国へ出かけて弁舌をふるった。そこで彼の弁舌が功を奏し、車馬金帛の贈り物を受けた。蘇秦が燕王に進言した政策を『合従』という。

これは「従に合わせる」という意味で、燕と趙と齊と魏と韓と楚が縦(従=南北)に手をにぎって最大強国の秦に当たろうというのである。これらの六国は急激に強大化していた秦を恐れていた。蘇秦はこの恐怖心をうまく操り、ぜひ合従して共同防衛を説き、そのまとめ役を自分がしようと申し出た。

燕王から合従のことを任されると、次に趙を訪ねて成功し、韓、魏、齊、楚の順で回り歩いた。蘇秦は各国王を口説きおとし、六国の宰相になって合従の盟主にまつり上げられた。

一方の張儀は秦に留まって才能を認められ、宰相へと出世した。彼は『連衡』の策を取った。つまり、秦と六国のどこかと同盟を結んで「合従」を破り、六国をばらばらに孤立させ、孤立した国を各個に撃破し、あるいは威圧して、秦に対して臣下の礼を取らせ、やがて併合するという策である。

秦とどこかの国と同盟を結ぶのは、六国の合従に対して、「衡(東西)に連なる」かたちとなるので、「合従」に対し「連衡」と言い、張儀は後に蘇秦の合従を完全に崩壊させてしまった。

江沢民の訪日のときの態度を見ても明白のように、中国の指導者層は明確な外交戦略、国家戦略を持っている。日本は仮想敵国にされていることを政治家たちは認識すべきである。

外交音痴の日本と異なり中国は外交大国で、したたかさ^{オンチ}と巧さ^{コト}は昔から定評がある。我々が参加した日中戦争直前の中国は、英米と手を握^{ウマ}って日本製品の不買運動を始めとして「排日侮日」運動を宣伝し、戦争開始と共に援蔣ルート（蒋介石の国民党軍を支援）を通じて米英から軍事援助を受けて日本と戦った。米英も本当に狡い国で、日本が日露戦争に勝って強くなりすぎたと感じて日本叩きを始めた。これを巧く利用したのが蒋介石国民党であった。（援助ルートはインドシナ半島・ルートとビルマ・ルートであった）

中華人民共和国の建国初期は連ソ反米、70年代は連米反ソであった。それは片方の軍事大国からの軍事的脅威から身を守るために選んだ外交戦略であった。振り返ってみると、中華人民共和国が建国してから、周恩来は外交の天才ぶりを発揮してきた。1971年の米中接近、72年の日中国交樹立の外交旋風は記憶に新しいものだ。鄧小平も伝統外交を堅持して米国の支持を獲得している。また「一国二国体制」を打ち出して香港返還を実現した。80年代初め、経済改革・開放政策の展開に伴い、独立自主外交を改めて宣言した。

80年代以来の中国外交の変化は、かつては主要敵を立てて、それに対する「統一戦線」式の「合従連衡」の戦術を多く使ったのに対し、それ以降は、いかなる大国とも同盟関係を結ばないことを宣言し、米国、ロシア、印度、ベトナムなど、かつての紛争国と相次いで関係を改善した。

しかし江沢民時代になってから、軍事力を始め国力が充実してくると、一方的に自国の周辺に領土を拡張して緩衝地帯を確保しようとしている。中国は米国、日本、欧州諸国に資本、貿易、技術などで非常に大きく依存しており、本来なら、これらの諸国との関係を重視して、友好関係を維持しようとするのが合理的なはずである。しかし実際には、日米欧に対抗して、北朝鮮、パキスタン、イラン、イラク、シリア、セルビアなどを軍事的、政治的に援助し、これらの国々と連携し連帯するのは理解できない。

江沢民はクラウゼヴィッツの言った「外交は別な手段による戦争にはかならない」と思っているのだろうか。外交という言葉には「権謀術数」とか「遠交近攻」、「合従連衡」などと共に、非道徳的な手段を是認しているとしか考えられない。日本は島国育ちの環境から、大陸の諸国のように取ったり取られたりした経験不足から、外交大国になれないのだろうか。全く腑甲斐無い。

「混水摸魚」 (水を混ぜて魚を摸る)

『水を混ぜて魚を摸る』と言う策も中国古代からの外交戦略の一つで、「摸」は「手」と「莫」からなり、音符の「莫」は「さぐり求める」という意味である。

「混水摸魚」とは、相手の内部混乱に乗じて勝利を収める戦略をいう。相手に混乱が無ければ、まず、混乱を起こすように工作し、それに付けこんで始末する。この策略で肝心なことは、次の二点である。①は、相手の判断をまどわすような攪乱工作をし、指揮系統を乱しておいて、それにつけ込む。②は、相手の中にも、さまざまな勢力や派閥があるが、混乱の中で最も動揺している部分に狙い付けることである。

日本国内で中国と問題となっている靖国問題、歴史問題、教科書問題、領土問題、東京裁判A級戦犯問題、南京大虐殺問題、ODA問題、瀋陽総領事館問題、核問題等に関し、反日本的な自虐思想のマスメディア、作家、与野党勢力の一部、文化人と称する曲学阿世の輩を利用して混乱させている中国の工作は、正に「混水摸魚」の典型的なものである。

実戦でも私は体験している。昭和16年(1941)5月1日～6月15日間、中国・山西省を中心に行われた「中原会戦」(会戦とは彼我ともに軍以上の兵团によって戦う作戦)の大包囲作戦に於いて、混水摸魚の策略で敵の内部に混乱を起こさせ、大戦果を収めたことがあった。

山西省と河南省との省境線に当時は万里の長城に似た堅固な城壁が築かれていた。我が師団はこの長城線にある一本の通路の「封門口」を突破しなければ、山西省に進攻できなかった。まず師団に配属された騎兵旅団が快進撃で突進したが、封門口の敵の堅陣に阻止されて人馬ともに大犠牲を被った。そこへ辿りついた我が歩兵聯隊は速やかに展開し、間隙を突破して山西省内に雪崩込んで追撃作戦に移った。しかし以前から準備していた陣地を利用し、徹底抗戦する敵に我が歩兵聯隊の猛烈な攻撃も頓挫してしまった。そこで準備していた「混水摸魚」を取行した。

聯隊では今までの作戦で捕虜にしていた中国軍の中から優秀な人材を選び、徹底して日本軍に協力し忠誠を誓うように教育訓練をした。その帰順兵(投降部隊)約30名に中国語の達者な日

本兵を約15名を加え、特殊部隊1ケ小隊(約45名)を編成して準備していた。

戦線が膠着状態(膠のように引っ付いて動かない状態)となっていた時、この特殊部隊をこの

コウチャク オンミツ シンニウ トクシュ ショウカイセキ
膠着戦線の敵の中に隠密のうちに侵入させた。この特殊部隊の隊員の服装は敵である蒋介石軍の
キツ ソウビ ショウカイセキ ショウヘイ
兵士と同じ服装で気付かれず、装備する兵器も敵と全く同一であった。敵軍の蒋介石の将兵は日
カンランコウサク ボウリヤク ハンベツ テッテイ カク
本軍の攪乱工作の謀略部隊とは判別がつかない。その上、昼間は徹底して敵中に隠れ、夜間に入っ
オンミツ
てから隠密に行動開始したのであった。

トクシュ キジュン タンノウ ソウダウ カイワ
特殊部隊の隊員は帰順兵も日本兵も全員が中国語は堪能だったが、遭遇した時の敵軍との会話
キジュン タントウ ナマリ サイシン ハラ
は主に帰順兵が担当した。それは日本兵の中国語には訛があるからであり、細心の注意を払って
カク ソウサク ハダ
敵中に隠れながら敵情捜索に励んだ。

ミダ サ克蘭 タイキヤク
戦線は入り乱れて錯乱し、前進する敵の部隊があるかと思えば退却する敵もあり、いずれか敵
ハンベツ センキョウ ク ガンキョウ コウゲキ テイコウ
か味方かも判別がつかない戦況が繰り広げられていた。その中で頑強に日本軍の攻撃に抵抗を続
フイ キュウシュウ コンラン オ タイキヤク ギ デンダツ
けている敵部隊には、後方から不意に急襲して混乱状態を起こさせ、或いは退却の偽命令を伝達
カクラン コウケン コンスイボギョ
して攪乱させ、我が日本軍の攻撃に多大の貢献をした。これが私が経験した混水摸魚の一例だ。

『ヒットラーの反撃』の「混水摸魚」作戦の例

ノウコウ オ ツ タイセイ バンカイ
第二次世界大戦の末期、敗色濃厚な状態に追い詰められたヒットラーが、一気に退勢を挽回し
ようとして決行したのが、「アルデンヌの戦い」である。1944年12月、ヒットラーはフラ
キュウリョウ シュウケツ ソウハンゲキ
ンス国境に近いアルデンヌの丘陵地帯に数十万の兵員と、戦車二千輦を集結させて総反撃に出た。

タンノウ センバツ
このとき、ドイツ側は英語に堪能な将兵二千人を選抜し、アメリカ軍の軍服を着せ、ぶんどっ
ブンジョウ センニウ マギ コ
た戦車やジープに分乗させてアメリカ軍の後方に潜入させた。彼らはアメリカ軍に紛れ込んで交
シャダン セツダン カクランコウサク
通線を遮断し、通信線を切断して攪乱工作を行い、ある者は殺したアメリカ軍兵士になりかわっ
セイリ コンラン
て通過車輛の整理にあたり、相手の交通や輸送を混乱させた。さらに、彼らの一部はマース河岸
キュウリョウ ダッシュ ムカ
まで進出して橋梁を奪取し、主力軍を迎える準備工作までしていた。

カウヤク シンケイトウ コンラン オチイ
この特殊部隊の活躍で、一時、アメリカ軍の指揮系統は大混乱に陥った。

ハバ ミ ムス
結局は、ドイツ軍の主力軍が進出を阻まれたため、彼らのせつかくの活躍も実を結ばなかつた
コンスイボギョ ネラ
が、この作戦もまた「混水摸魚」を狙ったものである。

ソンシ キセン セイ ハンタイゴ コウハツ
『孫子の兵法』の「機先を制す」の反対語である『後発して人を制す』、進んで攻勢をとらず、
ジャクシャ アイテ コ スキ イチゲキ コンスイボギョ
弱者だと見せて相手が飛び込んでくる、その隙を一撃する作戦も「混水摸魚」であろう。

「偷梁換柱」 (梁を偷み柱を換う)

「偷」は「人」と「偷」からなり、音符の「偷」は、木をくりぬいた丸木舟の意味。中の物をそっと抜き取る人、盗むの意味を表している。「偷」とは即ち、こっそり盗むことである。

「偷梁換柱」とは、相手を骨抜きにしようとする策略である。梁も柱も、家の構造を支える屋台骨である。それを取り替えてしまえば、形は同じでも中身はすっかり変わってしまう。それと同時に、相手にこれを使えば戦力を弱め、抵抗の意欲を失わせることができる。

この策略は、敵国に対しても同盟国に対しても使われる。同盟国にこの手を使うのは、相手はこちらの言いなりに操縦するためであることは論を俟たない。

現中国の対日外交でも靖国問題、南京問題、教科書問題等のどれ一つを見ても、日本の屋台骨を揺さぶる大問題ばかりで、我々年代の者にとっては絶対に許すことの出来ない問題である。頑として中国に屈してはならず、対中国土下座外交の屈辱を断ち切らなければならない。

この「偷梁換柱」は元来は秦の始皇帝の謀略であった。

秦の始皇帝は「遠交近攻」策で次々と対抗国を滅ぼし、紀元前221年、最後に残った斉を滅して、ついに天下の統一を完成した。その際、始皇帝は武力征伐と並行して、徹底した謀略工作を行い、相手の戦力と戦意を弱めることに努めた。斉に対してもそうであった。

そのころ斉では后勝という者が宰相(首相)に任命されて国政の実権を握っていた。始皇帝はこの后勝に目をつけ、多額の金品を贈って買収した。一国の首相を買収するのだから中国はやることは大きい。后勝は始皇帝の要請を受け入れ、自分の部下や賓客を大勢秦に送り込んだ。

秦は彼らを諜報要員として養成し、多額の金を与えて斉に送り帰した。秦の意を受けた彼らは帰国後、さかんに秦の強大なことを宣伝し、口をそろえて戦争準備の中止を斉王に迫った。

のちに秦軍が斉の都の臨淄に迫ったとき、斉の人民は一人して抵抗する者がなかったと言う。

諜報員の活躍で国中がすっかり骨抜きにされ、抵抗の意思を失っていたのである。

外交は基本的には力、軍事力や経済力、国際政治上での政治力、有力な国や国際世論を味方に付けられるかどうかである。中国は古代から多くの外交戦略家を傑出している古豪国家である。

「至誠天に通ず」という格言は外交の舞台では通用はしないと、日本人は肝に銘ずべきである。

「反間計」 (反間の計)

『孫子』十三卷は孫武の著述で「武經七書」の一つといわれている。「七書」とは『孫子』、『呉子』、『尉繚子』、『六韜』、『三略』、『司馬法』、『李衛公問對』の七つをいう。

今日兵書としては『孫子』、『呉子』が最も尊ばれている。不義の者を平らげて太平にすることが武であり正である。『孫子』は兵法の書ではあるが、この本義にもとづくことが多く、単に戦争のための軍略だけを論じたものではない。人事万般の教訓になる句も少なくなく、特に外交問題には欠かせない密接なものが多い。現中国外交の根本は孫子の兵法が基本である。

ここでは「反間の計」に就いてのみ記述することにした。

孫子の兵法の「用間篇」に間者を用うるに五あり。因間あり、内間あり、反間あり、死間あり、生間あり。五間俱に起こって、その道を知ること莫き、これを神紀(要)と為す。人君の宝なり。と書いてある。「因間」は同郷の人を使う。「内間」は敵の役人を使う。「反間」は敵の間者を逆にする。「死間」は命を差し出して敵地に乗り込む。「生間」は敵地に乗り込み巧みに生きて帰って敵情を報告する。

「用間篇」には又、①情報は他人に先んじて入手せよ。②一般民衆を協力者にせよ。③敵の内部に協力者をつくれ。④敵のスパイを逆用せよ。⑤協力者を生かして使え。⑥スパイは死ななければならぬ時もある。⑦まず相手の名前と性格をキャッチせよ。等、詳しく述べている。あくまで敵を疑心暗鬼におとしめて判断をまどわす。中でも効果的なのは、相手の諜報員を逆用することである。これなら、労せずして勝利を収めることができる。

『反間』とは①敵国に入って敵情を探ったり、敵国に不利な言いふらしをする者。間者。スパイのことである。(戦国策・燕出典)。②敵の間者を逆に利用して、味方の用をさせること。また、その間者。(孫子、「用間」出典)。『反間苦肉』とは、敵をだまし、仲間割れさせるために、自らの体をいためつける「計」を言う。簡単に言えば、相手の考えている計略を知り、その裏をかくて相手を出し抜くことである。

孫子の「謀攻篇」には又、「上兵は謀を伐つ。其の次は交わりを伐つ」と書いている。上手な戦法とは、敵の謀略を察して、これを破ることだ。これに次ぐ戦法は、当面の敵が交わっている

リカン コリツ ネラ
国を離間させる。つまり孤立を狙うことである。これも兵法のみならず外交全般に通じることだ。

ハンカン ケイ ジョウホウ リカン
『反間の計』は、ニセの情報を流して敵を離間したり、敵の判断をまどわしたりする策略である。

チョウホウ コウカデキ
そして情報を流す場合、敵の諜報員を利用するのが最も効果的だとされている。

チョウホウ
『孫子』によれば、敵の諜報員を利用するやり方には次の二つの方法があるという。

チョウホウ バイシュウ
①、敵の諜報員を買収して、ニセの情報を流させる。②、わざと気づかないふりをしてニセの
情報をつかませる。こういう形で敵の諜報員を利用するのが、最も古典的な「反間の計」である。

リュウホウ コウソ サンボウ チンヘイ ハンカン ケイ
劉邦（漢の高祖）の参謀「陳平」の『反間の計』は特に有名である。

リュウホウ コウウ ソ オチイ サンボウ
劉邦の軍が項羽（楚軍の大將）の大軍に包囲され、大苦戦に陥っていた時のことである。参謀
チンヘイ リュウホウ シンゲン コウウ ゴウチョク ボウシン ハンゾウ
の陳平が劉邦に進言した。「項羽に従っていた剛直の士は、謀臣の「范増」以下数人の武將にす
ぎません。そこでこの際、黄金数万金を用意し、諜報員を放って相手の君臣関係をバラバラにし、
タガ ギシン カンジョウテキ チュウショウ コウウ ナイコウ
互いに疑心を生じさせるのです。感情的で中傷に乗りやすい項羽のこと、必ず内訌（内乱）が起
ヤブ
こります。それに乘じて攻めれば、必ず破ることができましょう。

リュウホウ オウゴン チンヘイ
劉邦は、よしと言って、さっそく黄金数万金を用意して陳平に渡した。「これを使ってくれ、
チンヘイ
いちいち明細を報告する必要はない」と。陳平はこの金をふんだんにばらまき、項羽の軍内に諜
ウツサ
報員を送り込んで、こんな噂を広めさせた。

コウウ ブショウ コウセキ ミア ホウチ
「項羽の武將連中は大変な功績を立ててきた。ところが、それに見合うだけの封地を与えられ
コウウ ミカギ リュウホウ ナイオウ コウウ ウツサ
ないものだから、項羽を見限って劉邦に内応しようとしている」と。はたして項羽はこの噂にま
ギワク
どわされて、武將連中に対する疑惑を深めた。

オリ コウウ リュウホウ シンシャ チンヘイ シンシャ ゴウカ エンセキ
折から項羽は、劉邦のもとに使者を送ってきた。陳平は、使者のために豪華な宴席を設け、王
キョウ カナエ オドロ
たる者に供される鼎まで用意させた。そうしておいて、いざ使者の顔を見ると、さも驚いたよう
ハンゾウドノ シンシャ コウウ シンシャ
に、「なんだ、范増殿の使者かと思ったのに、項羽の使者か」と、こう言って、用意した料理を
ソマツ リョウリ
すぐに運び去らせ、あらためて粗末な料理をもってこさせた。

コウウ シンシャ キジン アリサマ クワ ホウコク コウウ ハンゾウ ウタガ
項羽の使者は帰陣するや、この有様を詳しく報告した。これで項羽はにわかに范増を疑い出し、
ハンゾウ サカ シンゲン オコ ハンゾウ コウウ ミキ ツ
范増がどんな策を進言しても、取り上げようとしなくなった。怒った范増は項羽に見切りを付け
コキョウ チンヘイ ハンカン ケイ コウウ レッセイ オ コ
故郷に引き上げた。陳平の「反間の計」にはまった項羽は劣勢に追い込まれていったのであった。

「走为上」^{ソウイジョウ} (走ぐるを上と為す)^{ニ ジョウ ナ}

『中国の伝統的外交戦略^{デントウテキガイコウセンリヤク}』の最後に、「走为上」^{ソウイジョウ} (走ぐるを上と為す)^{ニ ジョウ ナ}を記すことにした。

日本には誤って「三十六計逃ぐるにしかず」^{アヤマ ニ ホンイ タイキヤク コウ}と伝えられている。本意は、「全軍退却して敵の攻撃^{ゲキ サ ジョウキョウ アエ テツタイ ジ ヨウヘイ テツ}を避けることとしてである。状況によっては敢えて撤退することも辞さない。これもまた用兵の鉄則^{ソク}である。原文は「全師、敵ヲ避ク。左キ次ルモ咎ナキハ、イマダ常ヲ失ワザルナリ」^{ゼンシ テキ サ シリゾ ヤド トガ ツネ ウシナ}」。

「走为上」^{ソウイジョウ}とは、戦いを避けるのが最善の策略だという考え方である。もともと中国の兵法書^{ア クダ ギョクサイセンボウ ショウサン}には、当たって砕けろ式の「玉砕戦法」はない。勝算のないときは戦ってはならないと言うのが、^{ニンシキ}基本的な認識である。

たとえば「孫子」^{ソンシ}には、「兵力劣勢なら退却し、勝算^{レッセイ}がなければ戦わない」とあり、「呉子」^{ゴシ}にも、「有利と見たら攻撃を加え、不利と見たら退くことが肝要だ」^{カンヨウ}と書いてある。

このようなことは当たり前のことだとも思えるかも知れないが、無茶な戦いをしかけて敗北した例^{ムチャ ハイボク}は古今の戦史に数え切れないほど多い。そもそも凡庸な将帥ほど、進むことを知って退くことを知らないものだ。そのような人物を中国人は「匹夫の勇」^{ヒツブ ユウ}と呼んで軽蔑する。将帥や組織の責任者^{ケイベツ ショウスイ ソンキ}に望まれるのは、進む勇気ではなく、退く勇気であった。

では、退くことには、どんな利があるのか。第一に、勝てはしないが破れることもない。つまり、^{ダゲキ サ オンゾン ソナ}打撃を避けることができる。第二に、戦力を温存して、次の戦いに備えることができる。つまり、^{ギヤクテンショウリ}逆転勝利も夢ではない。その気になれば、いくらでも逃げのびることができる。そういう大陸の広大な地形では、逃げることも極めて有効な戦略となったのである。

国境を陸地で接しておらない日本の場合を考えると、大陸は群雄割拠して外交は生きるか^{セツ グンコウカクキョ}死ぬかの真剣^{シンケン}そのもので、戦闘の戦法も当然に発達していた。歴史は外交・戦闘の歴史であった。

その点、日本のように狭い国土の中では、逃げようと思っても逃げるができない。何万の軍隊どころか、一人の逃亡者でも逃げる^{トウボウシャ}ことが出来ないとなると、どうしても「乾坤一擲」^{ケンコンイチテキ}の当^{クダ}って砕けるという戦法を取らざるを得ない。

「当たって砕ける」戦法にも利点はある。全軍の力を発揮して思わぬ大勝利を博することもあるから、いちがいに否定は出来ない。しかし、常にうまくいくとは限らない。往々にして全軍が

ギョクサイ マ ギョクサイ サイキ
玉砕などという負け戦になってしまう。玉砕してしまったのでは、再起など望むべくもない。

ランセイ ニ テツテイテキ
乱世を生き残るためには、やはり攻めるときには攻めるが、逃げるときには徹底的に逃げまくる、こういう賢明な生き方を身に付ける必要がある。

ニッシ ダイトウワ
私が日支事変から大東亜戦争（太平洋戦争とはアメリカが東京裁判で勝手に使用した名称）に参加したが、ギョクサイ スイテイ
玉砕部隊の数は大小合計すると数十件にも及んでいると推定する。世界各国の兵法書には日本軍を含めて退却戦法は記載されていた。しかし日本軍では退却の文字は禁句であった。

タイキヤク テンシン ショウ ジッサイ
「退却」は「転進」と称していたが、実際の行動は同じことであった。

ギョクサイ シンシュ
「玉砕せよ」という命令はなかったと思っている。ただし、「死守すべし」という命令は常にカツツ テンノウ カミ シンシュ
下達されていた。当時の上官の命令は天皇の命令であり、神の命令であったから、「死守すべし」という命令は「玉砕すべし」の命令と同意語であった。甚だしい人命軽視だと思っている。

リュウホウ ニ センリョウ ショウカイ
『劉邦（漢の高祖）の逃げ逃げる戦略』の例を紹介する。

何か大きなことを為し遂げる人物は、みな逃げ足が早く、逃げ方が巧みだったと言ってよい。
コウウ ホロ シュチュウ リュウホウ リュウホウ コウウ ハケン チョウセン
項羽を滅ぼして天下を手中におさめた漢の劉邦も、その一人であった。劉邦が項羽の覇権に挑戦した当初は、いつも項羽の精強な軍団に押しまわられて苦杯を喫し、負け戦ばかり続いた。このころの劉邦は、けっして無理な戦いをしていない。駄目だと見るや、さっさと逃げ出して、項羽の鋭鋒を避けている。だから、戦線を持ちこたえるのがやっとなという状態が続いた。

リュウホウ ニ ワケ センジュツテキ ホキョウ
むしろ劉邦は、ただ逃げまわっていた訳ではない。戦術的には敗れながら、同時に、①に補給の確保、②に包囲網の完成、など、長期的な視野に立って幾つもの手を打っている。

ユウイ ギャクテン
このようにして、二年、三年と持ちこたえているうちに、いつの間にか優位に立ち、逆転勝利を収めたのである。劉邦の勝利は、不利な戦いを避けて逃げまわっていたことによつて、もたされたのであった。

リュウホウ コウセキ サンケツ サンボウ コウセキ
これらは劉邦一人の功績ではなく、漢の三傑と言われた三人の名参謀の功績であった。それは作戦計画の名将「張良」、用兵の大將「韓信」、政治・補給の権威「蕭何」の名将がそろったからこそ、百戦九十九敗して最後の戦いに勝利を収め、漢帝国を建国したのであった。私は建国のその地「漢中」〔現在は陝西省〕を訪れ、漢帝国の建国の歴史を調査したことがある。

『秩序なき20世紀前半の中国大陆』

日支事変（日中戦争）が勃発（昭和12年7月7日（1937））して65年目の今年の七夕の日から該書「遠交近攻」を書き始めた。奇しくも今日は大日本帝国が崩壊してから57回目の8月15日を迎えた。しかし新聞報道を始めとした各メディアの記事は極く僅かであった。

戦争は遠くなりにはけりである。日支事変勃発の「盧溝橋」事件当時誕生した人たちは本年満65歳になり、高齢者に仲間入りしたのである。また柳条湖の爆破が発火点となった満洲事変（1931）当時に生まれた者は、古稀を過ぎて満71歳に達したと思うと、現代の日本人の大部分の人は20世紀の東洋史、特に中国大陆に就いては無知同然のようである。

20世紀当初の中国大陆は最後の王朝の清朝（1616～1912）であった。世界の帝国主義諸国に思うがままにされていた怨恨は強く、既存の条約は尊重すべき国際秩序ではなく、打破すべき不平等条約であった。しかし、中国にはそれを変える実力もなく、法的根拠もない中国国民党が訴えたのは現地の反日運動であった。つまり在留邦人、とくに婦人、学童に投石し、唾を吐き、商店は小売りを拒否して日本人をいたたまれなくさせる事であった。

満洲事変では、それが在留邦人と軍を刺激し、軍が行動を開始した時には中国側はそれを妨げる力を持たず、逆に満洲を失う結果となった。しかし1937年の盧溝橋事件となると、もう情勢は変わっていた。国力、軍事力が充実してきた中国では、もう日本との一戦も辞さない雰囲気（はびこる）していた。またその前二、三年間の日本軍の華北工作（黄河の北）は中国側の忿激と怨恨を買うに十分な強引なものだった。そして昭和11年（1936）の西安事件以降は、事実上の抗日国共統一戦線が出来ていた。

それまでの1928年（昭和3年）の張作霖爆殺から華北工作まではすべて、日本軍が裏で事件を仕組んで武力行使の口実を作ったものであったが、盧溝橋事件を含む1936年以降の諸事件には、日本側の工作の匂いも全くない。東京裁判でさえ、その点は全く問題にしていない。

すべては、もう日本人の横暴は許さないという中国民衆の自発的な意思か、国民党下部組織の暴発か、国民党の鋒先を共産党から転じて日本の方に向けさせようという共産主義勢力の策謀によるものかであった。

これまで中国古来からの伝統的な外交内政の一端を記述した。20世紀までの中国の各王朝を眺めてみると、「前漢・後漢」とともに約200年、「唐」は約250年、「宋」（前・後合わせ）も約250年、「清」も約250年間にわたり存続した。しかし他の王朝は100年足らずの王朝に過ぎなかった。20世紀に入って「清」が滅んでからは秩序なき動乱状態となっていた。第二次世界大戦終了後の内戦から中華人民共和国が建国し、漸く半世紀が経過したというのが現在の中国の実態で、日は未だ浅く世は不安定だと言えるだろう。

中国人にとっては、昔から続いてきた自分たちの政治的経験から、政權と自分たちの生活とは関係がないと考えているようだ。それが大陸的な性格でもある。日本人は新しいものが良いと思ったら、ぱっと替えるが、同じことを繰り返しても飽きないのが中国人の特徴である。

この権力と関係のない生活が、古来から伝わる『鼓腹撃壤』の歌として有名である。これは昔、聖天子の聞え高い帝堯のころの物語である（堯は中国・古伝説上の聖王）。堯は人民たちの心を知りたいと目立たない服装をして町の中にしのび出て、次のような歌を聞いた。

〔日出でて作き、日入りて息う。井を鑿りて飲み、田を耕して食う。帝力我に何かあらんや！〕
〔日が出りゃ、せっせと野良仕事。日ぐれにゃ、ねぐらで横になる。のどの渴きは、井戸掘ってしのぐ。腹の足しには、田畑のみのり。天子さまなど、おいらの暮らしにゃ、あってもなくてもおんなじことさ〕。〔我々は食べて行ければ天子などは不要であるとの意〕。

「そうか、これでよいのじゃ。人民たちが何の不安もなく鼓腹をうち撃壤をして、自分たちの生活を楽しんでしてくれる。これこそ私の政治がうまくいっている証拠というものじゃわい」と堯王は喜んだという。（「壤」は「きごま」をぶちつけあって勝負をきめる遊びのこと）

中国人のもう一つの特徴が「あきらめ」（没法子）の早いことでしょう。頼りになるのは自分一人だと悟っているようである。洪水が来れば「没法子」、イナゴが飛んできて作物が全滅して「没法子」と諦める。これが大陸の人らしいところでもあった。このことは中国戦線で戦った人たちは必ず経験していることである。

「鼓腹撃壤」と「没法子」という中国人の二大特徴を持ち続けながら、中国の人たちは耐え難き動乱の中で、無秩序の20世紀を生きてきた歴史の一端を、これから書き述べていきたい。

「孫文」 (1866~1925)

我々大正生まれの者にとっては「孫文」の名前を知らない者はいないだろう。それほど有名な20世紀初めの中国の「革命家」であり、政治家、中国国民党の創設者、指導者、「中華民国の創始者」として、「国父」とまで称された大人物である。字は「逸仙」、号は「中山」である。

広東省中山県の貧しい農家に生まれ、12歳のとき出稼ぎで成功したハワイの長兄のもとに行き、西欧の近代教育を受けた。16歳のとき広州の医学校で医学を学び、1887年、香港の西医学院に在学中は、時あたかも「清朝」がベトナムの宗主権をめぐるフランスとの戦いに敗れ、社会変動の波が押し寄せていた時代であった。こうした中で孫文は憂国救国の思いにかられ、ついに革命を決意した。1892年に澳門、広州で開業したが、やがて医業を離れて革命運動に専念し、95年に広州で最初の武装蜂起を企てたが失敗し、日本に亡命した。

横浜に興中会を組織したあと、96年にロンドンに行き清国公使館に監禁されたが、奇跡的に救出され、革命家として一躍有名になった。ヨーロッパ社会を実際に見て、民生問題の重要性に気づき、「三民主義」の構想を練った。97年に日本にもどり宮崎滔天、犬養毅らを知り、東京、横浜に居住した。99年に犬養、宮崎、平山周、内田良平らとフィリピン独立運動を援助したが失敗、1900年に厦門に出兵をねらう日本軍部からの武器援助の密約に期待して、惠州蜂起を企てたが失敗を重ねた。武装蜂起を重視した当時の孫文の革命路線の典型的な例である。

このころ、衰退をつづける清朝の立憲改革派と革命派は、中国の将来をめぐって論戦を交えていたが、1905年、東京で革命3派（興中会、華興会、光復会）は合同して「中国同盟会」を結成した。「孫文」は総理に選ばれ、機関紙「民報」を発行して「三民主義」を発表した。

11年10月「辛亥革命」（後記する）が勃発すると孫文はアメリカから帰国し、臨時大統領に選ばれ、12月1日、中華民国が発足した。しかし南北の軍閥の争いの妥協の結果、「袁世凱」が大統領に就任した。北洋軍閥の袁世凱は独裁支配を強化したため、孫文は第二革命を起こしたが残念ながら敗れ、日本に亡命のやむなきに至った。

『辛亥革命』は干支の一つの「かのとい」革命のことである。1911年辛亥の年、清朝を倒し中華民国を樹立したブルジョア民主主義革命のことで、10月の武昌蜂起に始まり、翌年の1

月には孫文を臨時大統領とする南京臨時政府が成立したが、革命勢力が弱体であったため、北洋
軍閥の袁世凱と妥協し、袁が大統領に就任した。これが辛亥革命の概要である。

孫文は14年に国民党を改組して「中国革命党」を組織し、日本の政界、軍部、実業界などか
ら援助を得ようとしたが成功しなかった。しかし15年末、第三革命を起こし袁世凱の帝制運動
を挫折させた。17年から護法運動を展開する中で広東政府を樹立し反動軍閥との戦いを続けた。

19年、今でも有名な学生・民衆による「五・四運動」は、北京、上海等の諸都市で愛国闘争
を繰り広げた。ここで孫文は中国革命党を改組して、公開の政党「中国国民党」を組織した。そ
して21年に創設された中国共産党と提携し、国共合作に踏み切った。(第一次)

24年1月、中国国民党第1回全国代表大会は、連ソ、容共、農工援助の三大政策を決定し、
反帝国主義、反軍閥を明確に表明した。そして孫文が提唱した新「三民主義」とは、民族の独立
(民族主義)、民主制の実現(民権主義)、経済的不平等の是正(民生主義)の三原則であった。

孫文は24年11月に日本を訪問し、神戸で『大アジア主義』の大演説会を開催したことは有
名である。大アジア主義とはアジアは一つ、アジア人のアジアを目指せということである。日本
の明治維新の発端は中国の阿片戦争の衝撃にあったことは周知の事実である。明治維新後も西欧
の支配からアジアを開放しようという思想が連綿として続いてきたのである。だからこそ、日本
が孫文らの「滅清興漢」(満洲民族の清朝を打倒して漢民族の国家を樹立)の民族主義、近代化
を目指す革命の策源地となり得たと言えるだろう。また日本の民間の志士、いわゆる大陸浪人の
群も中国革命を支援したことも事実であった。

日本を訪れた翌年の25年3月、孫文は北京の病床にあって国民党への遺囑をつづり、「世界
で我々を平等に待遇する民族と連合し、共同して奮闘すべきこと」、「革命はなおまだ成功して
いない」ので建国方略、建国大綱、三民主義、国民党の宣言に基づいて努力を続け、国民会議開
催と不平等条約破棄を最短期間に実現すべきことを訴えた。孫文の遺骸は北京から南京郊外の紫
金山の「中山陵」に移され葬られた。幸いに私は平成7年9月(1995)、紫金山の長い大理
石の参道を登り、白亜の殿堂に祀られた孫文の遺骸に参拝ができた。また広州には中山記念堂、
北京・天津には中山公園、上海には孫中山故居、全国的には中山路の名称で親愛されている。

「清朝末期の内訌外患」

満洲民族の王朝であった清朝は、明朝の独裁君主政治の体制を継承する王朝として支配を続け

てきた。しかし阿片戦争に始まり、キリスト教徒の洪秀全が組織した「太平天国の乱」によって、
広西省から南京までも占領され、その上、南京条約によって香港の割譲、広州・厦門・福州・寧波・上海の5港の開港と戦費の賠償などにより、欧米諸国の市場が進出して経済を握った。

一方、天津条約でキリスト教の布教が認められたが、中国の伝統的な道教や儒教にとっては歓迎すべき宗教ではなく、しかも欧米の布教活動は砲艦で脅かし、治外法権で守られて行われた。

私も戦争中にキリスト教徒に悪辣な妨害を受けたが、中国大衆の反キリスト教運動も各地で頻発し、民衆は教会の焼き討ちに参加している。教会は軍の先兵の役割を果たしていたのである。

中国が宗主権のインドシナ半島（現在のベトナム・カンボジア・ラオス）へ、フランスの侵略が本格化したのは、ナポレオン3世（1852～70在位）の時からである。宣教師殺害事件を口実に出兵したフランスは、サイゴン（現ホーチミン市）条約によってコーチシナとサイゴンを割譲させ、次いでカンボジアを保護国とし、さらに中国・雲南省への進出を企てていた。

「日清戦争」＝朝鮮半島では天主教（カトリック）に象徴される「西学」に対し、儒教、仏教、を基礎に「東学」を創始して布教を開始した。この争いが日清戦争の原因の一つとも言われている。宗主権を主張する清国と朝鮮半島に進出政策をとる日本とは互いに対立し、両国はそれぞれから出兵を要請されて日清戦争へと進展していった。（戦記でないから詳細は割愛する）

63年、11歳の李熙が即位して高宗王となった。その父の大院君李是応は政治の実権を掌握、王妃一族中心の「勢道政治」の打破をめざした。しかし欧米列強の圧力が及んでくると73年、王妃閔妃を中心とする一派が大院君から権力を奪取した。

1882年7月、ソウルで反閔氏反日の反乱が発生し、日本人教官堀本礼造少尉らが殺害され、日本公使は英艦で長崎に逃れ、閔妃も王宮を脱出した。朝鮮側の要請を受けた清朝は、3千の兵を送って大院君を天津に拉致、反乱兵を弾圧して閔一派を復帰させた。85年4月、日清両国は天津条約を結び、朝鮮からの同時撤兵と再出兵時の事前通告を約束し、1895年3月20日、下関の春帆楼で日本側は伊藤博文と陸奥宗光、中国側は李鴻章らが出席して講和条約に調印した。

日清戦争の結果、台湾は日本に割譲された他、朝鮮半島は「完全無欠な自主独立国」であることと清国は認め、遼東半島が日本に割譲となった。しかし遼東半島は露・独・仏の三国干渉によって清国に返還させられた。

1899年、「扶清滅洋」の「義和団」が各地で発生した。孫文の掲げた「滅満興漢」と違って、清国を扶けて「洋」に抵抗するという、19世紀末から20世紀初頭の運動であった。まず教会と宣教師が「滅洋」の対象となった。1900年には天津、北京市内まで進出し、列強の公使館を包囲した。6月、10日、列強は連合軍2,000を天津から北京へと出発させて北京を占領した。西太后、光緒帝は西安に逃げた。これを義和団事件と言い、講和を辛丑条約と言う。これには日米英仏伊奥独露の出兵8ヶ国と白耳義、西班牙、和蘭の11ヶ国が調印している。

この義和団事件に際して15~17万の大軍を東北（満洲）に送り込んだ露国は、02年4月、18ヶ月内に東北地方から撤兵する条約に調印したが、シベリア鉄道や拠点の建設に勤め、撤兵に応じなかった。このように日露戦争の原因の発端は、南下を目標とする露国にあったのである。

事件に参加各国は首都北京の一角に外国使館を設け治外法権とした。これは我が目で確認した。清朝は日露戦争（1904~5）の日本の勝利を「君主専制」に対する「君主立憲」の勝利と受け止め、清帝国の延命策を講じた。そして光緒帝と西太后が日を接して死去すると、わずか2歳の溥儀が即位し宣統帝（後日の満洲皇帝）となった。政治の実権は父が摂政として掌握し、北京の北洋軍閥の袁世凱は後日に罷免され、満洲族の王公貴族中心の体制を固めようとした。

1914年に始まった第一次世界大戦に際し、大隈重信内閣は日英同盟を理由に対独宣戦を布告し、山東半島に出兵してドイツが租借していた「青島」を攻略し、ドイツの権益を手中にした。

日本政府は山東省の権益、南満洲の優先権などの合計21ヶ条を秘密に袁世凱に提出した。これらの要求は、日本の既得権を強化拡大するだけでなく、中国政府をも日本の監督・指導下に置き完全に従属化しようとするものであった。しかし監督・指導の件は削除された。

要求の内容が一般に伝わると、中国各階層に憤激と反対の世論が高まり、日貨排斥などの運動が全国的に展開された。この21ヶ条要求こそ、日中関係を民族的な対立へと転換させてゆく、決定的な転機となったというべきであろう。これは子供心にも覚えている。

「難局に登場した蒋介石」

「五・四運動」とは？ 1919年1月に始まったベルサイユ講和会議^{コウワ}に出席した中国代表団は、7項の希望条件と、旧ドイツ^{ケンエキ}権益^{ヘンカン}の返還^{ニツカ}、日華条約（22頁の21ヶ条条約）の取り消を要求したが、米英仏日等の主要国は要求を退けた。この報せが北京^{シリソ}に伝えられると5月4日、北京の学生約3千人が天安門広場から、21ヶ条破棄^{ハキ}、青島の回収^{チントウ}、売国奴^{バイコクド}の罷免^{ヒメン}を叫んでデモ行進し、32人が逮捕された。この事件を契機^{ケイキ}に運動は全国学生へと拡大し、各地で学生の釈放^{シャクホウ}、講和条約調印拒否^{キョヒ}を要求する大衆集会、デモ、街頭演説、日貨排斥などの民衆運動が展開された。上海では学生の罷課^{シャンハイ}に同調して商店の罷市^{ヒカ}、労働者の罷工^{ヒシ}が全市にわたり、さらに天津・漢口などの他の都市にも波及した。ついに北京政府は6月10日、3高官を罷免し、条約調印拒否を決定し、逮捕学生を釈放した。（最近でも五・四運動は騒がれるので掲載した）

「蒋介石」

孫文^{ソンブン}の死後の国民党（右派）の最高指導者で、1928年から49年までの間、中華民国の独裁^{ドクサイ}的な支配者であった。日中戦争当時、我々が戦った中国軍（当時は支那軍）とは、蒋介石軍^{ジョウカイセキ}のことである。八路軍を始めとする中国共産党軍は大いに対日戦争をしたと宣伝しているが、実際は彼らの戦力は微々たるもので、戦局を動かすほどのものでなく弱軍であった。

蒋介石は字は中正、浙江省奉化県出身で私は訪れている。1907年、保定振武学校（軍官学校）を卒業後、日本の陸軍士官学校に留学。11年武昌蜂起（19頁参照）を知って帰国し、上海の「陳其美」のもとで活躍し、孫文の第二、第三革命に参加した。その後、上海の証券取引所の仲買人となって財をなし、「浙江財閥」との結合の基礎を造り、それが孫文の革命資金となったと言われている。

24年孫文の三大政策（連ソ・容共・労農扶助）^{フジョ}支持を表明して孫文の信任を得、モスクワに派遣されて軍事を学んだ。帰国後、孫文の広東新政府の下で、黄埔軍官学校校長、国民革命軍第一軍軍長となり、軍の実権を握り、25年孫文の死後、一時左派と組み国民党内の地位を高めた。

共産党嫌いの彼は共産党の活動を制限し、国民党中央執行委員主席、同組織部長、国民革命軍総指令等の要職を手に入れた。

しかし国内の軍閥は主導権争いのため軍閥戦争は激化した。段祺瑞を頭目とする安徽派（省派）の武力統一に対し、呉佩孚を中心とする直隸派（河北省を中心とする）は、張作霖の奉天派をも抱き込んで、和平統一を主張して「段」の対日追従に反対し、20年7月、両派の大規模な武力衝突を引き起こし、安徽派は敗れて北京の政界から一掃された（安直戦争という）。

これを契機に、日本の支援を受けていた奉天派が北京政界に進出し、安徽派と連携して広東の孫文にも接近して、英米に支持された直隸派に対抗した。22年4月、両派は戦端を開き、完敗した奉天派は東北（満洲）に退いた（第一奉直戦争）。しかし北京の政局は短命内閣がつづいた。奉天派は24年9月、第2奉直戦争を發動し、直隸派の馮玉祥のクーデターによって直隸派の政権は倒れ、段祺瑞が臨時政権に返りざいた。

北洋系大軍閥間のたび重なる戦争は当然、地方にも波及し、地方軍閥間の戦争をひきおこし、中国は全国的な軍閥混戦の状態に陥った。これは分裂国家への危機であった。このような軍閥戦争は、第一次大戦後の中国における反帝民族運動の高揚に直面して、直接的な武力干渉を抑制された列強が、各地の軍閥と結びついてその拡張主義を刺激し、間接的に自己の勢力を拡大しようとした代理戦争であり、中国をめぐる帝国主義列強の矛盾と対立を反映していたのである。

上記の通り孫文亡きあとの国内は混乱し、国民党内でも左右の対立が激化した。とくに党内に反共攻勢が強まるなかで、国民革命軍総司令となった蒋介石は、それを利用しながら党・軍での指導権を強化し、26年7月に北伐令を発令して反軍閥戦争のため北伐を開始した。北方の馮玉祥軍もこれに呼応した。

北伐軍は各地の民衆の支援のもとに、地方軍閥を撃破して快進撃をつづけ、10月には武漢を、11月には南昌を占領し、翌年2月には杭州、3月には南京を攻略して上海に迫った。27年4月12日、上海で北伐に呼応して蜂起した共産党員と労働者に突如攻撃をかけ、国共合作を破壊した。武漢政府は蒋介石の党籍を剥奪して逮捕令を出したが、蒋介石はそれに対抗して4月18日、反共的な南京政府を樹立して共産分子の肅清を宣言した。

ここに24年以来の国共合作は、国民革命を中途にして完全に崩壊した。同時に革命の政権としての武漢政府も事実上崩壊した。

ブカン ヘイゴウ ゲヤ ショウカイセキ

武漢政府を併合した際に一時下野していた蒋介石は国民革

命軍総司令に復職し、党内の反共体制が整うと、28年4月

北伐を再開した。当時、張作霖を中心として直隸派が北京の

政権を保持していたが、すでに戦意を失っていた直隸派各軍

は、北伐軍の攻撃にあって全戦線で敗走した。他方、日本の

田中義一内閣は「居留民の保護」を口実に山東省に出兵して

干渉の勢いを示し、北伐軍との衝突も起こったが（済南事件）

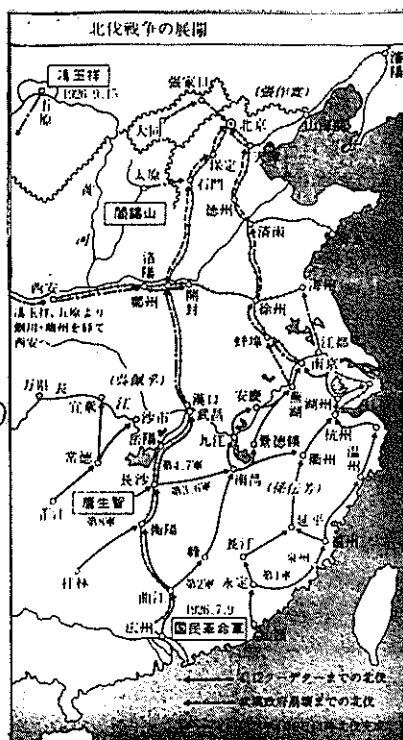
北伐軍は日本軍との衝突を回避しながら北京に迫った。

張作霖は、6月3日北京を脱出して奉天（瀋陽）に向かう

途中に爆殺され（私は現場を視察した）、国民党の北伐が完

成した。さらに28年末、張作霖の奉天派をついだ張学良に

よって、南京国民政府による全国統一が実現された。



南京国民政府＝蒋介石政権は1931年までに、反蒋介石諸勢力との対立を武力あるいは妥協

を通じて解消し、全国政権としての形式をもつようになった。一方の中国の民族運動が高まりは

帝国主義の権益の縮小削減であった。日本の支配層は中国東北（満洲）における民族主義の高まり

により、日本の権益が危機に瀕していると判断し、「満蒙の危機」を宣伝した。このような状

況で、東北地域を一挙に占領することにより解決しようとしたのが「柳条湖」事件であり、「満

洲事変」の発火点であった。詳細は平成2年「満洲紀行」と平成12年「支那戦線余話」を参考。

「西安事件」 蒋介石の国民政府は共産党軍を最終的に消滅させようとして、そ

の中心であった陝西省の延安の攻撃を、西安に配置されていた張学良の率いる東北軍に命じた。

しかし東北軍将兵は故郷の東北に帰還することが最大の願望であり、共産党の「内戦停止・一致

抗日」の呼びかけに応じ、秘密裡に局部的停戦協定を結んだ。

36年12月、蒋介石は自ら「剿共作戦」（共産党掃討）を督励するために西安に赴いたが、

張学良は蒋介石の意思を変更させようと監禁した。そして共産党の周恩来の斡旋の結果、「内戦

停止・一致抗日」に基本的に合意して釈放となり、抗日民族統一戦線が再現された。

ソウキョウセンソウ
「剿共戦争」

ショウカイセキ
蒋介石国民党軍による中国共産党軍に対する大規模な包囲作戦の

ダイキボ

キョクタン ゲキゲン
ことを言う。共産党の政権下となった現在では、この作戦の報道は極端に激減し、あるいは報道

ショウメツ
される書籍類も消滅してしまった。共産党の歴史ではこれを 『長征』 と称しているが、

ソウタイキヤク
本質的には 「総退却」 であり、不名誉なことであった。

フメイヨ

ホクバツレイ
上記した通り、26年7月に北伐令(24頁)が発令され、27年7月に国共分裂(24頁)

ブンレツ

チョウサクリン バクシ
、28年6月に張作霖が爆死された。それに引き続く1930年～36年にわたり剿共作戦が

ソウキョウ

ニ カンバイ
全国的に実施され、共産軍は逃げ回って完敗であった。私は平成2年9月、中国共産党が192

フソウホウキ
7年8月1日、武装蜂起した中国人民解放軍の発祥の地(ハ一起義という)である江西省の省都

ハッショウ

ハチイチキギ

コウセイ

ナンショウ
の南昌を訪れ、調査研究をしたことがある。第一次(30～31年)、第二次(31年3～5月)

第三次(31年7月)、第四次(32年7月～33年初頭)、第五次(33年10月～34年1

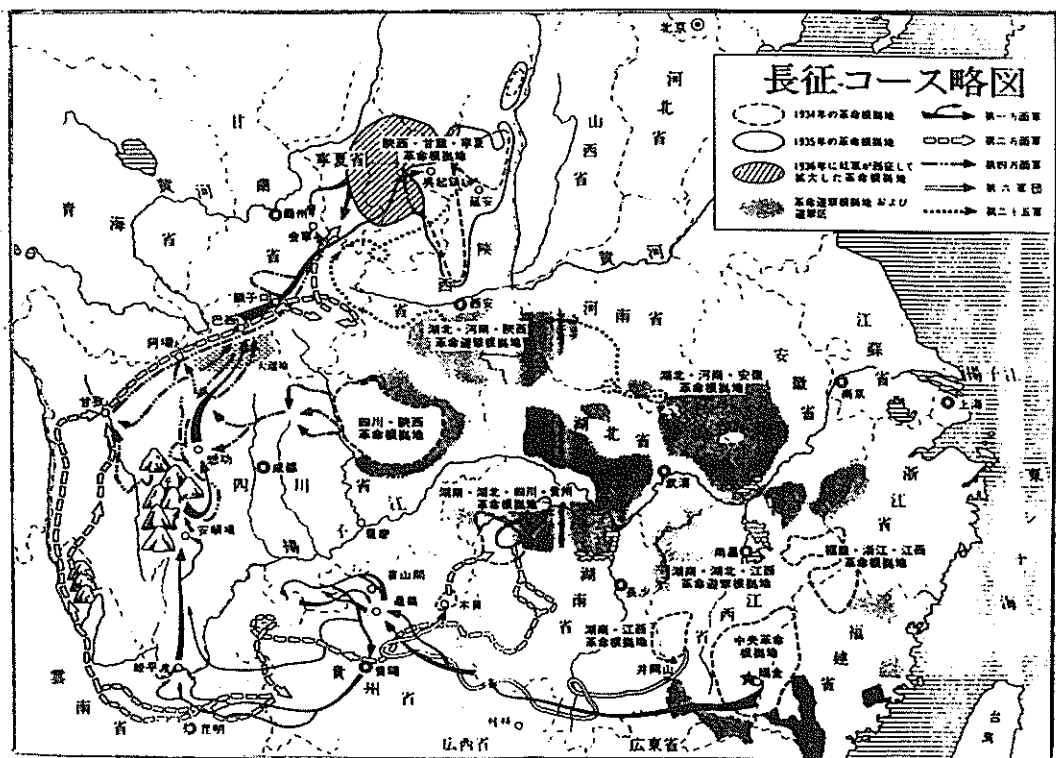
1月)であった。このため共産軍は34年10月15日、全ての大小の根拠地から総退却した。

チョウセイ
これが彼らが称する「長征」で、西安事件当時は第六次剿共作戦中であつた。

ソウキョウ

チョウセイ
下図は中国共産党が称する「長征」の図で、戦術的には「総退却」であつた。

ソウタイキヤク



中国共産党軍の戦史を繙くと、2年数ヵ月間の退却行の中で、もっとも遠距離を移動した部隊の総距離は1万2500kmを踏破している。前頁の参考図の通り、中国大陆の中央部から福建省～広東省～広西省～貴州省～雲南省～四川省～青海省～甘粛省～寧夏回族自治区～陝西省の行程と云えば、大陸の中央部を取り巻く僻地ばかりの省である。我々が中国戦線で占領していた地域は前頁右側の一部分の線と点のみで、大陸図全般から見れば微々たる地域に過ぎなかった。

長征当初の共産軍の総兵力は約30万と言われているが、最後の当着地である陝西省の延安に到着したのは3万弱であった。蒋介石はこの好機を逃してはならないと延安攻撃の督励のため、張学良を西安を訪れたところ監禁されてしまった。あのとき張学良は蒋介石の命令のように延安を総攻撃していれば、3万弱の共産軍（八路軍）は完敗して支離滅裂の状態に陥って、おそらく西の果ての新疆省の砂漠地帯に落ち延びて行つたと私は想像している。そのため戦後の中共政府が誕生したかどうか、私は分からないと判断している。

一方、蒋介石国民党軍の包囲網を共産軍が突破するのを援護するため、あるいは逃げ遅れて大陸の中央部に取り残された共産軍を、取りまとめて新しく編成したのが『新四軍』である。この新四軍は黄河と長江との中間地帯で、日本軍の配備の手薄な地域を根拠地にしていた。遊撃戦を主戦法とした共産軍だったが、問題にならない弱い共産軍であったと記憶している。

今度は軍事を超越して政治的な面から中国状況を観察してみたい。日本の国家政策は対支二十一ヶ条に表れているように、中国における権益の保持と拡張にあった。これが結局、英仏などの西欧の中国における権益を脅かし、西欧列強の警戒心をかきたてた。またアメリカの門戸開放政策、つまり中国市場の自由化路線とも衝突した。

そこで資源と市場の確保と、その当時の日本は過剰人口であったから、その捌け口を求めて「満蒙は日本の生命線」と言うをスローガンと、日露戦争で獲得した満洲における権益を保持し、それを拡大するために満洲事変を起こした。それに対し激しい国際非難を浴びせられたのである。

しかし、日本は今まで欧米と同じ行動をしたのに、日本だけが非難されるのが不満であった。米国のパナマ運河の保護領化は1903年で、満洲事変の30年前に過ぎない。何でアメリカと同じことをしているのに、日本だけが非難されるのは全く訳が分からないと国民は怒った。

アメリカもアングロサクソンだが、彼らの国家の特徴は現在と違い、弱い国は保護するが、それが強国になると頭を叩くという習性があった。日本が日露戦争に勝って強くなりすぎたと感じたから、日本叩きを始めて日英同盟も破棄させ、中国支援に切り替えたのである。当時のアメリカ外交は中国における市場の獲得と貿易の拡大が主目的で、蒋介石政権を支援したのも結局、日本が中国、特に華北の市場の独占を狙っているのではないかと言う警戒心からであった。蒋介石もそれを利用して、米英資本と結びつきの強かった浙江財閥（上海中心）をスポンサーとして、反日・排日、侮日運動を拡大したのであった。（蒋介石夫人の宋美齡は浙江財閥の一族）

「国共合作」 中国国民党と中国共産党との合作は前後二回実現しており、中国の現代史の展開に決定的な意義をもっている。

〔第一次（1924年1月～27年7月）〕 国民党の指導者「孫文」はソ連の援助を受け入れたが、党と党との合作ではなく、中国共産党員が個人として国民党に加入する形式となった。孫文は清朝（満洲民族）を倒すために、やむなく手を結んだと私は判断している。孫文は欧米の教育を受け、共産党のことは良く理解していたと思うからである。だから孫文死後は国民党は反共が公然化して党内左派も反共に転じ、国共合作は崩壊した。

〔第二次（1937年9月～45年8月）〕 36年9月の西安事件の解決によって、国民党政府が中国共産党の合法的地位を承認し合作が実現した。この合作の背後には米英ソが支援していたかは不明だが、私はあったと感じている。中共側としては日本と蒋介石国民党軍とを戦わさせて共に戦力を消耗させ、「漁夫の利」を狙って共産党政権を夢見ていたと私は思っている。ところで我々日本軍が戦ったのは蒋介石国民党軍であった。戦後、共産軍（八路軍・新四軍）は強かったと彼らは宣伝しているが、共産軍は装備が劣悪で戦力は劣り弱軍であった。

「八路軍」 正式名は中国国民革命軍第八路軍であり、現在の中国人民解放軍の前身である。37年9月、国共再合作がなると国民革命軍に改編された。華北にあった共産軍主力は第八路軍に改編された。上海戦で戦ったのは第十九路軍であったし、華北の軍は第二十九路軍と称していたように、国民党政府は戦時編成として第十八集團軍に改称した。日本軍の派遣軍のことを集團軍と言ったのであろうか。我々の主な敵は蒋介石直系軍の第一戦区集團軍であった。

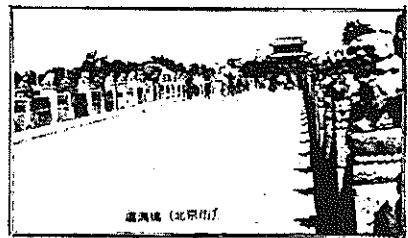
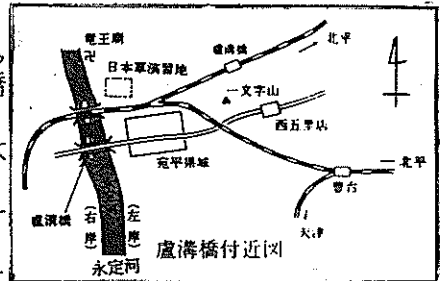
「日支（日中）戦争開始」（1937年7月7日）

「盧溝橋事件」とは昭和12年7月7日夜、北平（現在の北京）の西南約18驛、永定河にかかる白亜の古い石橋の盧溝橋付近で日中間に戦闘が発生した、65年も前の事件のことである。恐らく現在「古稀」の人たちも教えられたこともなく、知らないようで誠に残念なことである。

詳細な記事は平成2年6月の「北京郊外独り旅」と、平成12年春の「支那戦場余話」の拙書に記述済みであり、割愛して重複を避けたい。

七夕の当日の夜、十時半ころ、日中間で承認した盧溝橋の北方の演習場で、日本の支那駐屯軍歩兵第一聯隊第三大隊に所属する第八中隊が夜間演習中、盧溝橋の方向から十数発の不法射撃を浴びせられた。中隊長の清水節郎大尉は直ちに集合ラッパを吹かせて人員の点呼をすると、一名の初年兵の不足が判明したが、用便中で無事に戻ってきた。

日本軍が不法射撃を受けた時、盧溝橋の東側の宛平県城に駐屯中の「宋哲元」隷下の支那軍も不法射撃を受けている。



（挿入した上の写真は盧溝橋付近の地図。下は盧溝橋の石橋と向側に見えるのは宛平県城の望楼）

この盧溝橋事件が北支事変となり、河北・山西・山東省は席捲され、それが飛び火して8月13日から上海で戦闘が開始され、日支両軍が衝突する全面戦争に発展した。8月から11月の上海戦後は首都「南京」攻略に向かった追撃戦となり、12月13日に南京は遂に陥落した。当時私は陸軍士官学校に在学中で、首都南京陥落を祝い、市ヶ谷から九段の靖国神社へと祝賀の参拝をしたことが鮮明に記憶している。南京を放棄した蒋介石国民党軍は、翌年の2月の徐州会戦で敗走して黄河を決壊し、7月の武漢でも敗れて重慶の奥地に後退して持久戦に移行した。兵站線（補給線）が伸びた関係から日本軍は長期戦のやむなきに至った。

日本のような資源のない国は、短期決戦で速やかに勝敗を決するしか方策はない。しかし大陸は広大で我が兵站線が延長すれば戦力は極端に低下し、戦闘の継続に支障を来すのは目に見えていた。広大な領土を保有することが最大の戦力だと、中国戦線で戦った私の感想の一つであった。

昭和12年7月7日の発砲事件は中国大陸内の戦争に止どまらなかった。「ナゾ」の十数発の
カヤクハンノウ ドコ カクダイ グレ ハンノウツクド
火薬反応が何処まで拡大していくのだろうか、と誰が予想できたであろうか。その反応速度は
想像もできない方向に発展し、昭和16年12月8日の「日米英開戦」となったのである。

では発砲したのは果たして誰であったのであろうか。その謎解きは未だに解決していない。私
ナゾ ト ロコウキョウ チュウトン ソウテツゲン
は謎が解けることはないだろうと判断している。当時、廬溝橋付近に駐屯していた宋哲元の軍隊
シャゲキ
も射撃され、日本軍も発砲されているから、当地の両軍が射ったのではないことは確実だ。

その他に考えられることは、①反蒋介石運動に失敗した軍閥「憑玉祥」につながる「石友三」
ハンショウカイセキ ダンバツ ヒョウギョクショウ セキユウサン
や「陳宮生」らの陰謀という説。②国民政府側の謀略機関である「藍衣社」の仕業という説。

③中国軍の正規兵が錯覚か恐怖にかられて発砲したと言う説。④当時の中国共産党北方局第一書
セイキヘイ サツカク キョウフ
記だった「劉少奇」（後の中国国家主席で文化大革命で失脚した）が、北京の学生を使用して発
リュウショウキ シツキヤク
砲したという説などがあるが、未だに真相は解明されていない。

①の説は彼らにとっては何の利益にもならない。②も必ず密告者が現れ自らが不利益となる。
ミツコクシャ アラ
③は同僚兵士が居る中で発覚する公算は大である。④は現在のところ最も有力な説とされている。
ドウリョウ イ ハツカク コウサン
私も④の説だと信じている。自分の利益のためには手段を選ばず、日本軍と蒋介石軍を戦わさせ
エラ ショウカイセキダン
て戦力を消耗させて、誰が最も利益を獲得するかを考えれば、漁夫の利を得るのは共産軍に限定
ショウカイセキダン モウレツ ツイゲキセン クナン チョウセイ タイキヤク ヨウヤ セン
されてくる。又、蒋介石軍の猛烈な追撃戦のために苦難の「長征」という退却で、漸く前年に陝
セイ イナカ エンアン キシカイセイ トッパツ サイキ
西省の田舎の「延安」にたどり着き、起死回生の事件を突発させて自軍の再起を計ったと判断す
トウ エ
ることが、最も当を得た判断だと思っている。そして、あわよくば共産党政権の建設を？と。

私は廬溝橋には2度も足を運び、平成2年（1990）には自由行動の単独旅行で調査研究し
ロコウキョウ
てきた。しかし戦時中の昭和15年当時とは様相は一変し、すっかり都会化して観光名所となっ
ヨウソウ
ていた。演習場は団地や工場群が建ち並び、崩れかけていた宛平県城は新品同様に改築し、他の
クズ エンペイケンジョウ
都市の城壁の取壊しとは反対であった。宛平県城の城門の前には「廬溝橋史料陳列館」が新築さ
トリコウ エンペイケンジョウ チンレツカン
れていた。内部の展示品で我々が知っているのは「宋哲元」だけで、他は共産軍の活躍と日本軍
ソウテツゲン
ウソハツキヤク ギャクサツコウイ ケイサイ ダイギャクサツ シンヨウ リュウジョウコ
嘘八百の残虐行為の写真の掲載ばかりで、南京大虐殺30万人記念館や、瀋陽（奉天）の柳条湖
トウテイ
の「九・一八記念館」と同様であった。この状態では日中友好の実現は到底望むことは出来ない。

「終戦前後の大陸の混乱」

42年（昭和17）1月1日、米、英、ソ、中国など26ヶ国は、相互協力と単独不講話を約束した「^{フコウワ}連合軍共同宣言」に調印し、反ファシズム連合が正式に成立して蒋介石は中国戦区最高司令官に就任した。中ソ不可侵条約は日本の対ソ侵攻を牽制し、ソ連も中国を積極的に援助した。

しかし中国国内では、「日本軍と蒋介石国民党軍」、「蒋介石国民党軍と共産党軍」、「日本軍と共産党軍」が互いに鎗を削って三つ巴の殲滅戦を演じていたことは、一般に知られていない。これは私が在中時代でも経験し、早くから戦後の国政の支配権の争奪戦を演じていた証拠である。

米国は欧州第一主義をとり、当面の中国戦線は国民党政府に委だね、ビルマルートの遮断されたことにより（私はこのビルマ作戦に参加）国外からの援助は困難となった。このような状況の中で蒋介石は、日本との戦闘の最終決着は米英に委ね、自らはむしろ戦後に備えて、共産党を抑圧し、独裁的支配体制の強化を目指していた。

当時、よく言われた「^{サンコウサクセン}三光作戦」（^{サンコウ}三光とは、^ツ殺し尽くし、^ツ焼き尽くし、^{ウバイ ツ}奪い尽くしという意味の戦法）と呼称される戦法は、中国側両軍は日本軍の仕業だと宣伝していたが、これは全く正反対の現象で、彼らは逃げる際に一物も日本軍に利用させないために使用した戦法であった。

当時の中国側の戦記を読むと、特に共産軍側の記事は出鱈目である。戦いは全て共産軍の勝利した戦のように偽って書いている。「^{コショウ}良鉄は釘にならず^{シワザ}良民は兵にならない」のが中国古来からの鉄則で、彼らほど程度の悪い軍隊を見たことがなかった。連合軍のお陰で戦争に勝利したから勝手気儘にどのようにでも書けるが、実際の彼らの戦果は百分の一ぐらいだろう。私は最後にビルマ（現ヤンマ）作戦に参加して完全に敗北したと思っている。しかし中国戦線では絶対に敗北したとは思っていない。最後まで中国戦線に従軍した日本軍人も負けたと感じた人は先ず居らないのではないだろうか。他力本願で中国は勝利したのであった。

1945年9月9日、支那（中国）派遣軍総司令官「^{オカムラヤスツグ}岡村寧次」は国民革命軍「^{カウキン}何応欽」司令官に対する降伏文書に調印した。しかし共産党は八路軍総指令の命令で日本軍の占領地の攻撃を命じている。一方、蒋介石は共産党に対し現地に駐屯し命令を待つように指令した。この時、ソ連共産党の力を過小評価したこともあり（当然と思う）、8月14日国民政府と中ソ友好同盟条

ユウイツ ミト
約を締結し、蒋介石国民政府を中国を代表する唯一の政権と認めた。

マンジュウコク ホウカイ
「満洲国の崩壊」 対日戦に参加したソ連軍は150万以上の兵力で、5000キロにわたる
シンゲキ センリョウ
全戦線で一齐に中国・東北地方に進撃を開始して南下、主要都市を次々と占領して8月22日に
ダイレン リョジュン ハチロゲン コオウ カントウガン
は大連・旅順に到達した。八路軍、外モンゴル軍もソ連軍に呼応して戦闘に参加した。関東軍司
チョウセン タイキヤク カントウガン カイソウ フギ
令部はいちはやく朝鮮国境に退却し、関東軍は各地で潰走した。8月17日、満洲皇帝溥儀は退
マンジュウコク イッキョ ガカイ リャクダツ ホウコウ ゴウカン
位し、満洲国は一挙に瓦解した。ソ連軍の攻撃下に在留日本人は略奪・暴行・強姦にさらされな
トウヒ ジケツ バクダイ ギセイシャ
から逃避を続け、集団自決も含めて莫大な犠牲者を出した。

ドクリツ シュウケツ ホウカイ
「アジア諸国の独立」 第二次世界大戦の終結は、数世紀にわたる植民地体制の崩壊の始まり
となった。45年8月17日にインドネシア共和国が、9月1日にはラオス、同2日にはベトナム
ム民主国が独立を宣言した。さらに翌年以降も独立が相次いだ。しかし、日本の敗北とともに独
立を宣言した国々に対して、英、仏、オランダなどの旧植民地支配国は、独立を武力で圧倒しよ
ウとして干渉したため、民族独立闘争が展開した。又、45年9月6日、朝鮮人民共和国の成立
ヒテイ
が宣言された。しかしこの人民共和国はアメリカ軍によって否定された。

ジュウケイカイギ ブソウカイジョ
「重慶会議」 戦後の国民政府は中国を代表する政府として日本軍の武装解除の権利を主張し
たが、これに対し共産党は、ハチロゲン シンシゲン カイライゲン ムカ
八路軍、新四軍は日本軍の69%、傀儡軍の95%を迎え撃ったの
であり（これは無茶苦茶）、日本軍武装解除の権利を持つと主張し、東北および華北北部の戦略
的根拠地とし、南方の占領区を防禦する方針をとった。このように戦後処理をめぐる国共間の
ケンザイカ ヘイキダンヤク
対立が顕在化したしたのである。武装解除した日本軍の兵器弾薬が内戦を支配したと予想される。

カイヒ
アメリカは両党間の調停により内戦を回避しようとしていたことにより、蒋介石は共産党に和
テイアン
平交渉を提案、共産党もソ連の国民政府支持という現実の中でこれを受入れ、モウタクトウ シュウオンライ
毛沢東、周恩来ら
ジュウケイ カイダン
が重慶におもむき、国共両党間の会談が開始された。

コト コウソウ キビ カイヒ
り会談でも異なる政権構想を持つ両党の主張が厳しく対立し、交渉の結果、内戦の回避、独
ヨウ
立・富強の中国の建設などが合意されたが、共産党の占領区の軍隊と政権の法的地位について
ゴウホウテキ
は、国民党は「軍令と政令の統一」を理由に拒否した。八路軍、新四軍の指揮権を国民政府は要
キョヒ ユズ
求したが共産党は強く拒否した。共産党のめざす「新民主主義革命」には譲れない一線であった。

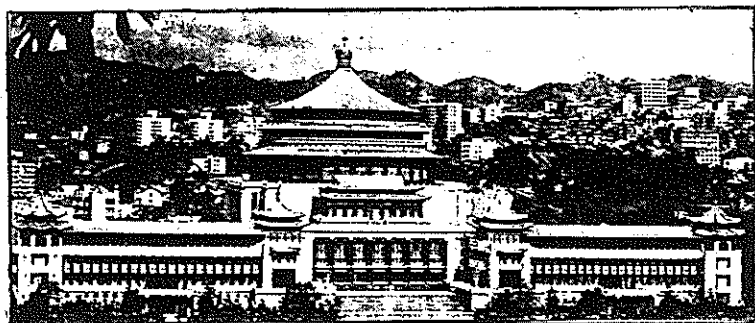
『内戦勃発』

国民党は和平交渉の一方で、共産軍の開放区に対する武力攻撃の準備を整え、10月中旬に攻撃を開始したため、内戦の危機が一挙に高まった。アメリカは大戦後、世界の最強国として資本主義世界の維持を任務とするようになったが、ヨーロッパの安定を第一としていたため、中国に内戦が起こっても全面的に軍事介入できない状態にあり、当面内戦を回避して国民党を中心とする安定した政権を創り出す方針を採り、マーシャル特使を派遣して国共間の調停を計らせた。

終戦の翌年1月10日から重慶で政治協商会議が開かれた。この会議では共産党の国民政府軍への統合が先決だとする国民党と、国家の民主化が先決だとする共産党が鋭く対立したが、民主党諸派の調停によって、軍事問題、憲法草案、平和建国綱領、政府組織、国民大会に関する5項目の決議を採決して、1月31日閉幕した。共産党はこの会議の成功を「平和と民主主義の新階段」の到来と評価した。

「内戦の勃発」

政治協商会議は表面的には支持しながらも、事実上はこれを骨抜きにする諸決議が通



過されてしまった。（上の写真は会議が行われた重慶市大礼堂。私は1987年に訪問した）

2月には、ソ連軍撤退後の東北地域（満洲）を占領するため国民政府軍が進攻して、共産党系の東北民主連軍との間で争奪戦を開始した。6月末には国民政府軍は中原（黄河沿線）にも攻撃を始め、全面的な内戦に突入した。アメリカは対中国軍事援護法による国民政府支援を明らかにし、国民政府軍は10月、華北の中心「張家口」、翌年3月には共産党中央部の所在地「延安」も占領した。しかし国民政府軍の支配は「点と線」に止どまった。（日本軍の占領地と同様）

内戦の過程は共産党にとって、国民党との戦いであると同時に、彼らの開放区を強固にして抗日戦争勝利後の新しい社会を創出していく過程でもあった。それは、農民の土地所有、すなわち「耕す者、その田を有す」の実現を目指そうとするものであった。この段階で地主の土地所有一般を否定するのではなく、大地主、漢奸（抗戦期の対日協力者）、悪徳地主が対象であった。

内戦は農村の階級闘争と結合し、農民は自ら得た土地を守るために人民解放軍（従来の八路軍
と新四軍改編）を積極的に支持するとともに、続々と軍隊に参加した。これまでの土地改革の経
験と実績を総括して新しく作った「土地大綱」は、封建的半封建的土地制度を廃止し、「耕す者、
その田を有す」を実現すること、すべての地主の土地所有権を否定し、土地改革以前の債務をす
べて消滅させること、老若男女を問わず農村の全人口に土地を均等に分配することを定めている。
貧農・雇農（小作）に依拠してこの土地改革を実行するために貧農団が組織され、地主の土地・
財産、さらに富農の土地・財産を没収して村民に分配した。しかし「貧農路線」と呼ばれたこの
土地改革の展開の中では、中農の利益を犯して打撃を与えたり、地主・富農の商工業にも没収が
及んで、商工業政策を混乱させるという「極左的」傾向が発生した。しかし急進的な土地改良は
修正あるいは停止された。革命の進展とともに、この内戦に勝ち抜くため、むしろ経済の回復、
発展が優先的な課題とされ、本格的な土地改革は後の課題とされた。

我々が大陸の各戦線で戦闘を実施していた時、中国のほとんど9割が農村地帯であった。その
農村の土地の大部分は大地主の所有する土地で、小作人達は働いても働いても借金が増えるばか
りだったと聞いていた。そしてその大地主達が市町村の長を勤めており、小作人の農民達は牛
馬の如く働かされていたのが現実であったようである。

「耕す者、その田を有す」となれば、それは歴代王朝の革命と同じであり、農民が人民革命軍
の兵士になるのは自然現象である。この政策が人民解放軍の戦略の大勝利だと理解している。

抗日戦争終結後、国民政府の地域の日本資産を中心とする枢軸国（日独伊）の資産の大部分を、
国民政府は接収した。これらが合理的に経営されていれば、国民経済発展の条件が存在していた。
しかし悪徳官僚による私的利益追求のため、国家資本の動員という体制は戦後も継続し、「官僚
資本」系企業だけは繁栄したという。

国民政府の内戦遂行を支えたのはアメリカからの借款・援助だけで、中米友好通商条約などに
より、アメリカの余剰農産物が大量に輸入され、さらに援助物資として流入した。しかし経済危
機、生活破壊の進行という状況下で、民衆の内戦反対、飢餓反対のデモやストライキが頻発し、
国民政府の弾圧にも拘らず、反国民党の統一戦線が形成されていった。

「内戦の新展開」（これらの記事は重慶を訪れた際に新華書店で購入した書を一部参考）

内戦勃発後1年間に国民政府軍112万人が殲滅され、解放軍兵士は75万人増加した。人民解放軍の戦略的進攻は47年6月開始され、華北の野戦軍は黄河を強行渡河し、南下して武漢、南京をにらむ大別山脈に進出する一方、河南省、江蘇省にも進撃した。東北（満洲）でも東北人民解放軍が、日本の関東軍から接收した大量の武器、弾薬をソ連から受取り、攻勢に転じた。

47年10月10日の「人民解放軍宣言」は、蒋介石政府打倒、民主連合政府樹立の方針を正式に発表した。48年に入ると国民政府軍は大都市の防衛のために軍隊を釘付けにされ、内戦の主導権は人民解放軍に移った。

48年秋からの三大戦役は解放軍の勝利を決定的にした。9月、東北（満洲）野戦軍は遼瀋戦役（奉天・遼陽）を開始、11月に全東北を占領した。11月、中原・華東両野戦軍により淮海（黄河と長江の間の淮河一帯と江蘇省海岸線）戦役が開始され、翌年1月、徐州を中心とする地域を占領した。東北・華北両野戦軍は48年12月に平津戦役（天津・北京）を開始し、49年1月31日に北京に入城した。

『中華人民共和国の成立』

アメリカにとっては、当時のヨーロッパの政治的危機による社会主義化を阻止することが最大の課題であり、また蒋介石への援助が政治・経済のみならず、軍事的にも実効がないと判断し、中国の内戦には決定的な介入に踏み切らなかった。このような国際情勢は人民解放軍に有利に作用した。49年4月、国共和平会議の最終的決裂を経て、人民解放軍は総攻撃を開始、長江を渡り南方主要都市を次々と占領、国民政府軍の投降、内部反乱も頻発した。

都市の接收管理、生産の回復が進められる過程で、新政府樹立の準備が進められた。6月、共産党、民主諸党派、大衆団体、少数民族、海外華僑などの代表134名が参加して、北京で新政協協商会議準備会が開催された。毛沢東はこの直後「人民民主主義独裁について」講演し、人民、すなわち農民、労働者階級と共産党の指導の下に団結し、地主階級、国民党反動派に対して独裁を実行することと、人民内部における民主制度を結合するのが人民民主主義であると規定した。

10月1日、北京と改称された新首都で「中華人民共和国の成立」が宣言された。

『20世紀後半の中華人民共和国』

「毛沢東」『モウタクトウ』（中国読み発音はマオ・ツオトンである）

モウタクトウ インショウ タイジン
毛沢東の私の印象としては、2頁に書いたように「大人」という印象が強い。我々が中国戦線
タイジン タイジン
に出陣していた時、中国人は我々を「大人」と呼んでいた。その「大人」とは「体の大きい人、
キョジン トク ドリョウ ジンカクシャ オオモノ フウカク
巨人」、「おとな」、「徳の高い人」、「度量のある人」、「人格者」、「大物」、「風格があ
る人」、「身分・地位の高い人」、「師匠・学者」等のいろいろな意味があるようだ。

モウタクトウ ケイレキ シハンガッコウ ツト
毛沢東の経歴は師範学校を卒業して先生を勤め、有名な五・四運動（23頁参照）にも参加し、
中国共産党に入党して27年7月の国共分裂後は「井岡山」に農村革命根拠地を建設した（江西
ズイキン シュトク チョウセイ ヨギ
省）。28年、「瑞金」で軍人出身の「朱徳」の軍と合流して長征（退却）を余儀なくされた。

彼の経歴が示す通り人徳があるから軍や党の幹部に推薦され、度量があり人格があったからこ
ソウショク イッシン セイザツ
そ人を引き付け、中共軍の要職を一身に引き受けることになったと思う。軍隊指揮官には「生殺
ヨダツ ケン コウケツ ソナ フクジュウ
与奪の権」があるものの、高潔な人格が備わっていなければ部下は心から服従しない。これは私
ジンチュウ タイケン キョウケン
の陣中生活の体験からの尊い教訓である。

「定—尊」

コクフ ソンブン サンシャ
国父とまで言われた「孫文」は、「中国人は散砂の民だ」と言っている。中国政治の伝統王朝
テイイッソン スナ カク
なかで、「定—尊」の存在が必要だと言われていた。バラバラな砂のような固まりのない中国
トウゴウ イジ ソンケイ イダイ シドウシャ
社会において、統合を維持するには、一人の尊敬を集めた偉大な指導者が必要であると言うこと
コウテイ
である。これは中央においては皇帝であり、地方においては信頼される指導者と言うことになる。

シキンジョウ ゴモン ソビ テンアンモン
1949年10月1日午後3時、紫金城の午門（南門）の南側に聳える「天安門」（明時代の
ショウテンモン セキユウ
承天門）の前の広場で、「中華人民共和国の成立」が宣言された。110年にわたる「積憂」を
ツ コンナン ソウゾウ アマ
引き継いだ新中国が直面した経済的な困難は、想像するに余りあるものがあつたと想像する。

オウチョウセイド トウチコウゾウ
王朝制度が変化した現在でも、こうした統治構造は、今も大きく変わってはいない。毛沢東時
モウタクトウ コウズ
代が到来しても中央に一人の毛沢東が指揮し、地方には無数の毛沢東がいる構図でなければなら
モウタクトウ タイヨウ
ない。建国当時の毛沢東は中国民衆にとっては「太陽」であつた。中国共産党の最高指導者とし
トウホウ クレナイ ノボ モウタクトウ シュツゲン エンソウ
て、「東方に紅の太陽が昇り、中国に毛沢東が出現した」、と建国の大典の際に演奏されていた。

国家建設の重大な一環として地方各級（^{イッカン} 縣市町村）に人民民主政權が組織され、国家統一が進展していった。対外的にも49年12月、人民政府主席「^{モウタクトウ} 毛沢東」の代表団がモスクワを訪れ、翌年2月には「^{シウニン} 中ソ友好同盟相互援助条約」を結んだのをはじめ、50年10月の建国1周年までに25ヶ国^{ハキエウ}の承認を得るに至った。ところが、朝鮮戦争の勃発（50年6月）とその波及は、新中国の存立にかかわる重大な問題として発展し、同年10月、中国人民志願軍（^{サンセン} ？）が参戦、国内でも「^{コウペイエンチウ} 抗美援朝」運動が大規模に展開し、毛沢東は建国早々から難問題に直面したのである。

このような軍事的激動を支え、新中国の政治的基礎を確立したのが、50年6月に施行された「土地改良法」にもとづく新開放区約3億1千万人を対象とした大衆運動であった。

^{ホウケン} 封建的搾取制度の廃絶と農民的土地所有の実現という、孫文の主張の「^{タガヤ} 耕す者、その田を有す」という思想が52年末には全国的に実現し、3億余の農民はその生産意欲の高揚のみならず、新中国における政治的主権者としての役割を果たしうる条件を獲得した。又、広大な農村に残存していた国民党系などの勢力を一掃し得たのも、この土地改革運動の中であった。

^{ソンブン} 孫文の後継者は最初は^{シウカイセキ} 蒋介石であったが、人民政府建国後は孫文の後継者は毛沢東であること^{モウタクトウ}を全国民に知らすために、孫文を祀る中山陵を修築し、各都市の主要道路にも中山路の名称を残すなど、^{コクフ} 国父「孫文」の後継者は「^{モウタクトウ} 毛沢東」だと、現在でも宣伝にこれ勤めているようだ。

中国経済の圧倒的部分を占めていたのは、いかに後れた技術水準と低生産性によって特徴づけられていたとはいえ、農業であった。これは我々が戦時中から見てきた通りである。この農民搾取は、^{シン} 党・国家と農民との間に強い緊張関係をつくり出さずにおかなかった。この緊張関係を抑え込んだのは、^{トクチウ} 毛沢東の卓越した権力と権威であり、その権力と権威を背後にした農民に対する「^{ボウリョク} 国家的暴力」であった。

毛沢東の貧農に対する思い入れはまことに強く、貧農は貧農であるがゆえに革命的存在であった。しかしこのことは農民を革命勢力の中核として位置づけるという意味であっても、彼らを保護・育成しようという意味では全くなかった。革命の成就のためには、革命的存在たる彼らは過酷な国家的搾取の対象とならなければならないということであった。毛沢東思想の「二元性」というべであらうか。だから過去の中国革命は明王朝のように田舎の農村から生まれたのである。

モウタクトウ 毛沢東の思想と行動の基本方針は急進主義であった。急進が厳しい現実によって打ち砕かれれば、これに呼応して開始される実務派官僚による「反冒進」によって経済が安定を取り戻す。しかし経済が安定を取り戻せば、再び急進路線に回帰していくということが、飽く事なく繰り返された。毛沢東の急進主義は米ソという威力に脅威を受けながら、建国を進めざるを得なかった国際政治の環境の所産でもあったと言えるだろう。

しかし周恩来首相による急進主義への批判は強くなってきた。急進主義への批判が指導部に根強いものと見た毛沢東の、その後の自らの政治基盤強化への執念は、いかにも毛沢東らしい「権謀術数」に満ちたものであった。

毛沢東は、この時期「百花斉放・百家争鳴」をスローガンとし、社会主義建設のための自由な論争を喚起させようと試みた。多くの知識人は、毛沢東と党が繰り返し強調する「議論するものに罪なし」のスローガンに次第に乗せられて、初めは慎重に、しかし次第に厳しく党への異議を申し立てた。共産党一党支配体制それ自体への異議も少なくなく、新民主主義の時代以来、鳴りを静めていた諸派からの意見は意外にも大きな広がりを見せたのである。

しかしほどなく「整風」と「反右派闘争」が吹き荒れ、「右派分子」の汚名を着せられて失脚したものの数は五五万人を超えた。「百花斉放」「百家争鳴」でも何でもない。共産党一党支配体制の強化に資する以外の言論を封じ、これに反対する右派分子を指導部と国民階層から見附だして、これを肅正するための方途が、すなわち「百花斉放・百家争鳴」であった。

この闘争が大躍進、人民公社運動、さらにプロレタリアート文化大革命へとつづく、「狂気の時代」へと向かわせる出発点となった。

反右派闘争を経て「反冒進」を吹き飛ばす毛沢東の激しい反撃が始まり、中国は「大躍進」と「人民公社」化運動へと踏み込んでいった。反右派闘争の反冒進のエネルギーか、再び冒進歩の方向へと毛沢東を走らせていったのである。

このころの毛沢東は、ソ連との対抗において中国に独自の社会主義を作りあげようという意欲を持っていたようである。しかし見通しは現実性を欠き、それ以降、中国の農業は「奈落」の底に落ちていった。

夢を可能にするものが協同組合の大規模化であり、深耕による土地改良であり、さらに水利建設による灌漑面積の拡大であると考えられ、深耕は農業増産技術の中核的方式とされたのである。

「中国社会主义経済略史」を読むと、これは中国の農業生産技術を無視した政治運動のスローガンに過ぎず、夥しい労働力と種子の浪費を招いたこと、深耕への政治的な圧力が各地方をして「水増し報告」をさせた結果、収穫量は天文学的な数字が出されたと書いている。

毛沢東の考え方の集成が、「農村人民公社の設立についての中共中央の決議」であった。この決議は、人民公社運動は農村の革命的自覚による大衆運動であると主張している。しかし、大規模農業集団化が農業生産力をいかなる論理で向上させるのか、という肝心の論点については何も語っていない。毛沢東にとっての集団化は自己自身の身中に「構造化」した理想郷の産物であり、「自己目的」であったようである。

人民公社のスローガン「一大二公」は、大規模かつ公有性という意味である。「大」とは公社の農家数が多いという意味ばかりでない。公社の経営範囲が、農業は勿論、工業、商業、文化、教育、軍事、医療などを含む、社会組織として成立するという意味である。「公」とは、一つには、元来、全人民所有制のもとにあった企業、銀行、商店などの経営権限を人民公社の管理に任せること。二つには、公社員の自留地、家禽、家畜、家庭副業などを人民公社の所有とし、私有地は一切認めないこと。三つには、人民公社の組織のなかに公共食堂、幼稚園、託児所、養老院などの公共的事業を組み入れ、さらに軍事的機能までも包含すること。加えて、賃金制と食糧供給制（無償現物配給制）を結びつけた分配制度を取り入れることを、意味している。

決議として最後に、「人民公社は、社会主義を完成し、次第に共産主義へ移行するうえでの最適の組織形態であり、これは未来の共産主義社会の基礎組織に発展するであろう」と述べている。

こうして「嵐のような」人民公社運動が展開していったのである。しかし嵐は一瞬のうちに過ぎ去り、残されたのは無残にうちひしがれた経済の残骸であった。

幸いに私は、このような時期に数箇所の人民公社を見学することが出来たのであった。昭和51年11月（1980）、日中国交正常化した直後、入国の許可が下りて雲南省の慰霊巡礼を始めとして、広西壮族自治区の省都「南寧」から「柳州」「桂林」の各激戦地の慰霊に巡礼に参加した。

ウナンン コンメイ チョメイ セキリン
雲南省都の昆明は著名な仏教寺院が数多く存在し、郊外には有名な「石林」等の観光資源が豊
である。又、桂林は世界的な景勝地で観光客は自然に誘致されるものの、「南寧」や「柳州」は
日中友好団体の我々を引き付ける観光資源は全くなかった。そこで案内された所が「人民公社」
であった。我々としてはこの機会を逃しては、人民公社の見学はなかったのであった。

ナンネイ
南寧で見学した人民公社は18個の農村が合体した人口約1万人程度のもので、最高幹部は全
て共産党員が占め、日本の農業を知らない彼らは大法螺を吹いて説明していた。先ず託児所の子
供たちの歓迎の歌や踊りから始まり、続いて収穫期が過ぎて僅かな食糧が残る倉庫を案内した。
続く工場らしい建物の中には機械らしい機械は一つも見えず、日本で言えばポンコツの自動車一
台と、古くさい中国製耕運機（運搬用）数台があるのみである。広々とした農場を廻って見ると、
パインとパパイヤ畑に少々の実がなっているだけで、放牧場には800頭の牛が放牧されていた。
説明する幹部は日本にはこんなに大きい牧場はないだろうと、自慢話に花を咲かしていた。「井
戸の中の蛙大海を知らず」であった。幹部は農民は公社の生活に満足していると説明していたが、
熱心に労働する者も怠惰な労働者も賃金は同じであれば、当然心の中で不平をこぼす人間が存在
していることは間違いない。全般的に責任感がないことは直感的に見え見えであった。男女とも
に人民服に人民帽の人民戦術の農作業は、自由のようだが不平不満の態度が現れていた。毛沢東
の人民公社を謳歌する根本は、「夢の空論」に過ぎないと感じながら公社を後にした。

今、当時を回顧すると、毛沢東の権力が神の力の如く、絶対であったから出来たのであろう。

私は訪中5年前の昭和50年（1975）にもソ連を一周し、ソ連の集団農場「コルホーズ」
を見学した。コルホーズとはソ連の協同組合形式による農民が、集団経営を行うものである。主
な生産手段は社会化され、生産は集団によって行われ、収益は各自の労働に応じ分配されること
になっていた。見たところ完全な公平などは「空論の空論」に過ぎなかった。

私は昭和60年（1985）に「イスラエル」と「現在のパレスチナ」を訪れた。その機会に
イスラエルの「農村共同体」である『キブツ』を見学した。これも私有を否定し、生産・消費活
動や教育も協同で行っていた。この組織は、ソ連から引き上げてきたユダヤ人が「コルホーズ」
を真似て組織したもので、現在も存続しているかどうかは不明である。

『農業は大寨に学ぶ』という運動が展開され、世界的に宣伝された。私も自然に引き付けられて山西省の一寒村にまで足を運んだ。大寨という寒村が大洪水に見舞われ、畑や人家が洪水によって壊滅してしまった。しかし農民は僅かな蓄えと人力を持ち寄って、国や省の援助を借りずに自力で畑を耕作可能な状態にまで復旧させ、さらにその後、驚異的な農業生産高を実現したというのであった。〔寨＝村の意〕（人民公社は軍隊式に大隊、中隊の組織で構成していた）

これを耳にした毛沢東は、この事実を農村の「自力更生」のモデルとし、自然改造による高収農地の造成運動を『大寨大隊方式』と名づけて全国的に普及拡大の運動を展開した。

しかし、改革・開放の後に判明したことは、大寨大隊の超高実績はすべて国家からの援助、すなわち灌漑施設建設のための巨額な資金と、人民解放軍兵士の大量投入によって、初めて可能になったという事実であった。毛沢東の焦りが大衆運動の煽動となって現れたのである。

毛沢東の冷めることのない政治的野心は、調整政策に奏効していった「実権派」の「劉少奇」や「鄧小平」からの奪権闘争、プロレタリア文化大革命へと直進していったのである。

「文化大革命」の10年

人民公社の失敗から毛沢東は資本主義復活の危機感を抱き、調整を推進する幹部たちを「党内資本主義の道を歩む「実権派」（走資派・修正主義）とみなし、党内にもブルジョア的な「官僚主義者階級」が形成されていると見たのである。そこで彼らに対する階級闘争を提起し、社会主義教育運動を指示した。

「実権派」に対する「階級闘争」が「激烈になった」のが「文化大革命」（文革）であった。「実権派」からの権力奪還のために、何も解らない童顔の学生を中心にした紅衛兵たちを動員し、党外から「党の司令部を砲撃せよ」と号令をかけた。紅衛兵の運動に物理的な力の支持を保証したのが、毛沢東に忠実な戦友と言われた「国防部長の林彪」が率いる人民解放軍であった。

現在の中国では「文化大革命」は、指導者「毛沢東」が誤って発動し、林彪や江青などの反革命集団に利用された結果、深刻な災厄をもたらした「内乱」であったとしている。

この文革を3段階に区分してみると、第1期は、毛沢東・林彪らは全面的に劉少奇ら「党内で資本主義の道を歩む実権派」（走資派）に対する奪権闘争を開始したことに始まる。反革命修正

主義路線の代表とされた劉少奇^{リュウショウキ}らは、完全に政治的に排除された。そして林彪^{ハイジウ}は毛沢東^{マウゼイトン}の後継者としての地位が明文化されたのである。当時の映像を思い起こすと、秀才^{マナガ}と言われて次の国家主席（現在の総書記）は間違いなしと約束されていた「劉少奇^{リュウショウキ}」が、三角帽をかぶせられて両手は縛られながら、北京の市街を紅衛兵に引きずり回されていた哀れな光景が想起されてくる。

第2期は、73年8月の十全大会までである。林彪グループの要求する権力再配分の主張が毛沢東との間の矛盾を激化させ、ついに林彪らの「武装クーデタ」事件を引き起こすに至った。このことは私の脳細胞^{ノウサイボウ}も確実に記憶している71年9月13日事件である。このあと、周恩来^{シュウオンライ}が政治的な混乱を立派に収集した。さすがに周恩来だと私は記憶している。

林彪事件後の最大の中国の戦略転換はアメリカとの和解（72年2月、つづいて日本とのそれと、また、71年10月には国連復帰がなされた）に示されるように、対ソ関係の悪化を前提として組み立てられたものであった。

文革の第1段階で劉少奇^{リュウショウキ}とならんで「走資派」^{ソウシハ}として打倒された「鄧小平^{トウショウヘイ}」が、副首相として復活したのも73年4月であった。しかし、同時にその後「四人組」といわれるグループらも党政治局に入った。

第3期は、四人組による権力再分割要求がエスカレートし、特に周恩来や鄧小平に対する批判（批林批孔運動^{ヒリンヒコウ}）を通じて國務院の実権掌握を企図した時期である。しかし75年1月、周恩来は「四つの現代化」の推進を表明し、「資本主義復活批判」とは対照的な立場を示した。党・軍レベルでも鄧小平^{トウショウヘイ}が副主席、総参謀長を兼ね、党・軍組織の再編成に乗り出した。四人組はこれらに対して反撃を加えたが、周恩来の死は新たな政治的動揺を予想させるものであった。

「動乱の10年」の社会的基盤

プロレタリア文化大革命という「動乱」が、なぜ10年もの長きにわたって展開したのか。その第一は、「毛沢東の指導上の誤り」が最大の原因である。第二は、複雑な社会的歴史的原因がある。「ある階級が他の階級を打倒する政治的大革命」を必要とするほどであったか、どうかである。中国の歴史的伝統としてある「専制主義」的思想の濃厚な部分が残存し、中共党内にも個人の「専断」を許したのみならず、社会的に個人崇拜、特権思想、身分（血統）観念といった、

「封建的イデオロギー」の広範な復活がみられ、「動乱の10年」を特徴づけている。その反面
文革の過程から深刻な社会的亀裂が生じ、派閥組織の大量出現と無政府主義的政治行動が一般化
し、法制度の不備に伴う無法状態など、「法治」の完全な崩壊状態を生み出した。

文革10年の「全面内戦」によって、社会の全階層を混乱の中に陥れ、党と政府の幹部の90
%以上が批判を受け、80%以上が闘争と審査の対象となり、1億人以上の人が政治的社会的な
被害を蒙ったと言われる。経済的な損失は莫大で、この10年間で、建国からこれまでの30年
間の基本建築投資の2倍以上の損失になったと言われている。

「批斗本本批斗」 (42頁を参照)

文化大革命で自分(毛沢東)に反旗を翻して謀反を起こした「林彪」を批判したが、それに加
えて、文革中に毛沢東は中国伝統の儒教の祖「孔子」までも批判して、儒教の寺院までも破壊し
た。文革後に中国各地を視察した私は、徹底的に破壊された仏教寺院や儒教寺院(廟・院・観)
の無残な残骸を目にし、過去は全て「悪」だとする文革の思想に憤りを覚えた。これは秦の始皇
帝の「焚書坑儒」事件以上の悪行であった。「焚書坑儒」とは、紀元前213年、医薬、卜筮
(占い)、農事関係以外の書物を焼きすてさせ、翌年、批判的な言論をなす学者数百人を坑埋め
にして殺した事件のことである。

毛沢東は又、漢建国の初代皇帝(劉邦)の高祖ともよく似ている。高祖は一致協力して各戦闘
に参加して建国に貢献した高官達をほとんど殺害した。それと同様に毛沢東も、長征から抗日戦
争、そして戦後の内戦を共にした劉少奇、鄧小平、林彪などの戦友までも失脚・追放した。普通
の人間の行為とは到底考えられない。権力欲と言うのか、独裁を通り越した行動である。

81年6月、中共中央委員会総会は、「建国以来の党の若干の歴史的な問題に関する決議」を
採択した。これを読むと、文化大革命が完全な誤りであったことを確認するとともに、毛沢東の中
国革命に果たした役割は功績が第一義であり、偉大なマルクス主義者・プロレタリア革命家・戦
略家・理論家だったことを指摘している。しかし農政失敗の人民公社論などは論じていない。

私は1981年の訪中で、中国国際旅行社日本語班所属の通訳「劉桂香」氏と日中の書籍を交
換し、初めて毛沢東選集を入手してから戦後の中国の研究を手始めたのであった。

「周恩来の死」と「天安門事件」

1975年1月、党指導部副主席に復活した鄧小平は、「四人組」（王洪文・張春橋・江青・姚文元）に対抗する勢力として、病状悪化の周恩来にかわって内外政面で指導力を強化しつつあった。鄧小平の復活は周恩来の力によるところが大であった。しかし周恩来は76年1月8日に78歳で死去した。文革派「四人組」は、すでに75年後半頃から「鄧小平批判、右からのまきかえしに反撃する」運動を進めていたが、これ以上、周、鄧勢力の増大を黙認しえず、「走資派」批判を展開した。

ところが4月の「清明節」にかけて、北京の「人民英雄記念碑」（正面の献辞は毛沢東だが、裏側の献辞は周恩来の手になる）は、周恩来への献花で埋めつくされ、数十万人が天安門に結集して弔問した。すると4月5日夜、1万の民兵と3千人の警察、さらに衛戍部隊は、広場の民衆を攻撃し逮捕した。中央政治局は毛沢東の指示にもとづき、天安門事件は「反革命的政治事件」とした上で、鄧小平の解任と華国鋒の首相昇任を決議した。

この頃、毛沢東はすでに老衰は激しく82歳で死去した。天安門事件から5ヶ月目であった。

「朱徳」

毛沢東、周恩来、劉少奇と並ぶ中国共産党及び中華人民共和国の第一代の最高指導者の一人で、中国人民解放軍創始者の第一人者である。1909年（明治42年）に雲南講武学校（軍官学校）に入学し、清末の革命運動に身を投じた。11年の武昌蜂起が起きると、雲南省で呼応して辛亥革命に参加して四川省に進軍した。新しい革命の方途を探索するためドイツに留学し、周恩来と知り合い、中国共産党に入党した。27年、南昌軍官学校長となり、27年8月1日の南昌蜂起（26頁に記載）に参加し、毛沢東の部隊と合流して「長征」に参加した。

37年の国共合作で「八路軍」の総司令となり、山西省で日本軍に抗戦して39年に延安に戻った。終戦後の内戦のときは人民解放軍総司令として作戦を指揮した、生え抜きの軍人である。朱徳は毛沢東が没した2ヶ月前に90歳でこの世を去った正規の軍人出身者であった。特にここに掲載した意味は、中国戦線に参加した経験者は八路軍と言えば「朱徳」であり、「朱徳」と言えば「八路軍」を意味しておると感じ、名声は毛沢東以上であったからである。

「鄧小平」

過去50年の中国共産党の治世は大変化した。将来のことは誰しも解らないだろう。革命を自らの手で戦った最後の一人の人物が、完全にこの世から姿を消した。その人こそが鄧小平であった。中国共産党という政党がこれからも存続しても、長征（総退却）を生き抜き、延安に閉じこもり、内戦に勝利して北京の天安門の上で建国を祝賀した人は全て黄泉の客となってしまった。

この半世紀の中国共産党の歴史を回顧すると、前半の30年は文化大革命の毛沢東思想に指導され、後半は鄧小平の「改革・開放」の時代、即ち「資本主義と大差のない市場経済」に指導されたと思っている。

私は昭和55年（1980）以来、18回にわたって訪中し、その変化を自分の眼で見てきた。毛沢東時代は彼の個人的威信を頂点に計画経済を基礎にして中央集権を維持してきた。しかし、鄧小平路線は政治・思想的には中央集権を維持しつつも、経済では統制を緩めて活性化に重点が移っていった。それは彼「鄧小平」が3回も失脚した逆境の経験から生まれたのかも知れない。

鄧小平は文化大革命で最初の失脚（生涯では2度目、1度目は1930年代）から復活したのが73年（69歳）、3年後にもう1度失脚して、復活した77年には72歳であった。そこから出発して17歳も若い華国鋒から権力を奪い、階級闘争第一主義から経済建設第一主義へと舵を転換した強固な意思と政治力は、天晴れであった。

鄧小平路線、あるいは鄧小平思想は何か、と問われると、政治にも経済にも無知蒙昧な私には全く解らないが、彼が述べた有名な「白猫黒猫論」や「発展こそ道理の中の道理」と言ったことは素人の私でも理解できる。「白い猫でも黒い猫でも鼠を取る猫はよい猫だ」ということは、生産第一主義を唱えた言葉であろう。

毛沢東は田中角栄総理に、「鄧小平は体格は小さいが度胸も度量もあり、頭脳は党内で随一の明晰者だ」と紹介したことを、私は今でも記憶している。そして鄧小平は、日本軍が蒋介石国民党政府を重慶まで追い詰めて後退させてくれたから、将来の抗日戦も内戦も共産軍は有利に戦えた。これは日本軍のお陰だと感謝していた。また訪日の際に新幹線に乗車し、車窓に写る日本の家屋を眺めて「兎小屋」と言ったことも本音であり、私には好感を抱かせる人物であった。

鄧小平は90歳を超える長寿のため、毛沢東も周恩来もなしえなかった歴史的事業、すなわち「革命中国」の路線転換を成し遂げた。現代中国の「反・革命家」と呼んでも良いだろう。鄧小平の好んで用いた、「機失すべからず、時再び来らず」という格言があった。我々が学んだ古書の作戦要務令にも「戦機の看破」ということが力説されていたが、鄧小平の格言の通りである。

鄧小平は現実主義者であった。彼はフランスに留学した経験もあり、彼のイメージしていた社会主義はどのようなものだったのか。それは「生産力主義」であった。「社会主義の優位性は生産力が資本主義に比べてより高く、より速く発展することにある」と繰り返し発言していた。彼は我々に欠陥があったとすれば、生産力の発展を軽視してきたことだと述べていた。

鄧小平はまた漸進主義であり実験主義であった。毛沢東のように大躍進運動、人民公社化運動、文化大革命のように大衆を総動員し、一挙に目標を実現するという方式は鄧小平のものではない。

プロレタリア文化大革命の政治的狂気をくぐってきた鄧小平は、「改革・開放路線」を秩序正しく運営したいというのが彼の念願であった。その願いが公然と発表されたのが「四つの基本原則」であった。四つの基本原則とは、社会主義の道、人民民主独裁、共産党の指導、マルクス＝レーニン主義・毛沢東思想、この四つの堅持のことである。この四つの原則のうち最大のポイントは第三の、共産党一党支配体制の堅持であった。中国を左右の攻撃から守り、生産力の発展を維持してゆくためには、共産党一党支配体制を断固として守ることが必要だといふのであった。

しかし1989年6月4日の第二天安門事件（自由化を求める運動）では、現政権が「銃口から生まれた」政権であることを解放軍まで出動させてまで、改めて民衆に思い知らせてからは、異議申し立てさえも出来ない状態になった。それは民衆の中の共産党の威信の低下、そして統治機構内部の北京政府の威信の低下、つまり地方に対する中央の統制力の低下という、これまでにない状況によって、もたらされていたのである。

第二次天安門事件以来、経済の活況が著しく発展し、外国からの投資も相当の規模というのに、共産党と中央政府の威信が低下してしまったのである。それは、ここ数十年の中国の路線をリールしてきた鄧小平の路線に負うところが大きい。そこで鄧小平は「思想を開放し、事実に則して真理を求め、一致団結して前を見よう」という演説を行った。そこで既に古い体制を改革し、又、

外国の進んだものを学ぶという「改革・開放路線」の骨格が打ち出された。

この路線に足を踏み出した鄧小平の意図は、彼自身の言葉からよくわかる。第一に貧しさから抜け出すために生産力を発展させること、第二に彼自身も被害者の一人であった文化大革命を生み出した、共産党の統治機構を改善したいということであった。

中国の社会主義の30年は、条件にさまざまな違いがあるとはいえ、第二次大戦の敗戦国である日本や、その植民地であった韓国・台湾に経済的に大きく水を開けられてしまった事実を国民に気づかせた。これは毛沢東路線から脱却するためであった。そして彼は「貧困は社会主義ではない」と力説した。

92年秋の14回大会で「社会主義市場経済」という言葉が公認された。社会主義といえば計画経済ということは破棄されたが、市場経済の導入は鄧小平路線の重要な部分である。社会主義と市場経済の間には、根本的な矛盾は存在しないと彼は言っている。問題は、どんな方法が社会の生産力を強く発展させるかである。長年の実践の結果、計画経済だけでは生産力の発展を束縛することが証明された。計画経済と市場経済を結合させれば、生産力をさらに開放し、経済発展を加速できる。公有制度が常に主体的地位を占めるから、社会主義の原則に反しないと述べているが、門外漢の私には完全な理解は出来ない。

鄧小平はさらに「政権の性質が社会主義であり、共産党の指導があり、公有制が主体であり、共同富裕という目標があるから、社会主義市場経済は資本主義市場経済よりも、さらに成功するはずである、と述べている。経済体制の説明に「政権の性質」という言葉が初めて登場したが、資本主義との違いは「政権の性質」つまり「政治」だけと言うのである。

当時、幾度となく訪中していた私は、中国奥地を案内した通訳氏が、いつれ社会主義は崩壊すると堂々と述べていたことを思い出す。如何に文化大革命の被害の大きかったことを言っていたのであった。それがいつの間にか通訳までが、「四つ（農業、工業、国防、科学技術）の現代化のほかに、政治の現代化が必要だ」と述べ出した。最高幹部の一言が一通訳までも同じく発言するのも共産国家らしい。毛沢東の政治優先の精神主義を批判し、素晴らしい経済発展に方針を転換させた鄧小平は、得難い人材だと尊敬したい。

トウショウヘイ

シャンハイ ホトウ

鄧小平主導で本格的に始まった「改革・開放」体制下の中国の経済の発展戦略は、上海・浦東

ダイレン

カイナントウ

地区の急速な開発、大連開発区の大発展、海南島の「中国のハワイ化」などは、中央に対する地

ショウコ

方権限の強化に支えられている証拠であった。私も戦前も戦後の発達した時期にも、上記の地区

シザツ

ベキン

テンシン

チンタオ

サイナン

セッコウ

フクケン

カントン

を視察した。また北京・天津地区から青島～済南にかけての山東半島、浙江省～福建省～広東省

ケイザイトクベツク

シンセン

ショウサイ

などの経済特別区を始め、深圳経済特別区にも宿泊してまで詳細に調査してきた。

センザイテキ

タイキ

しかし13億の人口の80%の10億余りが、農村に潜在的失業者として待機しており、その

デカセ

うち1億人以上が大都市に出稼ぎに出ているが、農村経済は大問題となっている。「改革・開放」

コウチ

サバクカ

コクイコク

トウエンメイ

キキョライ

に伴う農村の耕地面積の減少とともに、農村の砂漠化が刻一刻と進んでいる。「陶淵明の帰去来

ジ

デンエン

ア

の辞」の通り「田園まさに荒れなんとす」と言った状況である。そして発展した沿岸地方の都市

カクサ

と農村地帯との格差は、20～30対1にもなっているという。これは中国社会の大問題で、歴

代王朝の革命は農村から生まれたという原則を忘れてはならない。一方、農業から工業への産業

デンカン

キボ

スイコウ

構造の転換も、全国的規模ではほとんど遂行されていないのが現状のようである。

ワ オド

「改革・開放」に沸き躍る沿岸地方（上記した地区）も、実質は日本や米国など外国資本や、

ホンコ

クイワン

カキョウ

イゾン

フンドシ

スモウ

香港、台湾などの華僑資本に全面的に依存した経済成長に過ぎない。他人の種で相撲を取って

デンカン

ナ

ト

るのである。中国自身の力によって産業構造の転換を成し遂げて、「改革・開放」経済が進展し

ているのではないのである。

軍事予算に目を向けると、前年比出15～20%以上も増加している。中国の場合は国防予算

ヘイカイハツヒ

ブキコウニユウヒ

は軍事予算の一部であり、兵器開発費、武器購入費などは、これに含まれていないことを見ると、

トテツ

ト

ウガ

ジュウコウ

途轍もない軍事化を遂げている。穿った見方をすると、「政権は銃口から生まれる」ことの予防

ダンバツ

ダンユウカキキョ

ミゼン

の対策とも考えられる。又、昔の軍閥の群雄割拠を未然に防止する政策のようにも見える。

モウタクトウ

テイイッソン

コウテイ

クンリン

毛沢東は「定一尊」になったと36頁に書いたように「革命中国の皇帝」として君臨し、個人

シンカクカ

トウショウヘイ

テイイッソン

トウショウヘイ

崇拝や神格化が非常に高まった。鄧小平も「定一尊」になったと私は信じている。それは鄧小平

モウタクトウ

ゼツタイカ

理論は毛沢東思想とともに絶対化されたからである。「改革・開放」という「中国の特色をもつ

トウショウヘイ

シキチョウ

ショウコ

た社会主義の建設という鄧小平の理論」は、個人的な色調をもつものであった。その証拠に毛沢

ショウゾウ カンバン

東時代にもみられなかったような、巨大な肖像や看板が各地に目立つように建っていた。

「江沢民」

「江沢民時代」を書く前に、毛沢東時代と鄧小平時代を簡単に振り返って見なければ、「江沢民時代」のことは理解できないだろう。『中華人民共和国』はもともと「中国共産軍」が主導した政党が始まりで、毛沢東が新民主主義論を採択して思想統一と党勢拡大に努め、八路軍及び新四軍として抗日戦線を戦い（極く一部分）、戦後の内戦を勝ち抜いた軍が主体の政府であった。

「毛沢東の歴史」

毛沢東が中国共産党と人民解放軍の指導権を確立したのは、39年（昭和10年）である。中華人民共和国建国と同時に国家主席に就任し、以後、死ぬまでの27年間、絶対権力者として君臨した。しかし毛沢東が発動した人民公社や文化大革命は、今日の中国では徹底的に否定・非難されている。しかしアヘン戦争以来、百数十年ぶりに国家を誕生させた歴史的功績は、永久に中国の歴史に刻まれることだろう。

「鄧小平の歴史」

彼も中国共産党に入党し、長征や抗日戦争に参加して戦後の内戦を勝ち抜き、中華人民共和国建設した功労者である。その後は毛沢東時代を継いで「改革・開放」という、中国の現代史に新しい頁を開いたのは鄧小平であり、中国革命の「第二世代の指導者」である。

しかし党と軍の実権を名実ともに握ったのは78年（昭和53）であった。81年に中央軍事委主席の座に就いたが、82年にはそれ以外の他の公職のすべてを率先して辞し、百人以上の長老も「道連れ」に党と政府の現職から退かせた。これには魂胆があったようである。

89年の「第二天安門事件」直後、彼は最後の公職であった中央軍事委主席を辞任したことも、歴史に残る重大な決断であった。中央軍事委主席は総書記（前の国家主席）以下、すべての職よりも権力があり、そのような権力の頂点を退いた前例はない。それは実力を維持しながら平和裏に、江沢民への権限の委譲を実現しようとした鄧小平の決断が、今後の中国の政治にも影響を及ぼすのではないだろうか。

鄧小平の功績の最たるものは、何回も前記した通り「改革・開放」路線である。誰が後継者になっても、この20年間も続いた経済発展の流れを変えることは出来なくなっていると思われる。

鄧小平は改革の手法についても、続く指導者たちに多くの教訓と示唆を残した。彼は形の上では毛沢東を立てていたが、実質的には毛沢東の政治・経済路線を徹底的に否定し、「第二次革命」ともいうべき仕事を成し遂げた。社会主義諸国の中で、このような「平和な革命」を実現させたのは中国が初めてのことで、20世紀中国の最良の指導者であったと言えるだろう。

鄧小平は79年1月に新しい中国の指導者として日米を訪問した。その途次、彼はベトナムに「制裁を加える」意図を日米に隠さなかった。そして両国から特に反対の声を聞かなかった彼は、広西チワン族自治区と雲南省の国境からベトナムに中国軍を侵攻させた。しかし戦闘は計画通りには運ばなかった。電撃作戦でベトナムに痛打を加え、さっと引き上げて力の差を思い知らせるはずであった。しかし長年、米軍と戦ってきたベトナム軍に手を焼き、辛うじて撤退した。抗日戦争から内戦を通じて彼には嚇々たる軍歴があった。しかし「毛沢東にも間違いがあったように誤りのない人間はいない」と鄧小平は反省していた。その当時、私は両省方面を旅していた時で、良く記憶しているが、これも中国古来からの「遠交近攻」策であったのである。

「江沢民が選ばれた理由？」

当時の首相の「李鵬」や副首相よりも地位が低かった江沢民が、総書記に抜擢されたことは「棚からぼたもち」と揶揄されたことだろうと思うが、推薦の本当の理由は公表されないから解らない。我々がただ揣摩推測するだけである。彼は最近と違って当時は至って低姿勢であった。江沢民は奈良・唐招提寺の開祖「鑑真和尚」の生まれた、揚子江沿岸の「揚州」の名門に生まれ、名門大学かどうかは知らないが上海交通大学を卒業した技術家である。英語、ロシア語、ルーマニア語に堪能で、モスクワの自動車工場で研修した経験もあるらしい。鄧小平は江沢民が知識分子であることにわざわざ言及し、それを称賛していたという。

更に重要と思われることは、江沢民の叔父であり養父となった「江上青」は、1939年（昭和14）に反革命勢力に殺害されるまで、新四軍（八路軍と並ぶ共産軍の一部隊）に属していた。同じ釜の飯を喰った戦友は親兄弟以上の関係があり、江沢民が李先念などの新四軍出身幹部と付き合う上で、この養父の経歴がマイナスであろう筈はなかった。そして江沢民は、毎年のように上海を避寒に訪れる鄧小平などの元老たちを手厚くもてなした。所謂、点数採りだが、軍の関係

者が年齢的に見て極端に減少した昨今では、最も強力な手蔓^{テブル}に違いはなかったと推察^{スイサツ}している。
鄧小平^{トウショウヘイ}の目には、彼が政治原則を遵守する改革・開放の旗手として映り、保守的な元老たちも支^{シラハ}持^ヤを与えたい。しかし、白羽^{ココロボソ}の矢が立てられた当人は心細かったことであろう。

コウタクミン
江沢民は天安門（第二次）事件直後の89年、改革開放政策を進める一方で、共産主義にも忠実な指導者鄧小平^{トウショウヘイ スイキョ}の推挙を受け、上海市の党書記からいきなり党中央総書記に抜擢^{バツテキ}された。63才であった。しかし天安門事件後の1、2年間は権力闘争の後遺症があり、対外的にもソ連・東欧^{コウカイ ショウゲキ}の崩壊の衝撃などで、江沢民の個人的な影響力は影の薄いものであった。

トウショウヘイ イコウ トウショウヘイ
鄧小平から江沢民への移行では、鄧小平の強固な意思により、派閥勢力をなしていた軍の指導者^{インタイ}たちを引退させ、自らが江沢民の後見人となった。鄧小平をはじめとする長老に見守られて、^{チュウカク}江沢民を中核とした指導部は自立の道を歩むことになったのである。93年に憲法が修正されて彼は国家主席に選出されたが、97年2月に鄧小平^{トウショウヘイ}は93才で死去した。

「江沢民の新時代」

江沢民の過去12年間の政治のうちで、最大の功績は一体何だろうか。簡潔^{カンケツ}に言えば、権力の座^{イス}に長く居座ったから、紆余曲折はあったものの、政治的な安定をもたらしていることだと言えよう。江沢民政治の一大特徴は、自らが状況を変革したり、リードしたりしないことである。
シュウショウシンタイ
出処進退を状況の変化に巧みに合わせ、諸勢力のバランスを保ち、実に狡猾（悪賢い）に権力を維持し強化してきたことである。勿論、諸勢力の均衡^{キンコウ}のなかで重心となるのは自らの権力基盤であり、それが重みを増せば増すほど江沢民の権力は安定した。そのために彼の採った一つのやり方^トは、自らのシンパを中央の要職に引き上げることであった。所謂、「上海閥」の天下だと揶揄^{イワユル シャンハイバツ ヤユ}される所以である。

40

中国の政治には激しい「派閥闘争」^{ハバツトウソウ}がつきものである。中国の派閥は人脈の密度の高い部分、つまり網^{アミ}が太く、網の目が細かいことである。日本の政界と異なり「経世会」や「宏池会」といった団体は存在しない。派閥の目的は党内での地位の維持と相互強力である。その元となる人脈が形成される要因は、地縁^{チエン インセキ ケツエン}、姻戚関係を含めた血縁、業務や上司を通じて結ばれる職縁^{シヨクエン}、同窓などによる学縁^{ガクエン}などがある。江沢民の「上海閥」は地縁と職縁が重なって出来ていると言えるだろう。

『日中関係の現在』

20世紀後半から21世紀にかけての世界は大変化した。世界は「一超多強」^{イチタシュウタキョウ}だと言われている。すなわち唯一の超大国米国と複数の大国が存在する時代に入り、アジア・太平洋地域では「新たな三角形」と称される日米中三カ国の関係が、最も重要だとされるようになった。

日米安保条約の再定義に対する日米共同宣言が、中国の発展を「脅威」^{キョウイ}として明言しなかったため、中国は強く反発することは得策ではないと判断した。それは、中国外交や経済交流に最も重要な国である、日米両国との関係を損ねたくないと言う思いがあったからである。しかし、中国には台湾問題がある。日米安保条約の再定義の過程で日本の軍事大国化につながったり、中国とくに台湾海峡にカバーの範囲を広げようとするなら、それには断固反対するということである。だから日中間の諸問題はそこから発生しているのではないかと、私は推考している。^{スイコウ}

日中関係の歴史は、米中より遥かに長い二千年の友好交流の歴史がある。相手に対する理解も、日米、米中より深い。しかしそれがプラスの方向になかなか作用しないようだ。その「近さ」は相互理解^{ソガイ}を阻害する要因にもなっている。日中間は近いから、無意識のうちに「同文同種」^{ドウブンドウシュ}というような錯覚^{サツカク}を抱き、自分の物差しに相手を当てはめて誤解^{ゴカイ}してしまう。

日中間には百年もの留学の交換があったが、それが相手に対する誤解と反発となった歴史がある。それは蒋介石^{シュウカイセキ}、汪兆銘^{オウショウメイ}、周恩来^{シュウオンライ}、魯迅^{ロジン}、郭沫若^{カクマクジャク}などの日本留学生であった。これは日清戦争で勝った日本の近代化を見習うためであったが、日本人が中国人を軽蔑^{ケイベツ}していたことを私も記憶している。

今年は日中国交回復三〇周年の記念すべき年である。振り返って見ると、「毛沢東」^{モウタククトウ}は日本人にカリスマ性を感じさせ、文化大革命の失敗があったものの、人格的にも初代の国家主席として相応^{ソウ}しかったと思っている。第二代目の鄧小平^{トウショウヘイ}は、「論語」の「寡^{ロンゴ}きを憂^{スクナ}えずして均^{エレ}からざるを憂^{ウレ}える」と言った農村と都市との所得格差の増大する時期に、敢えて「改革・開放」政策を実施して中国経済を改革した炯眼^{ケイガン}には、絶大な敬意を表したいと思っている。今日の中国の発展は鄧小平^{コウセキ}の功績である。

第三代目の江沢民^{コウタクミン}に対しては、現在も生存している日本人の中で日支事変（日中戦）^{ニッシンジヘン}に参加

した人たちは、好感を抱いている者は少ないと推察している。彼は自ら日中戦争に参加した経験はなく、共産軍として長征にも、戦後の内戦にも従軍しておらない。そのような経歴の者が恰かも本当の体験者らしく南京虐殺事件を始め、靖国神社問題、教科書問題、東京裁判問題、従軍慰安婦問題などを取り上げ、懸命になって日本を攻撃して日中友好関係を打ち壊しているのである。経験のない者が事実を全く知らないで、どうして真実だと非難することが出来るのであろうか。

中国共産党体制下の中華人民共和国は、成立以来53年を経過した。その間には、大躍進政策の悲惨があり、文化大革命の悲劇があった。そして中国民衆は今日、腐敗した共産党の幹部に対する信頼感を根本的に喪失しつつあり、国家に対する忠誠心も希薄になっていると聞いている。その民族の不満の矛先を最も近い日本に向け、国民の目を逸らそうとしているとしか思えない。鄧小平も誤りのない人間はいないと反省していたではないか（50頁参照）。

外交は銃声なき戦争だと言われているが、彼は自らが嘘の歴史を作っている張本人である。彼は日本の歴史を研究したことがあるのだろうか。否、自国の歴史を始め宗教などを学んだことがあるのだろうか。ただのエンジニアに過ぎない人物ではないか、と疑わざるを得ないのである。現在、中国の外交や対日批判を何でも短絡的に「中華思想」に結びつけることを、中国側は日本の「中華思想」の現れだと警戒している。しかし、中国社会の深いところに沈殿している対日感情に目を配らず、ただ北京指導部の対日「バッシング」として事を処理しようとすれば、問題は更に大きくなるばかりである。

中国古代・戦国時代の「斉」という国に、管子（管仲の尊称）の著書と言われている政治経済論文集がある。その管子の辞の中に、『国に四維あり』と述べている。その辞を「江沢民」総書記に申し上げたい。これは「国家を維持するためには、四つの大きな綱、すなわち綱領がある」。それは「礼」、「義」、「廉」、「恥」である。（維は綱の意である）

『礼』とは、心に敬意を抱き、それを行動として外に表す道である。

『義』とは、人のふみ行ふべき正しい道である。

『廉』とは、清く正しい。恥を知る。欲がない。

『恥』とは、きまりわるく思う。気がとがめる。はずかしく思う。「恥」は「心」と「耳」からなり、音符の「耳」は「みみ」の象形で、はじて耳を赤くする意味。心を付し、て、恥じるの意味を表している。

江沢民総書記よ。総書記は国の最高責任者ではないか。相手国のことも考慮したら如何。

「日中国交正常化三十年」

日本と中国は今月末（平成14年9月）で国交正常化30周年を迎える。私が今この駄文のこの箇所を綴っているのは9月17日の朝のことであり、小泉首相が我が国の総理として初めて北朝鮮の首都「平壤」を訪れ、政府専用機から降りた瞬間であった。聾の私は詳細は不明である。

日中国交正常化三十周年を前に、読売新聞が先月24、25の両日実施した全国世論調査によると、『中国を「信頼できない」という人は55%』で、88年にこの質問を設けて以来初めて「信頼できる」（37%）を上回った。「信頼できる」は88年調査（76%）に比べて、半分以上に落ち込んでいる。現在の日中関係について「良い」と見る人も、99年（平成11）調査比8%減の24%で、これまでの本社調査では最も低い数値を記録した。

また、中国に対する最近の日本の「外交姿勢」を評価する人は38%にとどまり、「評価できない」が51%を占めていた。又、対中ODAが援助額に見合った成果をあげていると思うかどうかでも、「そうは思わない」との否定的な評価（65%）が「そう思う」（22%）を大きく上回っている。対中ODAの援助規模を今後どうしたらよいかについても、「今より援助額を減らす」が43%と最多で、「援助をやめる」も13%あった。

中国の軍事力が将来、日本の安全を脅かす可能性があるとする人は、程度の差はあれ70%に達し、日中関係を良くするために必要な取り組みのトップには『歴史認識問題の解決』（37%）が挙がった。以上は平成14年9月11日の読売朝刊の抜粋である。

日中の過去30年間は山あり谷ありの30年だったと思うが、私が戦中に3年間の長きにわたり中国を戦いながら見聞し、偉大な国だと感銘したのは真実で嘘ではない。続く戦後の中国はそれに曳かれて18回も訪れている。過去30年間の回顧すると日中関係回復当時は過去は水に流し、毛沢東時代は本当に親善を第一とする空気が充満し、両国民の関係は和気霽霽であった。続く鄧小平時代は経済の発展主義に切り替えて、先進国の日本を真の目標の友好国として、望ましい経済関係を築きながら発展してきた。江沢民は第二次天安門事件後に総書記に任命され、その後、党軍事委員会主席、国家主席も兼任されてから13年にもなり、名実共に中国の最高実力者となった。しかし中国筋によると、「江沢民時代」は未だ現時点では一般的に認知されていると

は言えないという。即ち、故毛沢東、鄧小平両氏に続くような革命第三世代の歴史的な権威は、未だ確立されていないようである。権威の確立は江沢民にとっては、次の世代への指導力の維持に繋がり、最近「江沢民の指導思想」を江時代の成果として強調する政治宣伝を始めた。



(右は毛、鄧と並ぶ江の自己宣伝ポスター)

自己宣伝することは即ち、「沈みつつある船」だからではないのか。民主主義国家ではメディアが国民に代わって政府を批判し監視するのに、中国では政府がメディアを使って国民を監視している。そのためにメディアは政府が望めば、どんな嘘であっても国民に対して真実だと誤魔化して報道しなければならない。それを利用して自己を「定一尊」（36頁参照）化しているのが江沢民ではないだろうか。彼は自己の権威確立のために日本攻撃をしてきたとしか思えない。

さて、中国指導者の言動を顧みて、日中国交30年は果たして本当の日中友好の時代であったのか。日中友好とは何なのか。結論として日本政府は中国を刺激しない、難しい問題を中国に突きつけることを避けようとするのであった。靖国神社問題を始めとする諸問題は何ら解決することなく、そのツケが大きく溜まったまま今日に至っていると言えるだろう。

日本側の中国に対する感情が悪化したのは、江沢民国家主席の訪日、'98年の秋の出来事が余りにも大きかったからだと思う。（6～7頁記事参照）。日本と中国との間の戦争責任の問題は、すでに外交的には処理されている筈である。そして日本国民は中国の文化に大きな親近感を抱いているのは事実だが、嫌中感情もまた大きいものがある。それは中国当局の対日政策に起因している。それは靖国問題だけではない。中国側の反日感情の根源は、徹底した反日教育に大きな原因がある。私は世界中で日本ほど平和な国家はないと思っているが、中国では小学生から日本は帝国主義・軍国主義だと教え続け、反日感情を煽っているのが現実である。

戦後の日本は不名誉な敗戦から平和主義に徹した結果、経済復興を見事に成就させた。しかし隣国の中国との間には多くの問題が存在している。これから其の諸問題に触れてみたい。

「靖国神社問題」

靖国神社問題は日中関係の「^{シュクア}宿痼^ア」である。「痼」は「病」のことで、「長い病気」や「重い病気」のことを言い、「宿痼」、「^{シュクア}沈痼^{チンア}」と書いて「治らない病気」の意を表わしている。

「靖国神社の実態の無知」

戦没者の御英霊を祀る靖国神社に関して、日本の某大新聞社までが基礎知識がなく、靖国神社に御遺骨や御位牌が祀られているように書いている。余りにも実態を知らない無知に対し憤りを感^{アル}じているが、或いは故意に書いているようにも考えられる。

御祭神として合祀するのは、「^{ゴサイシン}霊璽簿^{ゴウシ}」に各人の名前を墨書^{レイジボ}し、出身県などを明記したうえで、「^{ボクショ}みたまいれ」、即ち、本殿の御神体と一体化させるという儀式を通して合祀されるのである。

御遺骨や御位牌などを祀^{ゴイコウ}っているのではなく、勿論、墓地でもない。御遺骨や御位牌は戦没者の各自の家で、それぞれの宗教形式によって眠っておられるのである。靖国神社は「^{ゴイコウ}みたま^{ゴイハイ}」のみである。神道の「^{マツ}みたま^{モチロン}」信仰は、御祭神の宗教を超越して「^{ボチ}魂^{ゴイコウ}」を慰霊^{ゴイハイ}することで、精神的かつ形而上的な意味合いであり、他の宗教を侵害する要素はないのである。

靖国神社問題は毛沢東時代には全く問題にならなかった。1980年代になって中国が外を見始めたとき、「靖国カード」が対日戦略上、実に有効であることに中国側が認識するに至った事実がある。現在はA級戦犯の合祀を問題にしているが、初めは靖国神社参拝は軍国主義復活だと非難していたのであった。しかし日本が中国と戦ったことに対して毛沢東は「日本軍国主義は中国に大きな利益をもたらしてくれた。お陰で中国共産党は権力を奪取することができた」と「毛沢東思想万歳」という資料に出ている。鄧小平もまた、「日本は中国を助けたことになっている。日本軍が蒋介石を重慶まで押し下げてくれたので、我々は日本軍の占領地域の後方にまで広がることができた。日本軍だけを責めるのは不公平と思う」と発言している。二人の国家首脳が日本軍に感謝しているのだから、靖国参拝を軍国主義復活だと非難することはおかしい話である。

現在の日本の「終戦の日」は、あの戦争の犠牲者たちを追悼する日である。普通の日本人にとっては、軍国主義の復活や近隣諸国への再侵略など、およそ想像もできないことである。現在の日本ほど平和な国はなく、靖国神社参拝も「^{キョウリンショコク}平和の誓い^{サイシンリョク}」と一体となっている。

「^{ミタマ}霊に対する^{ソウイ}日中の相違」

^{ヤスクニ}靖国神社の本質的な歴史の歩みは、我が国がペリー来航の結果、「世界史」の舞台に乗り出し、^{ブタイ}明治維新以降の近代国家として歩みはじめた時に、国事のために殉難した人たちの御霊を、国家
^{イシン}共同体として国事殉難者の御霊を祀るのは国家の義務であった。その施設として靖国神社が明治
^{ジュンナンシャ ミタマ マツ ギム シセツ}以来、存在してきた点を我々は忘れてはならない。近代の神社とはいえ、その祭祀に関しては古
^{サイシ}代からの伝統を引き継いでいるのであり、民族的信仰に基^{モト}づくものである。

やはり、世代の問題があるのだろうか。戦前の国家観、歴史観に基^{モト}づく教育を受けた世代が次
第に去ってゆき、戦後教育を受けた世代が政界、官界、ともに枢要を占めるようになってきてい
^{スウヨウ シ}る。そこで、靖国問題が遠い存在になっていくことを、我々従軍者は心を痛めるのである。

靖国神社は戊辰戦争〔1868年（慶應4）の戊辰の年に始まり維新政府軍と旧幕府側との間
^{ボシン ケイオウ ボシン イシン バクフ}に16ヶ月余りわたった内戦〕の「官軍」も「賊軍」の会津藩の死者の「^{ミタマ マツ}霊」も共に祀っている。
「神道」は死者の生前を問わないのである。戦没者の遺骨は各自の家の「墓」で眠っている
^{セイゼン イコツ ハカ ネム}

日本の総理大臣や閣僚の靖国神社参拝は、「^{ミタマ モド}軍国主義の霊を呼び戻す」と、中国側はそれよう
^{ヒョウゲン ヒナン チュウショウテキ}な表現で非難するわけである。我々日本人には、それは抽象的な表現としか思えない。A級戦犯
とされた人も靖国神社に祀られている。そうすると、その亡霊が、この世に帰ってくるという中
^{ボウレイ}国人の感覚は絵空事（つくりごと）でなく、かなり現実的で具体的な意味を持っているという。

^{スナワ}即ち、日本人の宗教観、死生観で言うと、人間は死ぐと生前の罪証（犯罪の証拠）は全部消え
失せ、神（仏）になってしまう。死者の悪口を言うと祟ってくるかもしれないと言われる。いろ
^{キヨホウヘン キ ヘン ヨ ホ}いろと毀誉褒貶（毀・貶はそしる。誉・褒はほめる意）のあった人でも、褒めてばかりいる。日
^{ハンザイシャ ムチウ デントウ}本文化には犯罪者を死後では鞭打つ伝統はない。特に仏教では悪人は善人よりも先に救われると
言われている。死ねば皆等しく神（仏）になるといのが日本の民族的伝統である。
^{ヒト}

ところが、中国では「^{タタ}死者に鞭打つ」ことを実行するのである。「儒教」では、「人間の死」
とは精神を主宰する『^{シジャ ムチウ}魂』と、肉体を支配する『^{ジュキョウ}魄』とが分離することであり、それが再び合体
^{シュサイ コン ハク}すると蘇^{ガクタイ}ってくる、と言われている。しかし、日本の神社は死体を祀るところでもなく、墓場
^{ヨミガエ マツ ハカバ}でもないのである。この点の理解不足から、日中両国の間に誤解が生じてくるのかも知れない。
^{ゴカイ}

「成事は説かず」

「成事不説」、「遂事不諫」、「既往不咎」、と「論語」は論じている。それは「すんでしまった事柄については、後からとやかく言っても仕方がないことである」という意味である。

中国の首脳部たちに自国の生んだ聖人「孔子」の、この言を学んで欲しいと念願したいものである。靖国神社参拝の非難と言うのは政治的なもので、「侵略戦争の罪を問う」と言っておけば、日本人に心理的な負い目を負わせ、経済的な援助を引き出す際に有利な立場に立てる。威張って金を借りてやるという芸ともなり、核実験の非難も弱められると思っているのだろうか。

首相や各閣僚の靖国神社参拝は「軍国主義を煽る行為」だと最初は非難した。しかし現在の日本には軍国主義の欠片も存在していない。「軍国主義」とは、「軍事力によって国威を示し、対外的に発展することを国家の最も重要な目的と考え、一国の政治・経済・法律・教育などの構造や、国民の生活・思考様式を軍事強化に従属させ、これに奉仕させようとする主義」である。

戦後50年間以上、日本は戦争を一度もしていない。中国とは国交も回復し、経済援助もくり返して親善に努めてきたではないか。それを評価せずに「軍国主義の復活」とは何事であろうか。

中国は、中越戦争などで軍事力の行使をいとわず、世界の非難を浴びながら平然と核実験を行い、国家予算の10%以上を軍事費に使い、長距離の弾道ミサイルも保有するなど、日本の数倍の軍事力を保有する国である。国内に於いても、古来から独立国として宗教・言語・風俗習慣の異なったチベット、蒙古、満洲、ウイグル回教民族等を侵略したが、これらの国々は南蛮・北狄・東夷・西戎と称する軽蔑した外国であった。日中のどちらが軍国主義か、これは明瞭である。

江沢民総書記は軍歴はなく日中戦争も知らない国家元首であり、彼にあるのは上海の金融人脈だけである。中国問題の専門家が口を揃えるのは、今や日本は中国によって金を取られるだけの存在で、残念ながら侮蔑の対象でしかなかったと言うことである。今の中国は、昔のように礼節を尊ぶ国というより、相手が弱いとなると途端に威張り出す非礼な国である。「お詫びせよ、しかし金はよこせ」と言う国に成り下がったのである。

1953年にA級14名が合祀されたが、その当時は中国から何の抗議もなく、54年の大平、55、56年の鈴木首相の参拝も何らの問題も生じなかった。57年になると、最近20年間の

「^{ジギョクシカン}自虐史観」問題の端緒となる教科書問題が起って、中国の対日批判が激しくなった。しかし「^{ヒバン}A級戦犯の合祀」の批判は特になく、中曽根首相（当時）になった58、59年の参拝も問題なく行われた。現在のような靖国問題が始まったのは昭和60年（1985）からである。

かねてから中曽根首相（当時）は「戦後の^{ソウゲツサン}総決算」を標榜していた。そして60年8月15日に「公式参拝」を行った。これに対し8月7の朝日新聞は、靖国問題を「中国が^{キビ}厳しい視線で^{ギョウ}凝視している」と書き、10日の人民日報は、靖国参拝に批判的な日本国内の動きを報道し、はじめは互いに相手国を引用する形で、^{インヨウ}反対運動を開始した。遂に14日には、中国外務省スポークスマンが、「アジア各国人民の感情を傷つける」と、はじめて公式に^{イシヒョウジ}反対の意思表示をした。

そして、27日から30日までの社会党訪中において、社会党と中国は公式参拝批判の^{キセイ}氣勢を大いに上げ、^モ反対運動は燃え上がり、中曽根首相はその後退任まで参拝できなくなってしまった。この時以来、この^{カンショウ}干渉の^{アジ}成功に味をしめた中国は、靖国問題の干渉を中国外交政策の一部として^{イジ}維持し、また、それは1995年頃の中国の愛国運動などにより、中国の「国民感情」となり、日本国内の^{サヨク}左翼と^{アイコオウ}相呼応しつつ今日に至っている。

この経緯から見てわかる事は、靖国問題は^{トクシュ}法的問題でなく、きわめて特殊な政治的問題である。57年の教科書問題以降の新しい形の反体制運動の^{フンイキ}雰囲気の中で、中曽根首相の「戦後総決算」という姿勢に反体制勢力が反発したのが^{ホツタン}発端である。その後の運動は例外なく、日本国内の反体制勢力が^{イトテキ}意図的に^{カンショウ}外国の干渉を^ヒ惹き出し、^{コオウ}内外呼応して政府批判を行う形をとっている。

現在の反体制の立場は、「公式」参拝反対に集約されているようである。公式参拝は三木首相（当時）まで25年間、誰も^{イケン}違憲だと言いさえしなかった問題である。最近問題とされているのは、昭和60年まで6年間、A級戦犯合祀に中国も反対しなかったのは、それが非公式参拝の時期だったからだと言う、後からつけた^{リクツ}理屈によるものである。

（以上の記事は7月29日読売朝刊、岡崎研究所長の元外交官・岡崎久彦氏の投稿記事参考）

私はその当時、^{モウシ}孟子の言の「自ら返りみて縮くんば、千万人と雖も吾れ往かん」とか、或いは、^{ミズカ}「^{ナオ}断じて敢行すれば鬼神も之を避く」（史記・李斯伝）を思い出し、^{イェド}大言壮語する^ユ戦闘経験のない中曽根元海軍主計中尉の^{アル}意気地なしに、^{ダン}猛烈に^{カンコウ}憤慨したことが^{キシ}懐かしく^{コレ}思い出される。^サ

「^{ウコサベン}右顧^{ナカ}左眊する勿^{ナカレ}れ^{キンシ}」

「^{ウコサ}右顧^{ベン}左眊」とは、「右を見たり左を見たりする」意味で、「^{ナカレ}勿^{キンシ}」は「禁止」の意味である。

すなわち、「あたりの様子や周囲の思惑を気にして、決断できず迷ってはならない」ことを言う。

我々のように国家の命令により戦場に^{シュツセイ}出征^{ヤスクニ}（戦地に行くこと）した者が、戦死すれば靖国神社に「^{エイレイ}英霊^{タマシイ}」（国家のために尽くした戦死者の魂を敬^{ウヤマ}ていう語^{マツ}）として祀^{ヤクソク}ることを、約束してい

たという事実を忘れてはならない。我々は子供のころからそのように教育され、又、そのように教育してきた。総べての将兵が戦友や肉親に「靖国で会おう」「^{チカイ}会いたければ靖国に來い^ア」と誓

い合い、言い遣して尊い命を捧げて死んで行ったのである。遺族を含む多くの国民や戦友たちの

日本人が、政府を代表する首相が靖国神社に公式参拝するのを、当然のことだと考えているのは

そのためである。死者の英霊との約束は重い人道上の「義務^{ギム}」である。

戦死した将兵らの慰霊^{イレイ}（死んだ人の靈魂^{レイコン}をなぐさめること）・顕彰^{ケンショウ}（隠れた功績^{カク}をたたえるこ^{コウセキ}と）は、万国共通にみられる儀礼であって、これを否定する国家を私は知らない。又、戦死者追

悼^{トウ}の儀礼は各国の民族的・宗教的伝統を反映する様式でなされるのが通常である。靖国神社における英霊の祭祀は、日本古来の習俗である祖霊信仰・御霊（みたま）信仰に基づいている。

小泉首相は昨年も本年も靖国神社参拝後、記者団に対し、「今日の平和と繁栄は先の大戦の戦没者の犠牲の上に成り立っている。そういう方々に心から敬意と感謝の誠をささげたい」と参拝理由を説明した。さらに「公的とか私的とかにこだわらない。A級戦犯とか特定の個人に対してお参りしたわけではない」と語った。

これに対し中国政府は駐日本大使を呼びつけ、「中国を含むアジア近隣^{キンリン}や日本国内の反対を顧みず^{カエリ}にA級戦犯を祭る靖国神社を参拝した。中国政府と人民は強い怒りを表明する」と述べ、

「中日関係の政治的基礎を損ない、今後の健全な中日関係発展に影響を与えるものだ」と強く抗議した。これに対し、わが国は右顧左眊することはない。中国こそ最も強烈なナショナリズム教育を推進している国だ。共産主義イデオロギーに基づくただ一つの歴史認識しか存在を許さず、

公営マスコミしかない国である。日本は過去の歴史について、すべて中国の解釈に従わなくてはならない、ということにはならない。平和への誓いと、戦争の反省を込めての靖国神社参拝である。

靖国神社は日本の神社である。中国にあるわけではない。そこに中国の言うA級戦犯が合祀されていても、日本国民の感情として戦争犠牲者としてお祀りし、年間600万人もの人たちがお参りしていることは、日本の一つの大きな現実問題である。A級戦犯を靖国神社から引きはがせという主張は中国の論理であり、その中国の論理は中国共産党の論理である。その大衆の味方が共産党だという階級闘争史観から言っているに過ぎない。

戦後、占領軍の宣伝によって、一握りの軍国主義者だけが諸悪の根源であり、日本国民もまた犠牲者であるという巧みな情報操作が行き渡っていった。「戦犯が合祀されている施設だから」と非難する国は中国と韓国だけであり、当時的大日本帝国と戦争した国は靖国神社を決して非難していない。韓国は当時日本の植民地であり、中国共産党軍はほとんど戦争に参加していない。多くの中国軍は蒋介石の国民党の軍であった。結局、中国・韓国は日本が毅然とした態度をとらないから干渉するのである。日本政府や政治家たちが右顧左眄して決断できずに迷うからである。

戦争犯罪人を仕立て上げたのは、日本を侵略国家だと烙印を押した東京裁判であった。東京裁判は国際法と全く関係はなく、GHQの占領行政として裁判が行われた。そしてA級戦犯は、戦勝国が一方向的に下したものである。東京裁判は「平和に対する罪」とか、「人道に対する罪」とか、新しく作った事後法で日本を断罪した復讐劇である。それならば広島や長崎へ原爆を投下して無辜の民を殺した責任者は、当然に国際法違反のA級戦犯でなければならない。

マッカーサーが連合国最高司令官（GHQ）が解任されて本国に呼び戻され、1951年5月3日に重大な証言をした。しかも、上院軍事外交委員会というアメリカの軍事と外交の最も公的な場所で行ったのである。マッカーサーは、「日本が戦争したのは侵略のためでなかった」と述べて、侵略戦争を公の場で否定したのである。

さきの戦争を日本の侵略戦争と断じ、戦争犯罪人をつくったのは東京裁判であった。東京裁判は法的根拠はなく、マッカーサーの命令で行われた。そのマッカーサー本人が、判決の根本的理論を否定したのであるから、判決そのものが無効である。そして「日本が戦争をしたのは自衛のためであった」と侵略性を否定した。中国・韓国よ！、当時の社会党や共産党の諸君、日本には戦犯はいないのである。全国民挙げて靖国神社へ参拝しようではないか。

「靖国とは」

『靖』とは、①「やすい」(安)。やすらか。しずか(静)。②やすんずる。やすらかになる。やわらぐ。また、やすらかにする。静める。治める。『靖国』③おも(思)。はかる(謀)。④やめる(息)。「靖兵」⑤よい(善)。きよい(清)・という意味だと大漢語林は書いている。

『靖』の字は、「立」と「青」からなり、音符の「青」は、静に通じ、しずかの意味である。静かに立つ、やんしるの意味を表している。

『靖国』とは、〔左伝(中国・春秋左氏伝の略)〕に、国家を安らかに静め治める。国家を安泰にする。鎮国。だと書いてある。

「靖国神社の由来」は、中国・左氏伝の「靖国」に由るものである。総べては上記したように「やすらぐ」、「静める」の意味で、中国の首脳が我が国を責めるような軍国主義の欠片もなく、一途に我が国の平和と世界の平和を祈願する「鎮国」の神社である。

靖国神社は戊辰戦争の戦没者を慰霊するため、明治天皇が1869年に創設した「東京招魂社」が起源で、79年に「靖国神社」と改称し、明治以降の事変、戦争で戦死した軍人・軍属らを祭神として合祀している。吉田松陰、坂本竜馬、高杉晋作ら幕末の志士も、シベリア抑留での死没者まで祀られている。又、イギリス人も祀られている。日露戦争の時、ロシア艦隊に撃沈された輸送船・常陸丸の乗組員だったイギリス人も祀っている。靖国神社は、戦争犠牲者を一視同仁に鎮魂するところである。(招魂の由来は、中国の楚辞の招魂序に由る)

戦後、靖国神社はGHQの神道指令の命により、46年に国家管理から一宗教法人になった。その神道指令は、日本が独立を回復した52年のサンフランシスコ講和条約発効により失効した。御祭神は戦争という国家の非常事態に命を捧げた方であり、祀られる理由が公的なものである。靖国神社は信者の教化育成に力を入れているという訳ではなく、ただ戦没者への感謝と追悼に専念するだけの存在である。その中の、僅かな一部だけを殊更に取り上げて騒ぐことはおかしいことである(その点は前頁で説明した)。首相が国民を代表して静かに参拝し、国民もそれを静かに見守りながら同時に慰霊することは人倫の道(人と人との間の道徳的秩序)である。

靖国神社への首相参拝は、吉田、岸、池田、佐藤、田中、三木、福田、大平、鈴木と続いていた。

「^{イヤサカ} ^{イノ}国の^{イノ}弥^{イノ}栄^{イノ}を^{イノ}祈^{イノ}る」

「^{イヤサカ}弥^{イヤサカ}栄^{イヤサカ}」の意味は、いよいよ栄えるようにと祈ることで（^{バンザイ}万歳と同意）あり、「靖国問題」の最後に御英霊の加護により、我が国の益々の繁栄をお祈りする次第である。

国家に殉じた御英霊をどのように祀るかは魂の領域の問題で、最も外交問題になりにくい聖域に属することに拘らず、干渉するということは、友好親善を放棄する意志表示だと推察できる。

中国の「唐家璇外相」（日本語は堪能）は日本の総理大臣の靖国神社参拝について、「やめなさいと言明しました」とテレビに向かって日本語で言った時、その傲慢さにこれほど国辱を感じたことはなかった。殉国者の御英霊を祀る問題は内政中の内政であり、日中平和条約では相互に内政干渉をしないことを約束している。御英霊はその親族だけのものではなく国家の問題だ。

阿鼻叫喚の惨烈極まる戦場に身を曝して共に戦い、負傷すること3度に及ぶ吾れ自身も幽明の界を彷徨いながら、多くの戦友の死を見送ってきた私たちから見ると、現代の首相や政治家たちは、御英霊の最後の心境を想像するのは難しい事かも知れないと思う。しかし御英霊の心に応えようとする努力は如何ほどであろうか、と実兄を沖縄で失った一遺族として疑問を感じている。

先ず第一に中曽根首相（当時）は85年に公式参拝したが、すぐに胡耀邦総書記に謝罪している。これが土下座外交の嚆矢（最初）で、平成7年には村山首相（当時）は日本が犯罪国家だったと謝罪しており、現在、民主党幹事長の菅直人は「靖国神社に参拝するなら首相を辞めよ」と言い、与党・公明党の冬柴幹事長も「首相が一宗教法人に肩入れし、国民に特別な存在だ」と意識を呼び起こすことは許されないとまで意見した。言語道断であり与党となり得ないばかりか、上記してきたように靖国神社を創価学会と同じ法人と認識していることに問題がある。

わが国の政治家たちの多くは戦争体験者ではないだろう、しかし明治以来の国家の伝統は知らないとは言える立場ではない。国家は連綿として続いているのだ。超優遇された特別公務員でありながら、国民の大多数は不満足と臍甲斐なさに憤りを感じている。

昨年10月、上海で開催したAPECの首脳会議を成功させるため、中国は事前に小泉首相を日中戦争の発火点となった「廬溝橋」を見学させ、（これは30頁記事の通り中共が仕掛けていた）謝罪外交を展開させたが、国家の弥栄を願う者は歴史を認識し毅然としなければならない。

テンノウ ヤスクニジンジャ ゴシンバイ コイネガ
「天皇の靖国神社御親拝を冀う」

ゴシンバイ トダ
天皇の靖国神社御親拝は、中国や韓国の圧力が強くなった昭和50年代以来、途絶えている。
センシ エイレイ ウヤマ ア シジ アツリョク
そもそも国のために戦った戦士や英霊を敬うに当たって、他国から指示されたり圧力を受けるよ
ナイセイカンショウ スジアイ イッコク シチュウ
うな内政干渉を受ける筋合いはない。一日でも一刻でも早く、日本国民が靖国神社を精神的支柱
ジカク クナン ナグサ ク
として自覚し、御英霊の長きにわたる苦難が慰められる時が来ることを願ってやまない。

モト ユ ソコク ジュン タマシイ
戦前の国家観、歴史観に基ずく教育を受けた世代が次第に去り逝き、祖国のために殉じた魂に
オオヤケ ケンショウ フウチョウ
対して公に感謝し、慰霊顕彰する気持ちを表明すべきでないという世論や風潮が、無理解な一、
クッ タマシイ ボウドク
二の国の圧力に屈して、まかり通るということ自体が、靖国の英霊の魂に対する冒瀆である。

シャトウ マカ ヤクソク
明治以来の伝統として陛下が靖国の社頭に額づくことは御英霊との約束であり、我々の亡き戦
ア ア サクラ
友たちも、「靖国で会おう」、「自分に会いたければ靖国に来てください」、「靖国の桜の下で
ア ソンガン ハイエフ チカ サンゲ ユ ミココロ
会いましょう」と、御尊顔を拝謁することを誓って散華して逝ったのである。明治天皇の御心で
シンバイ スミ グゲン ハイキ コンガン
あります御親拝を、速やかに具現されるよう拝跪して今上天皇に懇願する次第であります。

キウジョウ コウキョウ ハイカン
私が陸軍士官学校に在学中、宮城（現在は皇居と称す）の拝謁が許可されたことがあった。当
フキアゲギョエン キョフ シュンコウ シンテンフ
時の皇居の吹上御苑内には、次の五つの「記念御府」があった。明治29年に竣工した「振天府」
センエキ カイエフ ホクシンゲン
は、日清戦争と台湾戦役を記念。明治45年に竣工した「懷遠府」は、北清事変を記念。明治4
ケンアンフ ニチロ ジュンメイフ
2年に竣工した「建安府」は、日露戦争を記念。大正7年に竣工した「惇明府」は、第一次大戦
ケンチュウフ マンシュウ シナ
～シベリア出兵を記念。昭和9年に竣工した「顕忠府」は満洲事変～支那事変を記念。いずれも
ジュンコク ヒフク キネンギョフ
その戦役で殉国した将兵の写真、兵器、被服などが収められ、我々はこの記念御府の見学した。
クウシュウ ショウシツ イリエニツキ シカ カクニン
昭和20年5月25日夜の空襲で焼失したかどうかは「入江日記」では然と確認はできない。こ
シバシバ
れらの「記念御府」に歴代の陛下は屢々訪れ、その戦役で戦死された御英霊のご冥福を祈願され
モ ウケタマワ ギセイ コンジタイセン ソウケン
たと漏れ承っている。最も犠牲の多い今次大戦の「御府」の創建のことは我々には解らない。

ケンボウ シュケンザイミン ゲンシュ
現在の憲法は「主権在民」で、天皇は「国家元首」ではなくなられた。我々生き延びてきた
ガンボウ コタ ヤスクニ シショウ
戦友の願望に応えられ、靖国に御参拝になることは何ら「支障はない」と思われます。どうか国
セツ ガンボウ ムク オオズモウ カンセン カイカイシキ ゴリンセキ
民の切なる願望に報いられ、大相撲の観戦や各種の開会式に御臨席なされるのと同様に、次代を
ニナ ゴシンバイ ハン タ タマワ セツ コンガン
担う子供たちのためにも、靖国神社に御親拝なされて範を垂れ賜うことを切に懇願いたします。

「教科書問題」

戦後18回にも及ぶ私の訪中した初期は文化大革命時代であった。観光資源は整備されておらず、見学と言えど人民公社であり、それも託児所・小・中・高校の貧弱な校舎での授業参観であった。教育程度は日本から見れば3～5年遅れで、先ず第一に教育者の養成が第一だと痛感した。

戦後日本の発展の成果は明治以来の教育の成果だが、当時の中国では大都会を除く以外は、教育者と雖も読み書き算盤ができる程度に過ぎなかった。しかし日中友好の精神は旺盛で、小中学生までが私を取り囲んで日本語を教えてくれと、夜遅くまで公園のベンチで教えたことがあった。本当に微笑ましいことだったと、時々思い出して楽しんでいる。

歳が移った現状では、政府以上に中国国民は日本を好きではないという印象である。それは偏った教育のせいである。例えば、中国の歴史教科書を見ると、日本の侵略や虐殺についての記事はあっても国交回復後、日本が多額の対中国援助をした事実は書いてない。戦後の日本が平和国家として再出発した事などは強調していない。それは何故だろうか。中国の一般国民は、日本が何十年も中国を侵略し、南京などで大虐殺をしたことなどしか、教育されていないからである。そして言いたい放題に日本を悪と教育しているのである。日中国交正常化した当時の中国政府は、南京虐殺事件のことなど一度も言及していなかった。ソ連の脅威があった時には、日本の内政にあまり干渉しなかったが、ソ連が弱体化して崩壊してから、中国政府は率先して国民感情を煽り、対日干渉を行って南京事件などを言い出したのである。正に「遠交近攻」策の手本のようなものである。先ずここで現在の各国の教科書を見てみることにする。①は「国定」で、中国、韓国、北朝鮮、旧ソ連などのように、国の機関が編集し発行する。戦前の日本も国定であった。②は「検定」で、民間で作成した教科書を国（州）が審査し発行を許可する教科書である。日本、旧西ドイツ、スペイン、タイ、インドネシアなどである。③は「認定」で、検定に比べると公権力の介入、制約は緩やかだが、国が教科書として認めるもの。フランス、カナダなどである。④は「選定」で、州の委員会が教科書を選んで一覧表を作成し、学校（また担任教師）がその中から選ぶもので、アメリカの27州がこの制度である。⑤は「自由選択制」で、教科書の編集も執筆も自由で、学校の担当の教師が自由に選択できる制度である。アメリカの15州、イギリス、オランダなど。

「中国歴史教科書の中の日本」

中国の国定の歴史教科書が日本について、どれほどゆがんだ教え方をしているか。中国の中学や高校の歴史教科書が「日本についての歴史を」、いかに日本の「侵略と残虐」だけを拡大し、いかに不正確、不適切な形で、いかに自国の共産党政治や愛国主義に都合よく、次世代の子供たちに教えているかを伝えることが、その教科書の主眼である。日本はとにかく「被告」として位置づけられたまま、取り上げられるのが常である。

この中国当局から自国の教科書の内容や歴史の認識のあり方をさんざんに糾弾されてきた日本にとって、重大な意味があるに拘らず、日本の大手マスコミのほとんどは全く報道していない。この中国の日本に関する歴史教育は、次世代の中国人に「日本への憎しみを植えつける」ことが趣旨だと非難し、その停止を求めても、中国共産党指導部による「過剰な愛国主義教育」の結果、「敵対的なナショナリズム」が広がったからこそ、そういう反応の原因だと批判と言う。

「中国当局はとくに「日本鬼子」（日本への侮蔑の言葉）と呼ぶ対象への憎しみを若者たちに植えつけることを止める必要がある。学校での教育、映画、テレビなどが日本をのしることに動員され、日本への憎悪は危険になっている。学校での教育指導の第一は反日宣伝である。

「江沢民」以下の中国首脳部は、「日本への憎しみ」を中国内部の団結の強化の材料に使っている。この反日の教育や宣伝の政治利用の背後には、反日を中国共産党の無期限にわたる独裁的統治の正当性を誇示する、武器にするという狙いがある。

今年2月22日に中国を訪問したブッシュ米大統領は、北京市内の精華大学での演説したが、その結論は、中国の教科書のいくつかはアメリカ人について、「弱い者をいじめ、貧しい者を弾圧する」と記したと書いていた。ブッシュは中国の政治体制の非難の一つに中国教科書をあげたが、中国側は外国の世界史が如何に自国に都合よくゆがめられ、ねじ曲げられたかをさりと名示し、物別れになってしまった。

中国側は日本の歴史認識や解釈を「謝罪していない」「ごまかそうとしている」というように一方的に定義付け、中国の独自の歴史観で断罪するという形である。そして中国側の特徴は、反日教育部分の極端な偏重、日本の侵略と残虐の生々しい拡大、日本への怒りと憎しみだけである。

私が最も指摘しておきたいのは、中国は日本の戦前戦中のことばかりを指摘して、中国の歴史教科書は「戦後の日本」については、何一つ教えていない点を強調したい。結論としては、これだけ特異な中国の歴史観に、日本が自国の認識や教育を合致させられないのは余りに明白であり、その考えの隔たりをお互いに認め合うことが、健全な日中関係の保持につながると提唱したい。中国の格言に「遼東の豕」という言葉があります。世の中のことは何も知らず、自分だけが優れているのだと自惚れていることを言うのだが、「現在の日本には軍国主義は存在していない」。

「各国の義務教育の特色」

各国の義務教育の段階で著しい差異があるが、そのおおまかな特色を指摘してみたい。

「米国」の特色として共通するものは清教徒移住以来の開拓者精神、個人的性格としては勇氣が底流にある。さらにキリスト教的人間像の形成、特にプロテスタンティズムの論理である。

「ヨーロッパ諸国」は、いずれもアメリカと異なった長いキリスト教文化遺産をもち、これを若い世代に伝えるのが教育であると考えている。このため教科書を通じて歴史を重んじ、厳しい躾を教え、一般文化を重んじる。その教科書が目指す教育の目的は「よき教養人」の養成である。

「アジア・アフリカ・ラテンアメリカなど」

これらの国の共通する特色は、先ず「発展途上国」的性格の払拭に努力することである。

「旧ソ連系諸国」

共産圏の教育は何よりも祖国愛の育成と、すぐれた「生産的人間」の養成が重要目的とされている。特によき生産的人間は、労働技術の向上によるという信念から知識を重んずる傾向が強く、小学校段階からその程度は高く、体系的な初級学術書ともいえる特色を有している。

「中国」

共産主義国、社会主義国としての中国の教科書はどうであろうか。、中国では教科書はすべて国定である。歴史や地理についても「人民出版社」から発行されている一種類ものだけである。その特色は徹頭徹尾マルキシズムで貫かれ、歴史は人民の階級闘争だとする筋を崩していない。

その中で日本はどのように書かれているか。日本の歴史教科書が古代から中国との関係に大きな分量を割いているのとは対照的に、ここでは千百頁あまりのうち、日本についての記述量は全

体の5%ほど（もちろん近代が重点）にすぎない。これは中国史家の基本的態度の一つである。

記述の内容の中で古代、中世は省略して17世紀以降を記述してみたい。17世紀以後は商業資本の農村への流入により、農民は収入の60%までを年貢として領主に奪われ、19世紀前半だけで百姓一揆は320回にもおよび、「天草四郎」は不公平な政治・経済に対して立ち上がった英雄だとしている。当時、武士とその家族は二千五百万の人口のうち10%にすぎず、それが80%の商工業者の上に君臨していたと書いている。

しかし一方で「中国人民」は古くから友好的な往来を続け、宗教、文化（文字）、貿易において日本が中国から得たものは夥しく、この状況を教科書は一頁半にわたって記述している。

明治の開国後は日本は天皇を頂点とする中央集権的国家を形成したが、まもなく侵略的軍事帝国主義の道を辿り始めた。1874年の台湾への派兵、1879年中国の属国であった琉球の併合、さらに1894～95年日清戦争で台湾を奪い、また多額の賠償金をとって中国の市場を略奪したことなどを述べている。また1904～5年の日露戦争は二つの帝国主義国家の衝突であったが、戦争の舞台が中国の領土であったため、民衆は大きな被害を受けたこと、さらに遼東半島南端は租借地とされ、大陸進出の拠点とされたことなどを記している。またこうした状況を背景として日本国内では反戦運動がさかんとなり、公德秋水、片山潜などの重要な社会主義運動のリーダーたちを生むに至った状況を述べている。そして「現代史」は次の通り記述されている。

第一次世界大戦で大きな経済的利潤を得た日本は、ますます資本主義、帝国主義への道を邁進し、中国の政情を利用して「二十一箇条」要求を突き付けてきた（1915年）。一方、ロシア革命に刺激された労働者、学生などの被圧迫大衆は反抗して、空前の大規模な民衆蜂起としての「米騒動」を起こすに至った（1918年）。〔二十一箇条・条約は22頁参照〕

この米騒動の参加者は一千万人で全国の三分の二の地域に及んだ。それ以後、社会主義団体の結成が相次ぎ、日本共産党の出現をみたのは1922年である。一方、朝鮮では日韓併合後の日本の圧政に反抗して民衆が「三・一暴動」（1919）を起こし、以来、民族解放闘争が盛んになった。さらに「満洲事変」（9・18事件）以後の日本は完全なファシスト国家となって中国各地を侵略し、蘆溝橋事件（1937年7月）はいよいよ日本帝国主義の中国本土侵攻の始まり

であった。その後日本は太平洋戦争に突入して東アジア全体を戦火に巻き込み、人々に多大の苦難を与え、ファシズムは崩壊して新中国の誕生をみるに至った経過などを詳しく述べている。

簡明世界史は日本をこのように記述しているが、古代からの日本固有の文化の発展や特質にはほとんど触れていない。また日本史上の大事件であった「元寇」についても、ずっと離れた章で、中国とは「兄弟民族」であったモンゴル人が「元帝国」を建設し、その政治は四方への侵略政策をとり、その指向した地域の一つに「日本」の二字をあげるにとどめている。即ち、他民族がやったことにしている。当時の中国は全土が「元」の領土で、日本への遠征軍の過半数は江南出身の漢民族だった事実には言及していない。このような一方的な立場に立った教科書を読むと、改めて、「政治」と「教育」との問題を考えさせられる。

もちろん中国の近代史には、列強が飢えた狼のごとく、近代化の遅れた中国に襲いかかった歴史があり、それによって中国の被った破壊と殺戮は筆舌に尽くしがたいものであった。1839年のアヘン戦争、18世紀初期の帝政ロシアの侵略、1860年の英仏連合軍の北京円明園の破壊、1900年の義和団事件（22頁参照）に際しての各国連合軍の略奪と非行、また同年ロシア軍による中国人5千人の殺害（アムール河畔の流血事件）、ついで満洲の占領など枚挙にいとまがない。

1972年、日中の国交は回復したが、南京虐殺事件、中国残留孤児の問題など、戦争が両国間に残した傷痕はまだ生々しく残り語られている。例えば南京虐殺の問題を一つ取り上げてみても、両国間の記述の差は実に大きい。国家の利害が絡み合った戦争について、教科書はどのように教えていくか、その記述は特に難しい。それは私自身が実際に体験した戦闘経験からすると、中国の戦争の記述は絶対的に正しくはない。作り話と言っても過言ではないだろう。日中戦争当時の支那軍（中国軍）は蒋介石総統（国民党）の率いる軍隊で、共産党軍は山西・安徽両省の一部の戦闘に参加していたに過ぎず、戦闘の当事者ではなかった。それが戦後の内戦で勝利したから得手勝手に戦争の記事を書いており、我々から見れば嘘八百の記事だ非難されても可笑しくはない断言する。他の外国の教科書が中国戦線をどのように記述しているか、それを知ることは大きな興味を抱いているが、私の手元にその正確な資料がないことは残念至極である。

「中国の学校教育の現状と歴史教育」

「中国では、日本をどのように教えようとしているか」

中国の日本に関する教育の目標は第一に、日中友好の思想を教えることである。つまり両国の友好関係の悠久の歴史を教え、その上に立って、日本の先進的技術を学ぶ意義を考えさせるということだ。そして第二に、日本の中国に対する侵略の事実を正確に教えることである。この際、侵略者と人民を厳格に分ける必要性が強調されている。その上で、大きな目標として侵略に立ち向かった中国人民の英雄的な生き方を教え、児童生徒の愛国心と共産主義的人格を培うことが掲げられている。侵略者への憎悪は自然に生まれるのであろうが、それ以上に祖国と中国共産党を愛するということに教育目標の大きな重点が置かれている。

日本関係の記述は、歴史の教科書の非常に大きな部分を占めている。小学校教科書上下2冊のうちほぼ10%、中学校教科書のほぼ20%が日本に関することで、その中で特に1894年の日中戦争（日清戦争）以来の日本の中国侵略が克明に記述されている。そして抗日戦争（日中戦争のこと）に関しては約20時間も当てられている。同時に、前述の教育目標の達成のために国語教科書との連携が細かく配慮されている。中国では歴史は小6で週2時間、初級中学で週2時間、高級中学（高校）で週3時間の歴史の時間が割り当てられている。

初級中学の「抗日戦争」第一章の「蘆溝橋事変」の教科書を下記する。（小学校もほぼ同じ）

日本帝国主義は中国を独占し、中国をその植民地にするために長期間にわたって企んできた全面中国侵略戦争を發動した。1937年7月7日夜、日本軍は北京西南の宛平郊外で軍事演習を行い、一人の兵士が失踪したということを口実に、宛平城内で捜査を行うことを要求してきた。我が軍隊はこの無法な要求を拒絶したが、日本軍はそれを無視し宛平城に対し発砲を開始し、大砲による百数発の猛烈な攻撃を蘆溝橋に加えた。これに対し我が軍隊は勇ましく応戦した。これを「蘆溝橋事変」または「七・七事変」という。（真実は29頁の記事参照）

翌日、中国共産党は抗日の電文を発し、「平津の危機！、華北の危機！、中華民族の危機！、全民族が抗日戦争に立ち上がることだけが我々に残された道である！」と指摘し、全国人民が団結して民族統一戦線の強固な長城を構築し、日本侵略者を中国から追い出すことを呼び掛けた。

ネット

全国人民は中国共産党の主張を熱烈に支持し、一致して日本に対し戦争を開始することを要求し

た。華北の広範な人民は情熱な怒りをもって抗日戦争の戦列に加わってきた。・・・・・・

蘆溝橋の砲声と華北にあがった狼煙は全国人民を抗日救亡の道に導いていったのである。

ロコウキョウシュビダ

全国人民の強力な支持の下に、蘆溝橋守備軍の多くの将兵は日本の侵略者に勇ましく立ち向か

い、蘆溝橋をめぐる激しい白兵戦を展開した。しかし国民政府（蒋介石政府）は抗日戦争に対

して常に動揺しており、話し合いによる平和的な解決を夢見ていた結果、日本政府に援軍を増派

する余裕を与えてしまった。（蘆溝橋の戦闘は共産党が火付役で、戦闘には参加していない）

右の文章は中国の初級中学の「抗日戦争」の中の

第二節「日本軍の全面進攻と（和＝と）国民党的片

面抗戦」の文章の写しである。

ブンカダイカクメイ

中国は文化大革命以降、数千年も続いてきた縦書

ヨコガキ

テッテイ

カンリョクカ

の文章は横書となり、文字も徹底して簡略化して日

本の略字以上に变化した。私は中国・東方書店の辞

テッテイ

書「新華字典」で徹底して勉強し覚えた。

第二节 日军全面进攻和国民党的抗战

日军全面进攻和国民党的片面抗战 日本侵略者一心想吞并中国，狂妄地叫嚣三个月灭亡中国。1937年7月底，日军侵占北平、天津以后，即向中国发动全面进攻。在北方，日军分三路进攻华北，一路沿平汉铁路南下，窥伺河南；一路沿津浦铁路南下，进犯山东；一路沿平绥铁路西进，妄图占领山西等省。在南方，日军进攻中国的经济中心城市上海，威胁南京。他们妄想速战速决，迫使国民政府投降。

面临日本的全面进攻，8月14日，国民政府发表声明，决心“实行自卫，抵抗暴力”。接着召开国防会议，制订作战计划，划分战区，组织对日作战。但是，国民

中国初級中学の国定教科書の記述はこの程度で終わりとし、最後に感想を記しておきたい。

中国の歴史教科書で驚嘆することは膨大な戦争記述である。中国は紙も印刷も悪く、図や写真もはっきりしないから、内容を大量に載せて内容をわかりやすくしているようだ。南京大虐殺事件の生き埋めの写真などは、はっきり見えないだけに犯罪の残虐さを一層ひどく物語っていた。

第一に、大化の改新と明治維新の分量が多いこと。そして清王朝末期の諸改革の失敗と、全く同時期に帝国主義国発達していった日本との対比、さらに戦後の日本との対比が、中国の教科書に影響していると思われる。第二に、広島・長崎へのアメリカ帝国主義の原爆投下、及び日本全土空襲に対して明確な判断を避けている点である。第三に、日本は戦後の世界歴史に余り触れていない点である。朝鮮戦争、ベトナム戦争、米ソの覇権争奪戦、ソ連のアフガニスタン侵入など。

最後の私の訪中で中国の高校生に「日本人をどう思うか」と質問してみた。答えは軍国主義者が中国を侵略したが、一般の日本人はそうではないと思うと、教育されたままの回答であった。

「南京大虐殺事件問題」

トシカ フキウツ ギョクザツ スデ
歳換わり月移って昭和12年12月中旬に発生した「南京虐殺事件」は、既に65年も以前の
こととなり、戦争を直接体験した世代もほぼ交代して生存者は至って少なくなり、支那事変（日
中事変）に参加して生き残った我々将兵にとっても、実に遠い過去の歴史となってしまった。そ
イキ ハ コウタクミン
の中で一人息を吐いている人物が現中国首脳部、特に江沢民総書記である。彼は戦争は未経験者
で「南京大虐殺事件」を物語るに相応しい年齢層の人物ではなく、彼の「遠交近攻」策である。

「南京大虐殺」という文字が日本人の間で知られるようになったのは、連合国が日本のA級戦犯
サバ キョウ
を裁いた「東京裁判」以降だが、新聞も手に入らない時代でテレビもなく、それを記憶する日本
人も極く少数の者であったと思っている。中国戦線で戦っていた私さえも戦争中に聞いたことも
ない事件であった。「南京問題」が喧しくなったのは1982年に、中国への侵略・進出の表現
メグ ゴキウ ショウチョウ
を巡っての教科書誤報事件が起こり、その時分から侵略戦争の象徴のように中国側が「南京問題」
サツ
を騒ぎ出したのであった。

ショウカイセキソウトウ
事件当時の中国の支配者であった蒋介石総統（最高軍司令官）にしても、南京虐殺事件に対し
ナゼ
て「何ら」発言はしていないのは何故であろうか。それまでの米英仏蘭等の国との関係から見れ
センデン
ば不思議なことで、米国人宣教師ベイツまでが宣伝していないことも理解できないことである。

「虐殺事件」が事実であれば当時はまだ対米英戦争の4年も前のことでもあり、外国のメディ
シャンハイ ナンキン カンコウ タイザイ
アが上海・南京・漢口などの各所に滞在していたから、報道しないはずがない。日本でも政治的
ヘンケン ヒミツ ナガ
偏見をもっている団体の秘密機関紙なら報道したに違いないだろう。

モウタクツウ エンアン
毛沢東は事件のあった翌年の5月26日から9日間、延安の抗日戦争研究会で連続して講演し
ショウカイセキ センメツ
ているが、日本軍は南京を包囲してたにもかかわらず、蒋介石の中国軍を殲滅しようとしなかつ
たので我々は助かったと語っている。これは間接的に日本軍による「南京虐殺事件」がなかった
ショウメイ
ことの証明にもなる。

ショウカイセキ チョウカミンゴク トウ シンジュ カカリ ソム
蒋介石の中華民国側としても、「唐將軍」は南京の死守を命じられたに拘らず、その指令に背
ミス ヨウスコウ ハイソウ
き部下と市民を見捨てて揚子江（長江）を渡り、敗走したという不名誉な事実があり、「南京大
センデン
虐殺事件」を宣伝するわけにもいかず、宣伝をしなかったという側面があるのかもしれない。

私は平成7年(1995)に2回目の南京訪問の時に、単独で初めて「南京大虐殺記念館」を訪れている。その時の状況は詳細にわたり紀行文に掲載したから、ここでは虐殺記念館の状況を思い出しながら、自らの戦闘体験と重ね合わせて現在の感想を述べることにした。

堅牢極まる難攻不落の南京城壁を下から眺め、その頑健な城壁の上から下を眺望しながら、当時の市内市外に居住する一般住民の心境を想像してみた。彼らの耳に入ってくる情報は敗走に次ぐ敗走の蒋介石軍の退却に、浮き足立って安閑としては居られない心境であったことだろう。

群雄割拠の時代から何時の時代に於いても平和は長くは続かず、戦火の絶え間のなかった中国人は戦争には馴れており、情報も想像以上に迅速であった。上海戦以降の日本軍の猛追に敗走する幾百万の蒋介石軍と、幾百万の難民とが洪水のように合流して押し寄せてくる大群衆は、南京市民にとっては日本軍以上の一種の恐怖の敵であったと想像することができる。

日本軍が南京城を占領したのは昭和12年12月13日で、以降も戦闘は続いていた。それは南京防衛軍が降伏しなかったからである。日本軍は南京攻略前の12月9日に中国側に降伏を勧告した。南京は古都であり、貴重な文化遺産も多く、市民のことを考えると無血開城が得策だと、道理を尽くして勧告している。しかし回答はなく、唐生智司令官はいち早く逃亡した。

中国がいう「三光作戦」(焼き尽くす、殺し尽くす、奪い尽くす)とは、実際は中国から生まれた言葉であった。中国人の難民の波は大波で統制がとれず、警察力も全く無に等しい状態で、「三光作戦」は退却軍が難民に対するの常套手段であった。それが大きくなった暴力団が「匪賊」であり、集団で略奪・殺人・強盗などをする賊のことを言い、匪賊は平時でも珍しい存在ではなかった。私も中隊長時代に何回か城壁攻撃をした経験があるが、逃げる時には敵は必ず放火し、日本軍が占領しても使用できないように徹底して破壊したものである。それを日本軍がしたように見せかけ、「三光作戦」と逆宣伝しているのである。

中国軍の中には他の国の軍隊にはない「便衣隊」と「督戦隊」があった。「便衣隊」は平素は一般市民の服装をしているが、「イザ」という時になると隠匿していた兵器を持ち出して戦闘に参加するのであった。南京を占領して入城した日本軍が悩まされた一つがこの「便衣隊」で、一般市民か敵兵か見分けがつかず、難民とも区別がつかずに犠牲者が出たことは理解できる。

当時の中国人の生活程度は想像できないほど貧しく、当時の日本円にして一人一日の生活費はなんと「一銭」程度であり、日本人の約50分の1ほどの生活程度であった。だから一般市民は着替えは一着程度しか持っていない状態である。退却してきた中国兵は南京城内外の住宅に押し入り、軍服と着替えて一市民になるために住民との間に衣類の争奪戦が始ったのである。中国兵は鉄砲を持っているから、着替えの衣類を強奪するために殺人までして一般の市民になろうとして起こった犠牲者の数は、「背に腹はかえられず」で、戦闘以上の数だったと私は想像している。一方、「督戦隊」と言うのは、陣地を守っている兵隊が逃げ出したり、退却するのを防止するために配置した軍隊のことである。中国軍の独特の組織で他国の軍隊では聞いたことがない。即ち中国軍の陣地を守る兵隊は「前門の虎、後門の狼」と言う中国の諺の通りで、前進することも死、後退することも死で、一旦、逃げ出したら何をするか分からない。だから一般市民を殺してまでも服をはぎとって市民の格好をしたがったのであった。このような状況は私自身の眼で見ているから、南京戦の被害の水増しの大きいことは証明できるのである。（下は虐殺館の写真）

南京大虐殺事件は多くの書籍に書かれているが、虐殺記念館にはそれ以上の「大嘘」が並べられていた。南京の戦闘は蒋介石軍との戦闘で、現在の政権党の共産党は当事者ではなく、語る資格が存在しないのである。東京裁判に基ずいて書いていると言うが、現在、最も信用度の高い「ブルタニカ百科事典」には、軍人と市民を含め



て推定死者は約4万2千人と記している。（右上は首斬りの写真だが片手では絶対に斬れない）

（南京の占領は12月中旬で記念館に掲載された写真の大半は、上の写真同様に夏服姿であった）「南京虐殺事件」に関する記録や資料は日中（蔣政権側）共にとぼしく、戦後の極東国際軍事裁判の戦犯法廷においても、しばしば利用されたのは、「南京安全区国際委員会」の報告である。この報告は南京全市にわたった調査記録ではなく、「特別に指定された区域の安全区」とその周辺の情報が中心になっている。（私も訪れたが大体、市街の中心部分である）

当時は「安全区」とそれを管理する欧米人が、中国市民にとっては唯一の「救護者」とみられていたので、市内での日本軍の暴行については、なにかと報告をうける立場にあったのである。

その意味で、同委員会の報告も東京裁判の資料として採用されたが、その報告には、中国側が主張する三つの「屠殺期」(中国では殺人を屠殺と言う)にふさわしい情報は、全く見当たらない。

「安全区」委員会が記録する日本軍の暴状は、ほとんどが強姦と略奪に関するものであり、中国側がいう「大屠殺期」にあたる12月12日から12月18日までの間に、委員会が耳にした日本軍によって殺された中国人数は、14人だけである。(南京占領は12月12日)

略奪として記録されているのは、自動車5両、自転車6両、オートバイ数両、牝牛2頭、ブタ1頭、子馬数頭、米袋、ふとん500枚などであり、中国側が「悪虐非道」と強調し、また占領軍として全権をふるえる日本軍の略奪としては、みみっちさ(?)を感得させられる品目である。

中国側の「戦闘詳報」などは殆ど全部が台湾にあり、日本側の「戦闘詳報」を調査しても、虐殺はあったとしても万を超えない数字ではないだろうか。私の4年間にわたる戦闘体験から、戦場心理であっても、戦闘が一段落して落ち着けば、人間心理として虐殺する心理になれないと断言できる。南京で30万人の大屠殺(虐殺)が行われたことは、作り話に過ぎないと高言したい。

具体的な資料を持たない共産党政権下の中国側が、徐々に数字をつり上げてきて、最近では、南京のみならず日中戦争の死傷者が3千5百万といった風に、どんどん数字が膨らんできている。近年は日本の教科書にまで南京に関して介入するようになったが、総べての立場において日本に対する政治的立場を強め、弱腰の日本に対して経済的、道義的要求をすることが出来ると判断したからである。南京事件は歴史的な事実が発掘されたことによって論争が始まったのではなく、政治的な動機から論争が始まったということを、我々は常に思い浮かべていなければならない。

断じて南京問題では日本政府は負けてはならない。政治家とくに首相は南京問題でも堂々と論戦を受けて立たないから、「日本は力は持っているが精神力が弱い」となめられるのである。

江沢民は日本に対して事あるごとに「過去の歴史認識」を言う。彼は日本に対して述べる友好とは言葉ばかりで、永久的に和解するつもりはない。「歴史認識」と「謝罪要求」は彼らが絶対に手放さない切り札である。これを切ってしまうと、日本から旨い汁が吸えなくなるからである。

議論を吹かけられると反論はしない。脅かされるとすぐ謝罪する今日の日本を見ると、かつての日本軍の軍人精神というか、武士道精神は何処へ消えてしまったのだろうか。

コウタクミン

ヤゲン イツ

江沢民が常に言うところの「歴史認識」とか「過去を忘れず」というのは、史記の『野諺に曰

ゼンジ

コウジ

コレ

クンシ

オサ

ジョウコ

ミ

く、前事の忘れざるは、後事の師なり、是を以て君子の国を為むる、これを上古に観て、これを

トウセイ タメ

マジ

シンジ

セイスイ

ケンセイ

ギ

ワマミラ

当世に驗し、参うるに人事を以てし、盛衰の理をあきらかにし、権勢の宜を審かにす』から取り

出して述べていることのようにである。即ち、「前にあった事を忘れないでいれば、その経験は後

で行う事の手本になる」という意味だ。自己に対しての戒めであって他国に述べる言葉ではない。

【野諺とは、田舎のことわざ、通俗的なことわざ】【宜は、よい、よろしい、むべ、うべ、の意】

今日の我が国にとつては「南京の戦争」というのは、もはやジンギスカンによる「元寇の役」

のようなもので、65才以下の人たちはこの世に生を受けておらず、事件そのものを知らないば

かりか、聞いたこともない歴史上の事件である。そしてこれは歴史家や学者の研究範囲であり、

政治家や野次馬的報道機関の騒ぎたてる問題ではない。

中国の政治家は国民の意識を牽引するために、半世紀をとくに過ぎた事件を引きずってきて

いる。厳密に言えば、共産中国の現政権は日本に対して正当に主張できる立場にないのである。

1930年代は現在の台湾にある中華民国政府ということになるのである。

アジア最大の軍事大国・中国が、戦後五十数年も武力紛争を一度も経験していない日本に対し、

軍国主義の懸念を表明するのは、過去の土下座外交の遺産である。だから今日でも中国問題の専

門家が口を揃えて言うのは、今や日本は中国にとって金を取られるだけの存在、つまり「輕蔑」

の対象でしかなくなっていると言うことである。今の中国首脳部は昔のような「礼節」を尊ぶ中

国人ではなく、相手が弱いと見ると途端に豹変する非礼極まる無礼な人達である。

「国難に殉じた英霊」、我々の戦友の御霊が眠る懐かしい中国大陆の大地、彼ら英霊はその親

族だけのものではなく、我々戦友とは親兄弟以上の戦友の友情で強く結ばれていて、御英霊の方々

は我々そのものである。戦後の日本の政治家たちに御英霊は叫んでいる。『無法な強圧に屈する

な、謝罪外交は即刻中止せよ、傲慢に屈するな』と。

右手には「日中友好」を掲げ、左手には「倭奴」とか「鬼子」といった差別語を使い分けてい

る思い上がりも、いい加減にせよと言いたい。人間には自尊心があるのと同様に、国家、民族に

も誇りがあり、「友好」とは「属国に非ず」と述べて南京問題の締めくくりに辞としたい。

「ODA」(政府開発援助)

中国との国交が正常化した72年当時の日中関係は、今よりずっと正常であった。首相や政治家が靖国神社に参拝しても、非難することはなかった。又、歴史教科書についても今日のような属国視的な注文はなかった。中国が日本を敵視することを「国策」とし始めたのは、天安門(44頁参照)事件からであり、世論を反日一色にしたのは江沢民が国家主席になってからである。

中国戦線に出陣した我々は中国人民に対しては誰しも親しみを抱いている。そして日本が中国に悲惨な経験を強いたことも忘れてはいない。しかし今日の中国首脳のあるゆる行動を見ると、「友好関係」を続ける気はないと断言せざるを得ない。国交回復30年は、反対に「日中国交異常化」の30年とも言えるだろう。

戦後、日本から中国に供与された「ODA」の総額は約3兆円にのぼる。しかし中国側から謝意を表明されたことは殆どない。反対に中国では、未だに徹底して嫌日感情を煽る国定教科書を発行し、嘘八百の南京大虐殺を宣伝し、首相の靖国神社参拝に難癖をつけ、日本の歴史教科書を一方的に非難し、全く異常と言わざるを得ないのである。そこには「友好」の欠片も見えない。

中国の新聞雑誌などには「日本鬼子」という侮蔑した言葉が堂々と使われている。何処に日中友好の精神が謳われているのだろうか。中国人民は日本は悪魔の国としか思えないだろう。日本の低能な政治家連中は北京に詣で乾杯し、中国首脳の意見を拝聴することに熱を上げている。特に首相の靖国神社参拝に反対する公明党は、北京に平身低頭して点数を取る政党で、私は与党に入れるべきではないと憤慨している。

2000年度まで日本は10年連続世界一で毎年1兆円を超すODA予算が組まれ、中でも最も援助額の大きい国の一つが中国であり、79年以降の約22年間で約3兆円にもなる。その血税3兆円は何に化けたのか。ODA白書によると、上下水道、道路などの都市のインフラ整備から始まって、ダムや空港、病院から学校等である。それも貧しい内陸部ではなく、富裕層の住む沿海部に集中しているのが特徴である。集中的に援助を受けている北京は、成田よりも大きい北京首都空港に300億円、航空機管制設備に210億円、鉄道と地下鉄網に1000億円以上が援助されている。援助の総計4000億円は北京の1年間の予算に匹敵すると言う。

日本政府はODAの大義名分として、「中国との友好関係の維持、発展」を掲げているにもかかわらず、日本の援助を中国人民は知らないのである。否、私は知らさないからだと思っている。日本の援助はODAだけでなく、旧日本輸出入銀行の公的資金供与を合わせると、6兆円にもなる。それに対し中国政府は援助は広報しないばかりか、小学校から反日教育をたたき込んでいる。そして日本人を今でも倭人（中国人が日本人を侮蔑して呼ぶ言葉で、みにくい意）と称し、人間より禽獣に近い存在の「東夷」（夷はムジナ）だと思っている。最近では教育の成果があがって低年齢までが、「日本人は劣等民族だ、野蛮だ、残忍だ」と信じている。いったい何が「日中友好」と言えるだろうか。戦争を体験した毛沢東や鄧小平は反日、嫌日ではなかったが、戦争を知らない江沢民が国家指導者になってから反日となり、彼こそ中国史上最大の反日指導者である。

中国政府は日本からODAを引き出すために、反日を「ゆすりたかり」の戦術とし、反日カードを使って日本に謝罪、譲歩、屈服させ、さらに一步進んで日本を属国化させようとする戦略も見えている。これらは江沢民の政権安定のための窮余の一策である。

日本政府にも大きな責任がある。中国は89年以降、毎年2桁の伸びで軍事費を伸ばし、今年の国防予算は2兆6000億円である。日本のODA予算も軍事費に流用される怖れがあるのに、放置している。ODAには、軍事的用途への使用禁止、大量破壊兵器やミサイルなどの開発の動向に注意を払うという原則が定められている。本来なら、核を保有し、近隣諸国に軍事的脅威を与えている中国に援助を行うことは、原則を逸脱しているのである。

笑止千万なことにも、日本から2000億円ものODAを受けていながら、中国はアジアの別途上国に5～600億円の援助を行っている。更に申せば、中国は今や、対日の貿易黒字が年間3兆円にもなるほどの国である。どこから見ても援助の必要がないことは明らかである。

ODA予算をどのように見るか。これは政治家の戦略能力を判断する上に最も良い方法である。核弾道ミサイルの照準を合わせられている日本、さらに言われるままに3兆円を垂れ流したODAの歴史、不審船引き上げ交渉の際に、中国は数億円の漁業補償金を要求したが、貰い癖を付けたのは日本である。対中ODA予算のばら撒きの歴史を断ち切れるか、どうかは、対中政策の最大の問題である。我々は日本のODAの改革、透明化、効率化、重点化を考えなければならない。

「瀋陽日本総領事館事件」

5月9日午後2時ごろ、^{シンヨウ}瀋陽市（旧奉天）の^{ホウテン}日本総領事館に、^{ソウリョウジカン}亡命目的の^{ボウメイ}北朝鮮住民と見られる5人が^カ駆け込んだ。^コ3人は入り口で中国の人民武装警察官に取り押さえられたが、残る2人は^{シンセイ}同館のビザ申請待合室まで入ったところで、^オ追いかけてきた武装警察官に連れ去られた。中国側の行為は、^{フカシン}領事機関公館の不可侵を定めた国際条約違反であり、^{クニオ}同大使館の高橋邦夫公使は同日夕、^{キョウショウホウ}中国外務省の邱紹芳・副領事局長に対し^{コウギ}強く抗議するとともに、二人の引き渡しを要求した。

この記事は2002年5月9日木曜日の読売新聞朝刊の記事である。

この生々しい映像はテレビによって全国、否、全世界に流され、^{ツンボ}聾の私さえも画面で真相は把握できた。

現代の日本（日本人）の^{オチイ}陥っている病巣を余すところなく放映したのは、日本の共同通信と^{レンゴウ}韓国の聯合通信であった。自国の主権を守るとい



^{キガイ}う気概も、命をかけて助けを求める人を救済する人権意識もないことを全世界に晒した日本は、^{ハゲ}激しい抗議も鼻でせせら笑われ、^{ハナ}逆に中国から反撃を食らう有様であった。本年9月をもって日中国交30周年を迎えた日本外交の前途は誠に厳しく、それでも年間2000億円、^ク累計3兆円のODAを中国に垂れ流している日本は、^{クビ}頭が狂っていると言わざるを得ないのである。

（上の写真は^{シンヨウ}瀋陽日本総領事館に入ろうとする北朝鮮人と、これを阻止する中国武装警察官）
憤慨しながら映像を注視し、昔であれば即刻、^{ツンボ}国交断絶して開戦という大事件となるはずであったと、^ナ中国に舐められていることが悔しくてたまらないのであった。現代の日本人は国家観念が全くない。昔の日本は、国があって国民があった。今の日本は各個人があって国はなく、国はただ各個人が利用するたけの存在に過ぎないと思っているようだ。これは戦後のアメリカの日本人無能力化政策の結果で、それに付随した日教組の教育の悪業の成果である。日教組に教育された70才以下の日本人の脳内をもう一度洗脳し、^{フズイ}日本国、^{ニッキョウソ}日本人の自覚を促したいものである。

事件の状況を記述する前に、先ず「ウイーン条約」や「亡命」等について説明する。「条約」は国家間の、または国家と国際機関との間の文書による法的な合意である。「領事」は外国に駐在し、自国の通商の促進と在留自国民の保護にあたる者のことで、通常、階級として総領事、領事、副領事などの別がある。領事館は領事が駐在国においてその職務を行う役所である。

「ウイーン条約」は1814～15年に「ウイーン」で開催された会議で締結された条約で、公館の「不可侵権」を保障した領事関係に関する条約である。「亡命」は、文字通り命を亡くすことも覚悟した、必死の決意と実行である。即ち、民族・宗教・思想・政治的意見の相違などから、自国において迫害を受け、または迫害を受ける危険があるために、外国に逃れることである。

今回の瀋陽総領事館事件は、北朝鮮人5人が日本総領事館に駆け込んだものの、不可侵の領事館内に5～6人の中国武装警察官が侵入し、連行を阻止しようと追いつがる副領事を無視して行動し、北朝鮮人を連行したのである。副領事は「日本の総領事館に来た人たちだから、日本側で事情を聞く」と中国語で警察官たちに呼びかけたが、警察官たちは一顧だにしなかったという。

事件が起きた8日午後2時ごろ、館内にいた男性副領事が大きな女性の叫び声を聞きつけ、門のところに駆けつけると、年配の女性と若い女性の二人と幼児が門前で武装警察官ともみ合いになっていた。もみ合っている間に、男性二人は約40メートル離れた同館一階のビザ申請待合室のベンチのところまで入った。武装警察官5～6人が待合室の小さな扉から踏み込んできて、男性二人を連行した。警察官は門前の3人と館内にいた2人を、門の外側にある警官詰め所に押し込めた。日本の領事館が行った説明では、領事館職員は武装警察に対して移動させないように求めたが、武装警察側は聞き入れず、午後3時ごろ、瀋陽市公安当局のワゴン車に乗せ、連行したという。高橋公使は邱副領事局長に「中国側の対応は極めて問題であり、非常に遺憾だ。武装警官が日本側の同意がないまま総領事館内に入ったことは事実であり、『領事関係に関するウイーン条約』が定める領事機関の公館の不可侵に違反する」と抗議した。

公使たちの処置は手緩い抗議である。館内に不法に侵入したことは事実であり、北朝鮮人5人を日本側に引き渡すことを強硬に要求すべきであった。小泉首相までが、日本の立場もある。中国の立場もあるから、日中関係を阻害しないように対応すべきだと述べたが、呆れた事である。

事件発生当時、総領事館副領事が中国武装警官が落とした帽子を拾いあげ、中国の武装警察官に手渡した行為は私もはっきりと見ている。何故、副領事は国土と同じであり、治外法権の領事館の敷地に入った中国警察官の帽子まで拾って手渡したのか、本来ならば副領事は体当たりしてでも察官を館外に排除しなければならない。そうしなければ「不可侵権」を守れないのである。館員たちには国土、国益を守る最大の義務と責任があり、国家意識が全くないことを強調したい。この初期動作のまずだけでなく、中国に調査結果公表まで先を越されるなど、多くの対応が後手に回っている。瀋陽亡命者連行事件は、日の経過とともに次々と新事実が明かるみに出て動揺を隠せない日本側に対し、中国側は一方独裁国家特有の情報統制で一枚岩の主張を展開した。最初の強烈なカウンターは、武装警官の総領事館立入りには「同意があった」と発表したことである。日本の外務省の調査団が瀋陽に入る直前で、日本側は完全に出鼻をくじかれた。その後も中国側は、日本側が亡命意思を記した文書を北朝鮮住民に返したことなど、新事実を次々と公表した。いずれも日本側の調査結果にはなく、しかも、日本側がその事実を否定できないものだった。これは日本の調査結果を精査した上で、その信頼性を揺るがせる効果を持つ情報をぶつけてきたと言える。事件発生以来、外務省が発表した内容は悉く中国側に反論され、逆にさらなる新事実を突きつけられている。

ここで改めて中国の情報収集力の凄さを見せつけられたのであった。「大使館や総領事館の情報はすべて筒抜けで、こんな丸腰で太刀打ちできるはずはない」。中国では、外国大使館や報道機関の電話がすべて盗聴されていることは国際的な常識だが、日本の大使館にはその危機意識や対応策が全くない。例えば今回の事件で分かるように、来館者はすべて武装警察官が誰何し、事実上、公館の出入りはコントロールされている。そして公館勤務の中国人職員も、すべて公安局の外局である外交人員服務局から派遣されている。当然、目的は公館内での情報収集である。だから情報管理に厳しい米国の北京大使館などは、館内で中国人職員が出入りできない場所をあちこちに設け、がっちりと情報をガードしている。しかし日本大使館では、たとえ会議中であっても、平気で中国人職員が出入りし、「聞き耳」を立てている。日本の外交官には、国益がぶつかるという危機意識が全くなく、極秘電報の中身まで中国に把握されているのである。

今年3月14日、北京のスペイン大使館に25人もの北朝鮮亡命者が駆け込んだ事件は記憶に新しいことである。この直後、外務省は在外公館宛に極秘電報を打っている。外務省の説明では、「日本の入管難民法は、日本に来て難民申請をした人間だけに適用され、在外公立館への亡命者には適用されない」。つまり在外公館では対応すべき法律がないから、場当たり的に処理するしかないのである。そこで外務省はスペイン大使館亡命事件を受けて、不審者はビザ申請に来たのか、そうでないのか身分を確認するまで入館させてはならない、という極秘指令を公電で打ったのである。入口でチェックせよ、不審者は入れるな、即ち身分を明かせない北朝鮮の人間は絶対に入れるな、と言う意味である。阿南大使が「不審者は追い払え」と訓示した背景には、この公電があったのである。その公電内容がすべて把握されていたのだから、中国側が強気に出るのも当然である。この瀋陽事件で間髪を入れずに反論してきた中国の組織に対し、日本は丸裸である。

しかし今回の亡命事件では、中国がすべての秘密を把握していたとしても、事件以来の繰り返し流されたビデオテープが歴然として存在している。映像のおかげで主権侵害は明白だと分かった。そこで現状復帰と謝罪は断固として要求しなければならない。ところが中国は、「ウィーン条約31条2項（火災その他迅速な保護措置を必要とする場合は敷地侵入が許される）」で、逃げ切ろうとしたのである。しかし、日本が「立入りに同意はない」と表明したから、今度はむきになって、「同意はあった」とでてきた。又、日本人職員が「謝々」と頭を下げたり、武装警官を手招きする場面がないことも確認できたと聞いている。

我々のように生命を犠牲にして戦闘に参加した者にとっては、あの映像を見て悲憤慷慨しなかった人は皆無であったことだろう。金銭的な報酬など一切なく、ただ国家のためと一心不乱に戦った人たちのことを回顧すると、日本人も落ちぶれた者だと嘆くのであった。特別待遇の高額の報酬に報いられ、優雅な生活に慣れて国家を忘れた外務省関係の者共よ、恥知らずもいい加減にせよと絶叫したい。『外交とは、外国の意向に従う「友好」だけではない』のである。

他国との対立を恐れていては、国民と国家の利益を守る真の外交はありえない。とはいえ我々の時代であった戦前のように、軍勢力を背景にした砲艦外交を推奨するのではなく、現実には日本が使える「干戈を交える以上の知力と根気」と「相手を怖れない度胸」が必要である。

「領事館の安全を守るため、国際条約に基^{モト}づいて行った」、と中国武装警察官が「日本総領事館に進入^{ツ ハ}」した行動について、中国外務省報道局長が公式見解を示し、日本政府の抗議を突^ツき撥^ハねた。武装警官の行動を一旦、正当化した中国が「条約違反」を認める可能性は殆^{ホト}どない。

中国では「誤^{アヤマ}りを認めることは、批判の対象になり、政治的責任を取らされることを意味して^{ミト}いる」うえ、今回の事件で、矢面^{ヒハン}に立たされている「人民武装警察部隊」が、軍の最高統括権^{タイショウ}を^{ヤオモデ}持っている。うえ、今回の事件で、矢面^{トウカツケン}に立たされている「人民武装警察部隊」が、軍の最高統括権^{トクシユ}を持つ中央軍事委員会の指揮下にあるという特殊な事情がある。絶対的な権力を持つ軍部を前に、「中国外務省が武装警察に遠慮^{エンリョ}せざるを得ない状況^ユ」と言われている。それほど軍部は強いのである。だから1989年の天安門事件でも、一般住民を武力弾圧したことについて、未だに正し^{イマ}なかったと正当化し、評価を変えていない。「人民武装警察」は中央軍事委員会直轄の「軍隊」であり、肩に階級章のある軍服をまとい、暴動や反乱を鎮圧する役目を負っている。つまり、日本の領事館は中国の軍隊に侵攻されたことになる。これを中国は、「敷地内には副領事の許可を得て入った。日本側は連行に同意し、謝意を表した」と譲らず、真^マっ向^{コウ}から対立したのであった。日本以外に対して、こんなことをしたことはないのである。

「外交機関は治外法権であることは、子供でも知っている筈だ」。それを平気で踏み^{ヘイキ}にじ^フったのは、日本が相手であったからである。「遠交近攻」策を国是とする中国は日本を叩いて馬鹿にし、反感をぶつけ、それを続けても大丈夫なことを知っている。どんな悪口を言っても、日本では朝日新聞のような共産主義を信奉するメディアが支援してくれる。政治家では橋本龍太郎を始め野中広務、公明党や保守党の親中派がいるから、何とかなっているようだ。

誇^{ホコ}りも主張もない日本の今までの謝罪外交の歴史から、何時の間にか隷属国家に成り下がってしまった。日本の外務省は唐突に再反論すれば、中国が態度を硬化させることを懸念していると発表した^{ヨウゴシ}が、このような弱腰外交は「戦後日本」そのものである。

瀋陽日本大使館事件と同じ日に起きたアメリカ大使館でもカナダ大使館でも、みな身柄を握^{ニギ}っており、握った方が主導権を持つのは当然である。愚かな日本政府や総領事館は中国に身柄を押さ^{ミガラ}えられた後の段階で、主権問題を持ち出したのでは手遅れである。これでは国際法も国際慣習も役に立たない。各国の毅然とした態度がウイーン条約をルールたらしめているのである。

戦前の外務省や外交官、海外の領事館関係者は、常に大日本帝国を代表しているという気概^{キガイ}を持って職務に精励^{セイレイ}していた。彼らは軍部以上に国家意識^{ダンブ}が強烈^{キョウレツ}で、軍部が弱音^{ヨワネ}を吐くと叱り飛ば^{シカ}すほどであったと聞いていた。私が中国戦線に従軍していたとき、河南省都の「開封」^{カイフウ}には領事館が設置されていた。領事館には領事館警察があり日本国内の警察と全く同様の権限を持っていたようである。

今回の瀋陽総領事館事件で初めて私は「チャイナスクール」の存在を知り、国を代表する日本の外交官のお粗末^{ソマツ}を知らされた。中国の武装警察官の帽子^{ボウシ}を拾った副領事をはじめ、自分等の調査結果^{コトゴト}を悉く中国側に覆^{クツガエ}され、反論もできない醜態^{シュウタイ}は国益を守る能力があるとは思えない。ただ「チャイナスクール」の存在と悪弊^{アクヘイ}が明らかになったことだけが、今回の事件の成果^{セイカ}である。

「チャイナスクール」とは、外務省の中で、中国語の語学研修を現地で受けた者たちのことである。キャリア外交官は北京大学などで2年間研修し、その後、1年間の欧米研修を経てから外交官生活に入る。毎年、キャリアが2、3人おり、中国はその語学研修、つまり将来、外交官とな^ヘって対中外交を担うその卵^{ニナ}たちを、この留学生の段階から手厚く待遇し、完全な親中派にして日本に返すのである。彼らが対中土下座外交の中心である。

【キャリアとは、日本の中央官庁で国家公務員試験Ⅰ種合格者である者の俗称】^{ソクシヨウ}

共産圏の外交官取り込み工作は有名で、特に中国はこれが手厚いようである。このことは私が中国戦線で戦っていた時分の中国・各省・各県の役人たちも、同じように我々将校を優待^{ト コ コウサク}していたから、接待は中国の伝統である。これは接待される側の心の強さの問題である。

「中国にとっては、語学研修生時代が自分たちに有利な代理人になってもらう絶好の時である。^{ケンシュウセイ}寮^{リョウ}での生活に便宜^{ベンギ}をはかり、食事を共にし、旅行のときは豪華なホテルを用意し、もちあげ、2年間の研修^{ケンシュウ}が終わったときには、すっかり中国ファンにしてしまう」という。こうして純粋培養されたチャイナスクールの面々は、帰国後、そのグループの「掟^{オキテ}」を学ぶことになるという。

チャイナスクールを作ったのは日中国交回復時の外務省中国課長で、田中角栄を動かして国交回復^ナを成し遂げた。外務省の中でもチャイナスクールだけは異質^{イシツ}で、中国大使になるのが最高峰で、他に潰しがきかず、そのために中国政府の代弁者になるのが、最も早道^{ツブ}のようだという。

彼らが行ってきた売国的行為は枚挙に遑がない。「靖国問題」で小泉首相の8月15日の参拝を13日に変更したのも、「教科書問題」でも、ひたすら中国の顔色を窺いながら交渉したのも、みな、ひれ伏してきたチャイナスクールの仕業である。

要は、彼らにとって重要なことは、自分たちの出世と中国の利益である。お陰で3兆円という巨額のODAが延々と中国に垂れ流され、それでも感謝されるどころか、対日感情は悪化するばかりだから、日本国民は救われない。日本よりも中国の方を向いている彼らの自覚を促したい。

今、キーを叩いている10月17日は、24年前に北朝鮮に拉致された5名の同胞が帰国し、それぞれの故郷に里帰りした日である。そこで「北朝鮮亡命者急増の背景」を見てみたい。

北朝鮮住民が中国へ大量に脱出する背景には、1990年代に入って深刻化した食糧難がある。北朝鮮の食糧配給システムの崩壊を受け、住民たちは飢餓から逃れるため中国に次々に脱出し、現在、中国滞留中の北朝鮮住民は3万とも30万とも言われている。瀋陽事件では脱出者が亡命を求めて第三国の在外公館に駆け込む手法を取って注目を集めたが、事件の根幹には金正日体制が自国民の飢餓を防げないという厳然たる事実がある。

北朝鮮は1990年代半ばまで配給を維持しようとした。しかし、金日成の死後、金正日が権力を握ってからは全住民に対する配給を事実上放棄し、労働党員などエリート階層だけに配給するようになったと言う。一般住民が自力で食糧を求めるため全国各地を放浪するケースが増え、対中国境に接する住民たちを中心に危険を承知で中国へ脱出。中国在住の朝鮮族の助けを受けながら仕事をし、機会を見つけて韓国に亡命するケースも増え始めた。

亡命者の話では、最近では北朝鮮側の国境警備も緩み、中国で食糧を求めたり、働いて帰ってくる分には特に処罰されず、黙認されている。ただ、韓国などへの亡命を求めて関係者に接触したことが分かったと、収容所に送られると言う。最近、脱出者が中国当局の手で北朝鮮に送り返されながら、再脱出をするケースが見られるのは、このためのようである。

北朝鮮は瀋陽事件に一切反応していない。政治性の強い事件には反応するが、一般住民の亡命には沈黙している。一般住民は放置し、脱出者は半ば「棄民」扱いである。食糧危機を放置し続ける限り脱出は増えるだろう。北朝鮮国内に膨大な脱出予備軍がいるだけに、問題の根は深い。

『あとがき』

『人生は白駒の隙を過ぐるが如し』は宋の太祖の言葉で、「人生は、白馬が走り過ぎるのを隙
間から見るように短いものである」（白駒は光陰のことをも指す）と言う意味である。早や日中
国交回復から30年も経過し、その感想でも記述してみようかと本年の七夕の日、即ち、蘆溝橋
事件発生の記念日に執筆を決意した。しかし鈍才が毫碌して其の上に諸病が重なり、「割った茶
碗をついで見る」（すんでしまったことに糸練をのこすこと）のような事になってしまった。

戦前と戦後を比較すると戦後の人物は侏儒（見識のない人をののしって言う語。こびと）化し、
日中の為政者ともに小粒ばかりのような感じを受ける。戦前では先ず筆頭に「孫文」をあげたい。
彼の有名な「大アジア主義」は、「アジアは一つ、アジア人のアジアを目指せ」と、日中の一体
性や団結を訴えた。中国国民党の創設者でもあり、その大志は我々少年まで引き付けていた。

次いで国民党を引き継いだ「蒋介石」である。中国軍の最高指揮官として南昌軍官学校の卒業
式の訓示で、「敵か友か」と題して概要、次のような訓を述べている。『日本は果たして敵か、
はた又友か？。日本軍の忠誠度、精強さ等は拔群で正に好敵手、されば全智全霊（その人の持つ
ている知力・精神力のすべて）を以て戦うべし。然し日本人は同じ東洋人として、又永久に隣人
として友と見るべきである。現状軍事に関しては全力を以て戦うべし。されど中日百年を配慮し
た場合、日本人は友として遇すべし』、と強調している。戦いの半ば、正に酣の時機に出征する
軍人に述べた最高指揮官の言としては、歴史の中に他に見られない訓示である。その自国民に対
する信頼と、高邁なる隣人愛が躍如として表現されている。「遠交近攻」の逆である。

終戦時に『怨に報ゆるに徳を以てせよ』と大号令を発し、説諭されたことは有名である。また
ポツダム宣言に基づいて日本への占領軍の派遣が問題となった時、「中国が占領に参加すれば、
ソ連の日本北部占領を許すことになる」と中国軍の日本進駐を拒否している。又、日華平和条約
（台湾）では賠償の請求権を放棄するなど、隣国日本人に対し愛情に徹していた哲学には、我々
日本人は永久に感謝しなければならない。（偕行14年8月号参考）

共産党と内戦を戦って敗れた国民党の蒋介石が、大陸を追われて台湾に逃れる一年前に行った
演説の一節に、「古今東西のいかなる革命政党といえども、今日の我々ほど腐敗した党はないし、

今日の我々ほど（国民党軍のこと）^{キリツ} 気力も^{ゼヒ} 規律も是非の^{キジュン} 基準も存在しない党はない。こんな党はとくに淘汰、消滅されてしまうべきだったのだ」と述べている。第二次大戦が終わった時点で、共産党に対して圧倒的な勢力を保持していた国民党が、内戦が始まるやたちまち一敗地にまみれたのは、その余りの腐敗ぶりが国民に愛想をつかされたからであった。

又、蒋介石の東京裁判に対する態度は、「憤怒は他人にとって有害であるが、憤怒する人にとってはもっと有害である」との精神を貫き、我々日本人の感謝的となったことは忘れられない。

共産党が大陸を征し、中華人民共和国を建設して半世紀が経過した。私が最初に訪中した昭和55年（1980）から毎年訪れてきた感じでは、毛沢東時代は半鎖国的状態の国家であった上に、更に彼は神格化されていた感じが強かった。味噌を付け始めたのは文化大革命からであり、彼も漢民族である証拠に「中華思想」を遺憾なく発揮した。毛沢東は一旦はチベットの独立を認めた発言を取り消して軍事侵攻し、100万人以上のチベット人を虐殺し、六千の僧院を焼き払い中国の領土とした。中国の数千年の歴史は常に国土の版図の拡張であって、人間の幸せの発想はなかった。周辺の少数民族をいかに征して版図を拡げたか、それだけであった。

文革の基本にあるのは教育の軽視、否、打ち壊しであった。高校を卒業すると2年間、頭脳の最も発育する時に下放といって農村に行き農作業に従事しなければ大学受験の資格がなく、嫌でも下放したのであった。国家百年の計の教育を忘れて国の将来はどうなるのだろうか。

毛沢東の死後の激動の記憶はなお新しい。1ヶ月も経たないうちに夫人を含む側近四人の最高幹部が逮捕、投獄という凄まじい権力闘争が演ぜられ、古代王朝の権力闘争も顔負けであった。

次の鄧小平は3回の追放から権力を強奪し兵で、四つの現代化を示して経済改革に取り組み、社会主義的市場経済なるものを発案した。長征から戦後の内戦を体験した彼も中華思想の権化であった。ベトナムを懲らしめると称して中越戦争を開戦したが、米軍との戦闘経験が豊かなベトナム軍に大敗した。このためであろうか、彼は毛沢東ほど神格化はされていない。

三代目の江沢民は日本人の一人として私が評価すれば、「桂馬の高上がり」である。中国の政治家として最も不適任だと感じている。『人間の中で一番完全な人間は、凡ての隣人を愛し、善を行うことである』と宣言した、「マホメット」の教えを彼は知らないのだろうか。

ヤスクニ トウカセン ヤスクニ ヤ
靖国神社問題で最も侮辱されたことは唐家璇・中国外相の「首相の靖国神社参拝を止めなさい」

と命令形で発言されたことである。中国が日本の首相に命令したことは、「驕も舌に及ばず」と

論語に論じている通りで、一度口から外へ出した言葉は、これを取り消そうとして四頭立ての馬

車で追いかけても取り返しがつかない甚だしい侮辱である。我らの戦友の御霊を祀る神聖な靖国

神社を何と心得ているのか。日本にはA級もB級もC級も戦犯は存在しないのである。

彼らは階級闘争史観に立っており、歴史解釈ではつねに、一握りの反動分子（悪者）と多数の

善良な人民大衆という構図が前提になっている。中国側の論理を受け入れることは、過般の戦争

は一部の悪玉にそそのかされて起こったことになる。日本の歴代首相は腰抜けばかりで、日本は

日本だと何故反論できないのか。「嘆かわしい過去を見返る勿れ、それはもはや永久に振り返ら

ず」だと、戦後の日本の平和に徹した点を評価させなければならない。

南京問題や教科書問題、その他の問題にしても、「日中友好を第一」と考えるならば、将来に

向かって「手打ち」する時機は「30周年記念」の今ではないか。「過ぎたるはなほ及ばざるが

如し」（過大に取り上げられている諸問題に対し）と言う教えの通り、戦争を知らない世代が大

部分を占める両国民に、良い結果をもたらすことではないかと思うのである。

大陸に渡った昭和13年（1938）以来、64年間も見聞してきた中国のことは、誰よりも

関心が強い私は、「土匪の国」（土着民が武装して集団で略奪暴行する国）の時代から知ってい

る。人間と家畜が同居していた不潔な国が革命後、突然「蠅も蚊もない中国」になったという

宣伝を聞いて、相変わらずの嘔吐きに不信を抱いたことも思い出される。

数千年の中国の歴史を代表するのが「中華思想」である。南蛮・西戎・北狄・に次いで東夷の

日本は禽獣に近いものと反日以上の「蔑日」で扱われてきた。一時鳴り潜めていた中華思想が

息を吹き返し、改革・開放の成果が出始めた江沢民が主席になってから、反日一色に塗り潰され

た。そして「中華民族の偉大な復興」のために「富強」大国を実現することを、憲法にも国家目

標として明記した。市場経済体制への移行からの経済発展は驚くべきものがあり、私の目を疑う

ほどである。しかし「富める者はますます富み、貧しい者はますます貧しくなる」格差拡大が深

刻化して、貧困と失業などの不安になやむ農民や労働者など、弱い者を無視することはできない。

北京や上海の高層ビルが櫛比（くしの歯のように隙間のないこと）して林立する映像を眺めて
 今昔の感に堪えない。資本主義経済の経験の浅い中国でも現在がバブル景気の全盛時代ではない
 だろうか。競争原理が推進力となる市場経済体制への移行によって経済を発展させ、国民生活の
 全般的な向上を実現させたのは、自分だという「江沢民」の自惚れと、日本への「競争心」が重
 なって日本攻撃を続けてきたのでないか。私は経済の素人ながらそのように推察している。
 かつてカルタゴの繁栄がローマの嫉妬を買ったように、敗戦国日本の繁栄が江沢民の癪の種子
 であり、それも反日感情を増幅させている原因の一つであろう。自尊心の高い中国共産党は中国
 政治の圧倒的存在で、党員数も文化革命直後の3千5百万人から6千6百35万人に増やしてい
 る。それを誇示し、国民の共産党離れにも歯止めをかけようと、「遠交近攻」の外交戦略は当然
 は続けるだろう。中国の繁栄が日本の繁栄を上回るまで、江沢民やその後継者も日本を敵視して
 反日、侮日は残念ながら続くだろう。これは日中戦争前の支那の戦略と同様である。
 今や世界は隣国同士が相争う時代ではない。先人の孫文や蒋介石の述べた（86頁）ように隣
 人を愛し、世界の趨勢のように東アジアもEUのようにならなければならない。日中国交回復し
 と当時、両国で盛んに謳歌した「唇齒輔車」（互いに相寄り相助け合う）の関係を取り戻したい。
 「生き身は死に身」と言うように、生物はずーと行き続けることはできない。『魏志、田予伝』
 には『鐘鳴漏盡』と書いてある。「鐘鳴漏盡（尽）」は「鐘鳴り漏尽く」と読む。「鐘」は点鐘
 とか晩鐘といって時刻をつける「かね」のことである。「漏」は雨や水、光がもれることで、仏
 教では「煩惱」のことを言い、「漏盡（尽）」は時刻が尽きること、煩惱がことごとくなくな
 ることを言う。『鐘鳴漏盡（尽）』とは、時を知らせる鐘が鳴って、水時計の水が尽きること
 である。即ち、残された年月が余りないことを言う。これからも、この辞を噛み締めて行きたいも
 のである。（孫の要請で漢字にはカタカナを付す）『平成14年（2002）10月25日記』

寺 前 信 次